

# 魔導士ルーファス2

秋月あきら

## 第六話 未知との遭遇

玄関のベルが鳴り、ルーファスはドアを開けた。

「ルーちゃんあーそぼ」

現れたのは今日も笑顔全快のビビ。

ルーファスはあからさまに嫌そうな顔をした。

「明日、追試があるから勉強しなきゃいけないんだ（昨日も口々に勉強できなかったし）」

「えーっ、勉強なんてしなくても結果は同じだよ」

「それってどういう意味？」

ビビはひとつ咳払いをして、ファウストのモノマネをした。

「赤点決定だ！」

「追試で赤点なんてシャレにならないから（今のモノマネぜんぜん似てないし）」

「いいじゃん、遊びに行こうよ！」

ビビに腕を引っ張られたルーファスが苦痛を浮かべる。

「うっ！」

決してビビが怪力だったというわけではない。

「どうしたのルーちゃん？」

「筋肉痛なんだ（運動した覚えなんてないのに）」

ローゼンクロイツが出てきた夢を見た後から、どういいうわけか筋肉痛だった。

筋肉痛だつて言ってるのに、それでもビビはルーファスを外に連れ出そうとする。

「筋肉痛くらいじゃ死なないから平気だよ」

「死ぬか死なないかって極端だし、追試の勉強があるって言うてるじゃないか」

「アタシいいこと考えちゃった！」

自慢げに鼻を鳴らすビビ。物凄くイヤな予感がする。

ルーファスは無言で玄関を閉めて、ビビを外に閉め出した。

もちろん力ギも掛けた。

これでビビが“いいこと”を言う前に防げた。

でも代わりにドアの向こうでビビが喚き出した。

「ひっどーい！ ルーちゃんバカ、シネ！」

ドアを殴る蹴る。家ごと壊しそうな勢いだ。

ルーファスは聴こえないフリをしてソファに座った。

「あー聴こえない聴こえない」

両耳を塞ぐと、本当に聴こえなくなった。

「……あれ？（案外すぐに諦めた？）」

が、ルーファスの前に現れるピンクのツインテール。

「ちゃちゃ〜ん、ビビちゃん登場！」

「うわっ！」

驚いたルーファスはソファごとひっくり返った。床に後頭部も打ってこれは痛い。

倒れたままのルーファスの真横に立つビビ。ミニスカからパ

ンツが見え……。

「ルーちゃんのえっち！」

スカートを押さえたビビは手短な魔導書を投げた。もちろんルーファスの顔面にヒット。

「ぐわっ！」

これも痛い。

顔面強打、後頭部強打、筋肉痛も酷い。どういうわけかルーファスは日ごろから怪我が耐えない。

ソファを直すルーファスも辛そうだ。

やつのことで直したソファに腰掛けるルーファス。目の前にはビビ。こうなったら、もう“いいこと”を聞くしかない。

どうやって家に侵入したか、それを聞かないのは、侵入されることがごく日常の出来事だからだ。どっかの誰かさん、具体的に言うとかーシャのせいで。

「でさあ、いいこと考えたってさっき言ってたけど……？」

「聞きたい？ どうしてもって言うなら教えてあげてもいいかなあ」

「じゃあ教えてくれなくていいよ」

と、ルーファスが言った瞬間、ビビは空のマグカップを握って振り上げた。無言の脅しだ。しかもビビちゃん満面の笑み。

ルーファスは顔を引きつらせた。

「お、教えてくださいお願いします（ってなんで頼んでるんだ）」

それは脅されてるからだ。

「では、発表します！ アタシがルーちゃんの筋肉痛を直してあげる！（一度、人の身体をボキボキって鳴らしてみたかったんだよねー）」

「整体っていうか、ビビがやったら粉骨。そもそも筋肉痛は整体じゃ治らない。」

「丁重にお断りします。私はこれから勉強があるんだ、さっ、帰った帰った」

「ええ〜っ、ルーちゃんがり勉強じゃないじゃん」

「今日はガリ勉なの（新年度早々追試を落とすなんて絶対ありえない）」

「だったらアタシが追試の勉強に付き合っただけあげる！」

嫌な顔をしたままルーファスは無言になった。

ルーファス一人でもトラブルメーカーなのに、ビビがいたら何が起こるかわからない。

しかも、追試とは 召喚術の追試だ！

思い起こせばそれがビビとの出逢い（出遭い？）だった。まだビビがやって来て一ヶ月も経たないが、あんなことやこんなこと、いろいろなことがあった。

今回の追試は、実は再追試だったりする。ビビが召喚してしまったのが、一回目の追試だった。それを泣きの一回で、再追試が行なわれることになったのだ。ああ見えてファウストは実は甘い。

だから！

絶対に今回の追試を落とすわけにはいかなかった。まあ一つくらい赤点を取ってもまだ後があるが、そんな気持ちだからルーファスは毎年進級時期になると、死にそうなる苦勞をするのだ。なので、毎年新年度がはじまって一ヶ月くらいは気合いが入っている。今年はその気合いがどこまで続くことやら？

ルーファスはビビの身体をクルツと一八〇度回転させて、そのまま肩を押して玄關へ直行。

『えっ？ なに？』みたいな顔をして、目をパチパチするビビ。そのまま玄關から出せれ、再び鍵を閉められた。

「ふう」

ひとまずため息を付くルーファス。が、すぐにビビが部屋の中から走ってきた。

「どうして外に出したの！」

ほつぺたを丸くして、ビビは頭から湯気を出していた。見るからにご立腹だ。

ルーファスはビビをナメクジみたいなじとじとした眼差しで見た。

「だからあ、勉強があるから……邪魔なの」

「がびーん！（邪魔!）」

邪魔？ じゃま？ パジヤマ!?

たったひとことがビビの胸に突き刺さる。

「ルーちゃんのばか……ぐすん」

目じりに手を当てながらビビは走り去ってしまった。窓の外へ。

残されたルーファスは難しい顔をした。なにがなんだかサツパリなのだ。乙女心は複雑なのだ。

「……………（なんでバカつて言われたんだらう？）」

まあ、とにかくこれで独りなれたわけだ。ルーファスはさっそく勉強……………気配を感じて、ルーファスは振り向いた。

「……………っ！（まだいたのか）」

窓枠に両手を乗せて、鼻から上を覗かせているビビ。その瞳は睨むような感じでルーファスを見ている。

ルーファスは深く頷いた。

うん、見なかったことにしよう

ルーファスの家の地下室はだだっ広い。敷居などはなく、壁際に棚が並べてある程度で、家具なども特にならない。

この地下室はルーファスが越してくる前からある物で、どうやら前にこの家に住んでいたのは魔導師だったらしく、魔導の実験や実践をするために、この地下室を作ったらしい。

地下室の壁などは特別な鉱石で造られており、並大抵な攻撃では破壊もできない。ルーファスはどこで何度も爆発事故を起こしているが、一度も壁が傷付いたことはなかった。

「よし、やるぞ！」

ルーファスは気合を入れた。その脇には魔導書が抱えられ、もう片方の手は水性ペンキを持っていた。

教科書や魔導書をいくら読んで、実践ができなくては意味がない。その結論に至ったルーファスは、明日の追試験と同

等レベルの召喚を試みることにしたのだ。

果たしてルーファスは無事召喚を成功させることができるのか！

と、いうわけでまずは下準備だ。

はじめにすることは、召喚術に必要なグッズを用意することだろう。

高度な召喚には、それなりの道具が必要である。道具は召喚によって異なり、代用品も使えるが、やはり正規の道具のほうが失敗は少ない。

クリスナイフ、魔鏡の類、メダル、骸骨、神木、特別な布、生贄などなど、挙げれば切がない。

魔法陣を描くための道具としては血を使ったりするが、クレヨンやペンキで代用するのが主流である。今日使うペンキは蛍光塗料入りのピンクだ。ホームセンターのバーゲンで特価だったらしい。

魔法陣を描く色も重要だが、まあぶっちゃけ成功するときにするし、失敗するときはするので、ルーファスは何色で描いても同じだろう。

召喚する相手の中には、決まった時間にしか応じない者もいるが、今日はフリータイムの相手を召喚ことにした。

他にすることは、召喚の前に身体を清めたり、集中力を高めるなにかをしたりするが、ぶっちゃけルーファスはめんどくさかったので省いた。

その代わり、『お清めは体の中から』が謳い文句の、清涼



飲料（聖水風味）を一瓶開けてガブ飲みした。ちなみにテレビ通販で一ケース二本入りを購入したらしい。

ルーファスはお香に火をつけた。前回の追試ではこのお香で躓いた。使ったお香が身体に合わなかったらしく、くしゃみをしてしまったのだ。今日はちゃんと選んだから万全だ。

魔導書を開いて呪文を唱えはじめる。そして、右手に持つ棒のようなものを翳した。

一字一句間違わず、詠むのが下手か上手いかではなく、気合  
いが重要！

人生気合いでなんとかなるものだ。

最後の一行を読む前に、ルーファスは大きく息を吸い込んだ。  
「出でよ、契約の名のもとに！（完璧だ！）」

これほど自分自身でも『決まった！』というような、そんな清々しい召喚ははじめてだった。

なのに……様子が可笑しい。

スモークに写るシルエツトが怪しい。

体の割りに頭がデカイシルエツト……ま、まさかアフロヘア  
ーのトイレのベンジョンソンさん!?

ではなかった。

防御用の魔法陣を超えてルーファスに襲い掛かる触手！

ヌメヌメ、ツルツル、グチヨグチヨだ！

「ぎゃあああつ！」

叫び声をあげるルーファス。

ルーファスは持っていたクリスナイフで触手を振り払おうと

したのだが……。

「持ってたのクリスナイフじゃないし、フライ返しだし！」

必死に触手をかわしたルーファスが次に見た物は？

「よく見たら聖布だと思っただの僕のパジャマだし！」

おまけに……。

「お香が蚊取り線香に替わってるし！！」

怪奇現象だ。

ルーファスは見てしまった。

一階に続く階段の影から、こちらを見るビビの姿を。ホラーだ。

召喚用の魔導具をビビが全部コッソリ取り替えていたのだ。

「なんてことをしてくれただんだビビ！」

「だって遊んでくれないんだもん」

なんて短絡的な犯行。無邪気でお茶目じゃ済まされないぞ！

タコみたいな触手が部屋中をウネウネする。

必死なルーファスは筋肉痛も忘却して逃げる。ビビを抱きかかえて一階まで逃げた。

すぐ真後ろからは触手の先端が迫っている。足首をつかまれルーファスがコケたっ！！

抱かれていたビビが宙を飛ぶ。

転んだルーファスは積んでいた魔導書にダイブ！

本の山の中から引きずり出されるルーファス。もちろんルーファスを釣り上げたのはルアーじゃなくて、謎の触手。

ビビは異空間から大鎌を召喚した。

「ルーちゃん！」

ルーファスを助けようとビビが大鎌を大きく振り上げた。

だが……大鎌は見事に天井に刺さった！！

「ぬ、抜けないよお」

ビビは大鎌を抜こうと力を入れるが、まったく抜ける様子がない。

その間もルーファスは床を引きずられている。必死に床でクロールをして抵抗するルーファス。

ビビの目にマグカップが目に入った。

次の瞬間、ビビはマグカップを全力投球していた。

豪速でぶっ飛ぶマグカップは見事命中……ルーファスに。

「ぐわっ！」

鼻血ブー！

奇跡が起きた。

鼻血を浴びた触手がルーファスを解放して、逃げるように引き下がって行ったのだ。

やっぱり誰でも鼻血なんて浴びたくない！

万国共通なのだろう。

取っ手の取れたマグカップを見てルーファスが叫ぶ。

「僕の大事なマグカップが！！（母さんが魔導幼稚園に入園したときに買ってくれたものなのに！）」

一〇年以上前から愛用していた、年季の入ったマグカップだった。

ビビは大鎌を抜くのを諦めてルーファスの腕を引っ張った。

「早く！」

「ぼくの……マグカップが……」

「マグカップくらいアタシがプレゼントしてあげるから、早く逃げよ！」

「……マグカップ」

「ルーちゃんのばかつ、早く逃げよ」

強引にビビはルーファスを家の外まで引つ張り出した。

家の外はものスツゴイ平和だった。小鳥の鳴き声すら聴こえてくる。

近隣の住人たちは今そこに迫る危機を知る由もなかった。

玄関をプチ破って触手が外の出ようとしている。

ビビはルーファスの袖に抱きついた。

「ルーちゃん……」

「いったいなにが……（僕はなにを召喚してしまったんだ？）」

ついに怪物はその全容を現そうとしていた。

な、なななんと！

現れたのは……。

「タコだね」

ビビが呟いた。

それに対してルーファスは、

「いや、イカでしょ？」

と反論した。

見た目も色もタコに近い。けれど、脚の数が数え切れない。

そして、長い触手に騙されるところだったが、背丈はルーファスと同じくらいしかない。

しかし、侮ることなかれ！

脚の長さは伸縮自在、吸盤つきで高性能？

謎の怪物の出現に、近隣の住人たちも気付きはじめたが、みんな家の中に閉じこもって見なかったことにした。カーテンまで閉めてしまっているが、ちゃっかりカーテンの隙間から外の様子を窺っている。

謎の怪物が触手をクネクネさせている。

『我々ハ、うちゅうじんだ』

「我々つて一匹だけじゃん！」

ナイスなビビのツツコミ。

いや、そんなところにツツコミを入れる前に、もつといろいろあるような気が……。

ルーファスは真剣な顔をして、額から冷や汗を流した。

「いったいあの怪物……の名前は？」

怪物がどこから来てどのような存在なのか、そんなことを差し置いて、ルーファスにとっては名前のほうが重要だった。

そして、ルーファスは命名する。

「よし、奴の名前はイカタコだ！」

「えっっ、タッコーンがいいよお（ルーちゃんセンスな〜い）」

「ならイカンタコがいいよ（真っ赤な感じが、怒ってる感じでイカンみたいな）」

「じゃあ、イカタツコン星人でいいじゃん？」

「よし、それで決まりだ。奴は今日からイカタツコン星人だ！」

勝手に命名された。しかもビミューなネーミング。

そんなドーでもいいような、ドーでもよくないような、意外に重要な話をしている最中に、魔の触手はすぐ足元まで迫っていた。

「きゃっ！」

短く叫んだビビの身体が浮いた。その足首に巻きつく触手。

ビビはそのまま逆さ釣りにされてしまった。

「頭に血がのぼるよぉ〜」

逆さ釣りにされたことよって、顔がむくんでしまう。これが長時間続くととっても危険だ！

「大丈夫ビビ！」

真剣な顔をするルーファスの鼻から……赤い液体が……鼻血だ！

ついさつき流した鼻血が、なんらかの原因でぶり返したのだ。なんらかの原因とは……？

ルーファスの泳ぐ視線の先を追ってみよう。その視線に点線を引いた先にあるものは、大股開きでパンツ全快のビビの姿。逆さ釣りにされてパンツ丸見えだった。

そんなことで鼻血を流すなんて、ルーちゃん免疫なさすぎ！

しかし、触手に美少女の取り合わせは、ちよつとえっちいかもしれない。

ルーファスは鼻血を袖で拭き、呪文を唱えた。

「ウインドカッター！」

風の刃がビビの真横を掠めた。

「わおっ、アタシまで殺す気！」

「ご、ごめん（だつてあんまりそつち見れないから狙いが定まらない）」

又ル又ルの触手がビビを捕らえて放さない。

再びルーファスが鼻血をブー！

その鼻血を浴びたイカタツコン星人が、どういふわけか暴れ出した。

やっぱりルーファスの鼻血が不潔だからか！

イカタツコン星人が奇声をあげて暴れる隙に、ビビが逃げ出した。

上から落ちてくるビビをルーファスが見事キャッチ……背中

で。

「ルーちゃんアタシのお尻の下でなやつてるの、早く逃げるよ！」

「いや……キャッチしようと思っただけだ」

「運動神経ゼロなんだから、できないことに挑戦しないの」

「……はい（別に運動神経ゼロじゃないんだけど）」

二人がそんな会話をしていると、イカタツコン星人が再び襲い掛かって来ようとしていた。

こうなったらあれしかない！

逃げるが勝ち。スタコラサッサとルーファスとビビはトンズ

ラした。

世の中、見なかったことにする、もしくはなににもなかったことにするのが一番である。

というわけで、ルーファスとビビがやって来たのは、カーシヤの自宅だった。

「お前から尋ねて来るとは久しぶりだな（……しかもビビ同伴……）もじゃ、いつの間にかルーファスとビビは親密な関係に……なんてな、ふふ」

そう言いながらカーシヤは空のカップを二つテーブルに置いた。セルフサービスだから自分で勝手に紅茶でもコーヒーでも淹れるよ、という暗黙の意思表示である。

ルーファスはビビの分のカップも持ってキッチンに向かった。一方ビビは、驚いた顔をしながら部屋中を隈なく観察していた。

ピンクのテーブル、ピンクの椅子、ピンクの家具と小物、大量に飾つてあるぬいぐるみもピンクだ。目が痛いだけでなく、なぜか心も痛くなる光景だ。

カーシヤは自分のことをなにか言いたそう見つめるビビに気づいた。

「なんだ？（なんだその珍獣でも見るような眼つきは）」

「カーシヤってピンク好きなの？（……ちよつと意外）」

「悪いか？（喧嘩なら買うぞ）」

「ぜんぜん、アタシもピンク好きだし。ほら、アタシの髪の毛



もピンクでしょ？」

ビビの髪の毛はピンクのツインテールである。

カーシャは目を伏せて黙り込み、しばらくしてボソツと呟いた。

「……最悪だ（こんな小娘と趣味が被るなど、生き恥以外のなにものでもない）」

「ひっどーい、最悪つてなにそれ！」

「いつかお前の髪を緑に染めてくれるわ（毒気が抜けてクリーンになれるぞ、ふふ）」

「ピンクはカーシャだけのものじゃないんだからね！」

小さな言い争いが大きな争いに発展する前に、二人の間に湯気の薫るカップを持ったルーファスが割って入った。

「はい、コーヒーと紅茶、好きなほう取ってね」

ウサギ柄とネコ柄のカップがテーブルに置かれると、二本の手が伸びてカップを二つ持っていた。紅茶をビビ、コーヒーをカーシャ、ルーファスの分がない！

「あのお、私の分がないんだけど？」

「そんなの自分で淹れればよいだろう」

バツサリ切り捨てたカーシャさん。

「（だから今、淹れた来たのに……カーシャが取るんだもん）」

その言葉をルーファスは心だけにとどめた。

またキツチンに向かおうとしたルーファスの背中をカーシャが呼び止めた。

「で、なんの用があつて来たのだ？（意味もなく人の家に尋ねに来るはずがない。妾は意味なくルーファスの家に行くがな）」

ルーファスが振り返った。

「いや別に、せっかくの休日だし散歩ついでに遊びに来たって言うか」

「ビビと一緒にか？（まさかデートか！）」

「それどういう意味？」

「（妾の考えすぎか、デートで人のうちに遊びに行く戯けはいない……いや、ルーファスは無神経というか、うといからやるかもしれない）別に意味はない」

「そう（……なんであんなこと聞いたんだろう？）」

首を傾げながらルーファスはキッチンに消えた。

ビビは近くにあつたりリモコンを手にとって、いつの間にか勝手にテレビを見ていた。

「なんかおもしろいテレビやってないかあ」

次々とチャンネルが回され、画面にアニメが映された。それを見てビビは目を丸くした。

「プリティミューの再放送じゃん！」

プリティミューとは、ゴスロリ姿の主人公が世界の平和を守るため、悪の軍団ジョーカーと戦うアニメである。

チャンネルが突然変わった。

「人のうちで勝手にテレビを見るな」

カーシャだった。ビビからリモコンを奪って、適当なチャン

ネルに変えてしまった。

ビビはすぐにリモコンを取り戻そうと腕を伸ばした。

「テレビくらい見たつていいじゃん」

「テレビのチャンネル権は家の主にあるものだ」

「なにその権利」

「いいから勝手にテレビを見るなど言うておるだろう」

「ケチ！」

リモコンを奪い合つて争いがはじまってしまった。今リモコンを持っているのはカーシャだ。

腕を上いっぱいに伸ばして高く上げられたリモコンに、飛びつこうとビビがジャンプする。

そんな光景を見ながらいつの間に戻つて来たルーファスは思う。

「(テレビ本体でチャンネル回せばいいのに)」

二人の争いを止めに入らないのはルーファスの仕様だ。

ついにビビがリモコンを奪還した。と思つたらカーシャが奪い返す。チャンネルが次々と回される。

とある画面が映し出された瞬間、ついにルーファスが口を挟んだ。

「ストップ！ 今の映像は……(見てはいけないものを見てしまったような)」

一斉にビビとカーシャの顔がルーファスに向けられた。

リモコンを握つていたカーシャが、ルーファスがストップをかけたチャンネルまで戻した。すると映し出された映像はニコ

ース番組のようだった。

『王都アステアに突如現れた生物はその進路を徐々に……ぎゃくつ！』

リポーターの男が謎の触手に巻き付かれてフレイムアウトした。

なんか見たことのある触手だったが、ルーファスは見なかったことにした。

「やっぱりテレビは消したほうがいいよ、うん」

ルーファスがテレビ本体に手を伸ばそうとすると、その手首をカーシャによって掴まれた。

「待て、なんだ今のタコの足のような物は？（アステアと言っていたが、なにが起きているのだ？）」

プロ根性を見せるカメラマンは、その場から逃げることなくその映像を映し続けた。

町中で暴れまわる謎の生物。タコのような足で周りの家々を破壊するその姿。足の長さを含まない体長だけでも、二階建ての家に匹敵する高さだった。

のんびりと紅茶を飲みながらビビがひと言。

「なんか大きく育ってるねえ」

最初に見たときよりも、だいぶ大きくなっているようだ。しかも、騒ぎが甚大になっていた。

自分が召喚しました　なんて口が裂けても言えない。

ルーファスは空になったカップを飲み続けた。

疑惑の眼差しでカーシャはビビを見た。

「あの怪物のことを知っているのか？」

「うん ルーちゃんが召喚したの」

カーシャの視線を向けられる前にルーファスは逃亡しようとしていた。

「急用を思い出したから帰るね」

帰ろうとするルーファスの首根っこをカーシャが掴んだ。

「ちよつと待て、詳しい話を聞かせてもらおうではないか、ふふふ（面白いことになってきたぞ）」

慌ててルーファスが弁解をはじめた。

「ちよ、待ってよ。僕じゃないんだ、あの、その、ビビがさ、いけないんだよ。僕の召喚の邪魔するから」

「アタシなにも知らないもん、きゃは」

見事にしらばっくれた。こういうところが仔悪魔だ。見た目に可愛さに騙されるな！

なんだか強引に話が進められ、気付けばルーファスはホウキの後部座席に寄せられていた。

ホウキを運転するカーシャにしがみついて、必死に振り落とされまいとするルーファス。

「カーシャもつとゆっくり！」

「悠長なことを言うな、現場が立ち入り禁止なる前に急ぐぞ！」

二人を乗せたホウキは王都アステア上空を低空飛行して、イカタツコン星人が視界に入るところまでやって来ていた。

ちなみにビビはホウキが二人乗りだったの置いていかれた。ホウキはイカタツコン星人の上空をクルクル旋回した。

地上では治安部隊がイカタツコン星人をなだめようと、あれやこれやとテンテコ舞のようだ。

治安部隊がさつさと攻撃に出れないのは理由がある。それはイカタツコン星人にある一定の知性が見受けられたからだ。つまり、安易にイカタツコン星人に攻撃を加えてしまうと、文化圏を越えた国際問題に発展する場合があるのだ。

カーシャがホウキを地上に向けて運転しはじめた。

「よしルーファス、捕獲するぞ！」

「はあ!？」

「うまく事が運べば賞金がもらえるかもしれん（そろそろ新しい魔導レンジに買い換えようと思っていたところだ）」

急降下するホウキに触手が襲い掛かってきた。

見事な運転でカーシャは触手の間を抜けた　　が、ルーファスが振り落とされた。

「ぎゃ〜っ！」

地面に向かって死のダイブ！

黒衣の影が地面を駆けルーファスの落下地点に立った。

謎の男が見事にルーファスをキャッチ！

「無事かねルーファス君？」

ルーファスをキャッチしたのはリユーク国立病院の副院長

黒衣の魔導医デイーだった。今日はサングラスをかけている。

「どうしてデイーがここに？（僕のこと抱きかかえながら、何

気にお尻さわってくるし」

「陽の下は苦手なのだが、負傷者が多数出たと聞いては来ないわけにはいかぬだろう」

デューは触手の攻撃を軽やかにかわしながら、治安部隊が防衛網を張る内側まで逃げ込んだ。

安全圏まで入ったというのに、デューはルーファスを下ろそうとしなかった。

「あのさデュー、下ろしてくれない？」

「駄目だ」

「なんで？」

「あんな高いところから落ちたのだ。軽い脳震盪を起こしているかも知れぬ、今すぐ病院で精密検査をもらうよ」

「やだ」

ルーファスは逃げるようにデューの身体から無理やり下りた。なにかと理由をつけて入院させようとするのはいつものことだ。しかもルーファスに色目まで使ってくる変態だ！

デューと距離を置くルーファスの背後から、カーシャが又ツと顔を出した。

「なぜデューがここにいるのだ？」

「うわっ！（カーシャ！）」

驚いたルーファスが叫びながら飛び退いた。

嫌な顔もせずデューはまた同じことを答える。

「陽の下は苦手なのだが、負傷者が多数出たと聞いては来ないわけにはいかぬだろう」

と、言ってる間も、触手に引っぱたかれて男が空を飛んでいた。

イカタツコン星人はまるでハ工叩きのように触手を動かして、次々と治安部隊を空に飛ばしていく。

もう誰もイカタツコン星人を止めることはできないのか！

長い触手が逃げ遅れた近所の若妻に襲い掛かる！

男たちは散々ぶっ飛ばしたというのに、若妻はなぜか触手を巻かれて上空に釣り上げられた。

ヌメヌメでグチヨングチヨンの触手が若妻の太腿を這う。

カーシャがその光景を見てひと言。

「エロダコめ」

この瞬間、イカタツコン星人改めエロダコになった。

カーシャがルーファスに命令を下す。

「あの女を助けて恩を売って来い」

「助けるなんて無理だよ」

ここにデイーが割って入った。

「そうだ、ルーファス君を戦いに赴かせるなど私が許さんよ

(だが、怪我をさせて病院に連れて行くのもいいな)」

妄想をするデイーの唇がいやらしく微笑んだ。エロイ人だ！

そんな話をしていっているうちに、若妻は触手の魔の手にあゝん

なことやこゝんなことをされ、助けようとする治安部隊がハ工のように叩かれていく。

やはりここはルーファスが行くしかないのか？

しかし、へっばこ魔導士ルーファスになにができるのだろうか



か？

だがカーシャにとって、なにができるできないは関係ない。とにかくルーファスに行けと、ただそれだけだった。

カーシャがルーファスの身体を持ち上げ、人間ミサイル発射ツ！！

「ぎゃ〜っ！」

投げられたルーファスがエロダコに一直線。その軌道に迷いはないが、ルーファスの心には迷いだらけ。なんの作戦もなしに敵に突っ込むなんて無謀すぎる。

「助けて！」

それがルーファスの最期の叫びだった。

触手が見事ルーファスを打ち返した、ホームラン！

キラーン シ

ルーファスはお星様になった。

と、思いきや地上に落下。

すぐにカーシャが駆け寄った。

「大丈夫かルーファス？ まだいけるな？」

返事はなかったが、カーシャは再びルーファスを持ち上げ、人間ミサイル発射！

気絶したままのルーファスは声も上げずに再びエロダコの元へ。

ルーファスは空中で目を覚ました。

目をパチパチさせながら、ルーファスは状況を把握しようとした。

眼の前まで迫る牛のような爆乳。成す術もなくルーファスは人妻に抱きつき、顔を爆乳に埋めていた。

次の瞬間、ルーファスの鼻から赤い噴水が放出された。

「ぐわーっ！」

鼻血ブー！

生温い鼻血をぶっ掛けられた触手が、人妻を解放して逃げていく。

またしてもルーファスの鼻血が触手を追い返したのだ。

人妻を偶然にも救出したルーファス。だが、触手から解放された人妻が地面に落下したとき、ルーファスはその下敷きになっ  
てしまっていた。しかも、ルーファスは気絶していた。

やっぱりルーファスはイケてない。

ルーファスが目を覚ますと、緊急用の医療道具で輸血されていた。

しかも、頭が乗せられているのはディーの膝の上だった。

思わずルーファスは飛び起きた。

「うわっ！」

「暴れないでくれたまえルーファス君、輸血中だ」

「輸血とかいいから、早くこの針抜いて！（気絶してる間に  
変なことされてないかなあ、心配だ）」

「ルーファス君の頼みとあれば仕方ない」

本当に仕方なさそうにディーは輸血の針を抜き、その抜いた傷口を突然舐めた。思わず反射的にルーファスは腕を振った。

「やめてよ！ それやらないでっついても言ってるじゃん！」  
舐められたルーファスの腕から傷が痕も残さず消えていた。  
ディーの唾液には治癒効果があるのだ。だが、ルーファスしてみれば、精神的に傷付く。

ルーファスは冷や汗を袖で拭いて、辺りを見回した。  
病院のスタッフたちが怪我人たちをその場で手当てしている。慌ただしくはあるが、大騒ぎというほどではない。壊した家々を残してエロダコは姿を消していた。

「エロダコはどうなったの？」  
ルーファスはディーに尋ねた。

「都の中心に向かっていいると思われたが、急に進路を変えてシ  
モーヌ川に向かったそうだ」

「カーシャは？」

「あの生物を追って行ったようだな」

ディーがなにか心配を感じて後ろを振り向いた。

こつちに誰かが走ってくる。

「やっと思つつけたあ！」

ツインテールをジタバタさせながら走ってきたのは、置いて  
けぼりをくらったビビだった。

「アタシのこと置いてくなんてヒドイよお（アタシが止める間  
もなくホウキに乗って行っちゃうんだもん）」

少し怒ったようすでビビは頬を膨らませた。

ルーファスは困った顔をして眉を八の字にした。

「いや、あの私がさ置いていったわけじゃなくて、カーシャが

無理やり……ね？」

しどろもどろで弁解するルーファスだが、プンプンのビビは頬を膨らませたままだ。

「追いかけて来るの大変だったんだからあ。アタシまだこの道とかあんまし覚えてないし、迷子になりそうになっただからね！」

「だから私が悪いんじゃないじゃなくてカーシャがさ……（むしろ僕は被害者だ）」

「アタシが迷子になって変なおジサンに連れ去れてくれたら、どう責任取ってくれるのあ？」

「いや、それは平気だと思うよ」

「どーゆー意味？」

「ビビだったら変なおジサンくらいコテンパンに出来ると思うから」

「ルーちゃんのばか！」

ビビのグーパーパンチがルーファスの頬にヒットした。

地面に倒れて死の境を彷徨うルーファス。きつとおジサンもこんな風にコテンパンにできる。ルーファスは身をもって実証したのだ。

気絶しかけたルーファスは身の危険を感じてすぐに立ち上がった。ディーの影がすぐそこまで迫っていたのだ。

ルーファスは手の平を胸の前に突き出してストップをかけた。「大丈夫だから」

眼の前にはディーがいた。

「いや病院でレントゲンを撮ったほうがいいだろう、頬骨が損傷しているかもしれない」

どうしてもルーファスを病院に連れて行きたいらしい。しつこいディーをどうにかするには、これしかない！

ルーファスは逃げた。

「さよならディー！」

とりあえず別れの挨拶はしたが視線は前。ディーの姿は完全にフレームの外だ。

「待つてよルーちゃん！（またアタシのこと置いてく気？）」  
すぐにビビはルーファスを追って走り出した。

エロダコは王都アステアを東に向かって進行中。その大きさはいつの間にか、三階建ての家ほどの体に育っていた。きっと育ち盛りに違いない！

王都アステアの東には運河が流れている。エロダコはそっち方面に向かっていているものの、その目的はよくわからない。

町中を爆進するエロダコの前に、兵士たちのバリケードが立ちただかった。そのバリケードを率いているのは、白銀の軽鎧を着たブロンドの女魔導騎士エルザ。

エルザはルーファスも通っているクラウドス魔導学院を首席で卒業したエリート中のエリート、最近また功績を挙げて魔剣連隊の全権を任されるようになったらしい。

そんなお偉いさんのエルザだが、彼女は常に最前線での戦いを好み、なにか大きな事件を起こるたびに真っ先に王宮から現

場に駆けつける。

今回エルザが出撃した理由は他にもある。それはエロダゴが向かっている方向に問題があった。

王都の人口増加のため、川を挟んだ向こう側に新都市を建設中なのだ。基礎工事は終わり、川の近くには続々と建物が建ちはじめている。そんな場所でエロダゴに暴れまわられたら、堪ったもんじゃない。

壊されてしまった建物は仕方がない。だが、これ以上被害を広めるわけにはいかなかった。

エルザは剣を抜いた。

「攻撃は必要最低限に止め生け捕りにしろ！」

先頭を切つてエロダゴに立ち向かおうとしたエルザだったが、その足が不意に止められてしまった。

エルザの前に現れたのはホウキから下りてきたカーシャ。

「チツ……エルザか（騒ぎが大きくなって王宮から派遣されてきたか）」

「カーシャ先生？（女狐め、どうしてこんなところにいるのだ）」

二人の女の視線の間で火花がバチバチ散っていた。

実はこの二人、犬猿の仲なのだ。てゆーか、カーシャはいろんなところに敵作りすぎ。

生徒と教師の関係だった期間は長くなかったが、因縁はアステアで大人気のアイスクリームチェーン店のバナラよりも濃密だ。ちなみにオススメはバナラよりも、ペパーミントだ。

エルザの剣はカーシャに向けられていた。チャンスがあれば斬る気満々。

「部外者は早々に立ち去ってもらえませんか？（トラブルメーカーに居座られたら任務遂行に支障が出る）」

「退避命令に逆らった時の罰則はこの国にはない（エルザがいるとなれば、とことん邪魔してくれるわ）」

「公務執行妨害を適応しますが宜しいですか？」

「職権乱用で訴えてやる」

二人の間の火花はどんどん大きくなっていく。

エルザがカーシャを構っている間にも、部下たちが一生懸命エロダコに立ち向かっていく。だが、エロダコは強かった。

ウニョウニョした身体は魔法を弾き、剣を突き立てようとしても滑ってしまうのだ。

まさか……エロダコ最強伝説!?

王都アステカは一匹のエロイタコのせいで、儂くも滅びてしまふのか……。やはり煩惱は活力の源、生物に偉大なパワーを授けてくれるものなのだ。実際、このエロダコが本当にエロイ思考を持っているかはわからないのだが。

エロダコはカーシャが勝手に命名した名前だ。ちなみに過去を振り返ってみると、ビビはイカタツコン星人と名づけた。正式名称は未だ不明である。

三大魔導大国の精鋭たちが、次々と空を飛んでいく。そんなことも気付かずに、エルザはカーシャと言い争いを続けている。「いい加減にしないと斬るぞ？」

ついにエルザが切っ先をカーシヤの首元に突きつけた。

「ふふつ、斬れるものなら斬ってみろ。正当防衛を盾に返り討ちにしてくれるわ」

カーシヤも鉄扇を構えて戦闘態勢に入った。

もうエロダコなんてそっちのけだ。

そんな状況下の中に遅れてルーファス&ビビが駆けつけた。が、いきなりビビが触手に捕まった。早っ！

「きゃん！ 助けてルーちゃん！」

「なんでいきなり捕まってるの！（だって今横に立ってたじゃん）」

逆さ釣りではなかったが、ルーファスの位置からビビのパンツ丸見え。けどパンチラくらいじゃ、さすがに鼻血は出ない。が、恥ずかしくてそっちの方向を見れない。

ルーファスは地面から目を離せなくなった。

「今助けるから待ってて！」

とは言ったが、エロダコを見ていなかったために、触手がすぐそこまで迫っていたことに気付いていなかった。

ビビが叫ぶ。

「ルーちゃん危ない！」

「えっ？」

振り向いた瞬間にルーファスは触手に叩かれて空を飛んでいた。

「なんだか今日はいろいろと空をよく飛ぶ日である。特技に“お星様になる”を加えてもいいくらいだ。あと鼻血もついでに



加えてもいいと思う。

ルーファスが石畳の上でへばっている間も、ビビは又メ又メのゲチヨゲチヨでウニヨウニヨの触手に弄ばれていた。

タイツを破られ、上着を剥ぎ取られ、脇やお腹に触手が這う。

「きゃははは、やめっ……きゃは、あははは……くすぐりたい

……きゃん！」

又ル又ルの触手が身体中を這う。これは立派な拷問だ。このままではビビが笑い死にしまう！

なのにルーファスは地面に倒れたまま動かない。

なのにカーシャとエルザは言い争いの真つ最中だったり。

なのに精鋭の魔導騎士たちじゃエロダコに歯が立たないし。

「きゃははは、ちぬ……笑い……ちぬ……ぎゃははは」

ビビは笑いすぎて窒息しそうだ。笑顔で死ねるなんてラッキ

ーだね、なんてジョーダンも言えない状態だ。

そしてついには、カーシャばかりに気を取られていたエルザ

までもが、触手の餌食になってしまった。

それを見てカーシャがボソツと。

「ざまを見る、ふふっ」

なんて余裕ぶっこいていたのも束の間、カーシャも触手に巻かれて宙吊りにされてしまった。

「妾としたことが……笑えん、ふふっ……うふふふ……ぷぷぷっ」

笑えない状態に陥ってしまったが、そこから中から笑い声が響いてくる。漫才シヨーなら大盛況だ。

誰もエロダコの暴虐を食い止めることはできないのか！

そんなとき、空色ドレスの何者かがエロダコに喰らい付いた！！

「うん、なかなか美味しいよこれ（ふあふあ）」

触手を噛み切ったのはローゼンクロイツだった。てゆうか、よくそんなグロイ触手を食べれるますね！

くすぐられながらカーシヤが聞く。

「ふふふっ、なぜ……クリスちゃんが……ぷぷっ……ここに？」

「ふにゃ？ なぜって魚介類好きのボクとしては、謎のタコに似た軟体動物がいると聞いては、見に来ないわけにいかないからね（ふにふに）」

ただの野次馬かよ！

しかし、ローゼンクロイツはアステア王国でもハイクラスの魔導士だ。もしかしたらこの状況を打開してくれるかもしれない。

「やつぱり王道のタコヤキかな（ふあふあ）。それともタコから揚げなんかも乙だよね（ふにふに）」

ぜんぜんみんなを助ける気ゼロ。その代わり喰う気満々。

触手がローゼンクロイツに襲い掛かる。それも確実に叩く気で襲ってきている。やつぱり“女の子”じゃないからだろうか。羽毛が舞うように軽やかにローゼンクロイツは触手を避けた。さすがはローゼンクロイツ。空色ドレスでふあふあしているように見えて、実は運動神経抜群で勉強までできる嫌味な奴だ。

「タコヤキだと何個くらい焼けるかな（ふあふあ）」  
考え事しているローゼンクロイツは避けるばかりで攻撃し  
うとしなかった。攻撃はメニユーが決まってからだ。

ローゼンクロイツはエロダコの気を惹いている間に、この場  
には黒い医師が率いる白い医師団が来ていた。

ディーがルーファスに駆け寄る。

「大丈夫かねルーファス君？」

その声を聞いてゾツとしたルーファスが飛び起きた。

「はい、大丈夫です！」

今まで気絶していた人とは思えないハツラツぶりだ。

ディーはルーファスを舐め回すように見ている。

「かすり傷を負っているようだね。すぐに私が舐めて」

「お断りします！（死んでも嫌だ）」

キツパリハツキリ言い切った。

本当に残念そうな顔をするディー。

「君が言うなら仕方あるまい（……しかし）」

そのままディーの視線はエロダコに向けられ、彼は話を続け  
た。

「ルーファス君を傷つけるなど、絶対に私が許さん（切り裂い  
て殺してやる！）」

サングラスの奥でディーの眼が紅く光った。

ディーの手にはいつの間にかメスが握られていた。しかも二  
刀流だ。

静かに地面を駆けてディーがエロダコに襲い掛かった。

音もなく静かに、輝線だけを走らせて、触手が次々とメスによって切り刻まれていく。

剣では歯が立たなかつたというのに、なんとというメス切れ味だろうか。その巧みの業、切り込む角度、そしてタイミング。心技一体のハーモニーが、触手切断を可能したのだ。

細切れにされていく触手の中でビビが解放され、カーシヤやエルザも笑い地獄から解放された。

横から乱入してきたディーを見て、ローゼンクロイツがワザとらしい嫌な顔をした。

「このタコ、ボクの夕食だよ（ふに〜）」

「喰うのは好きにする。ただし、こいつは私が殺す」

「料理は捌くところからやらなきゃいけないんだ（ふにふに）」

「この街で魚を捌かせたら私の右に出る者はおらんよ。私の華麗なメス捌きを魅せてやろう！」

……まさか、この展開は？

魔導士ルーファス料理対決がはじまってしまふのかッ！

ついに幕を開けた魔導士ルーファス料理対決。

そして、カーシヤまでもがこの戦いに乱入してきた。

「食を制する者は世界を制す！」

カーシヤの口から放たれた意味不明なひと言。

立ち尽くしながらも、呆れた眼を向ける仔悪魔ビビ。ばっかじゃないの、いつものやつがはじまりましたね。カーシヤの思いつきに振り回されるほど、アタシは子供じゃない。

だが、薄笑いを浮かべて動じないカーシャ。

おまえたちはいつもものように、黙って妾の言うことに従って  
いればいい。しよせんお前たちは遊び道具でしかないのだから。  
ビビたちを見つめるカーシャの眼は、そう語っているかのよう  
だ。

だがこのあと、意外な人物の口から誰もが予想しえなかった  
言葉が！

呆れ顔のビビを嘲笑うかのように、次々と名乗りをあげる挑  
戦者たち。

魔導医デューは呟く。

「……ククツ、望むところだ料理対決」

私を舐めるなよ、魚を捌かせたら王国一の腕前だ。悪魔の手  
を持つデューのメス捌きが今日も冴えるのか！

挑発的なカーシャの眼がローゼンクロイツに向けられる。

「魚介類マニアとして、この勝負、負けられないのではない  
か？」

「いいよ、この勝負受けて立つよ（ふあふあ）」

いいでしょう、ここはあなたの言葉に乗せられましょう。で  
もね、その代わりボクがやるのは真剣勝負。死人が出ても知り  
ませんよ。そう言いたげなローゼンクロイツの不敵な笑み。

次にカーシャが目線を向けたのはエルザだ。

「いいのか？ 王宮のエリート魔導騎士として、この状況を放  
つて置く気か？」

「わかった。そういうことなら私もやるう」

しぶしぶ重い腰を上げる高級官僚エルザ。勘違いするな、私は王宮に仕える身として放っておけないだけ。見え透いた挑発に乗るほど馬鹿じゃない。

再びカーシャの視線がビビを見据える。

「もう一度聞こう、どうするビビ？」

「やるってば、やればいいんでしょ！」

みんながやるならアタシだって黙っていられない。けどね、本気になったアタシをあんたたちは止められるのかい？ 乗り気じゃなかった仔悪魔ビビまでもが、闘志を剥き出しにして食って掛かる。

そしてこのあと、黙して語らなかつたあの人物から信じられない言葉が！

「あ、あのさあ……なんで料理対決なの？」

この状況を呆然と見ていたルーファスの的を得た正論！

大波乱を迎えた魔導士ルーファス料理対決、いったいどうなってしまうのかッ！

料理対決がはじまる寸前、ルーファスの言葉でエルザは我に返った。

「……危ない女狐の謀略に乗せられるところだった」

もう少しで任務も忘れて意味不明な展開になるところだった。ルーファスの言葉ならちゃんと聞くデューも正気を取り戻していた。

「ルーファス君の言うとおりだ。料理対決など関係なくこの怪

物を処理せねばらん」

二人がまともな思考を取り戻したというのに、桃色と空色はまだバカなことをやるうとしていた。

ビビは大鎌で触手をスライスしようとする奮闘し、ローゼンクロイツは日傘に魔導を宿した光の剣で華麗な包丁（？）捌きを魅せる。

果たしてどんな料理ができあがるのか！

それを見守っているのは、胸の谷間から緑茶のペットボトルを取り出して飲んでいるカーシャ。あんたの胸は四次元ポケットかつ！

ローゼンクロイツによって捌かれていく触手。だが、まるで単細胞生物のなみの再生力で、次から次へと新たな触手に生え変わる。これじゃあ、食べても食べてもなくならない！

そして、ついに料理が完成したらしい。

近くの民家から運び出したテーブルとイス、そこに座るのはルーファス。強引に審査員にされてしまった。

まず、運ばれてきたのはローゼンクロイツの料理。

ルーファスの前でフタを開けられた皿に乗っていたのは……

お刺身だ！

切って皿に乗せただけ。いや、しかしシンプルだけに、奥の深い料理なのだ。

ここでローゼンクロイツの口から衝撃のひと言が！

「よく考えてみたら、こんな場所で料理できるわけないよね（ふにふに）」

で、お刺身になったというわけだ。

キッチンもない場所で、料理対決をするなど最初から無謀だったのだ。

ルーファスはナイフとフォークを握ったまま、皿の上の物体エックスと睨めっこをしまった。

この物体は生で食べていいもののだろうか？

見た目はナマコをスライスしたみたいというか、真っ黒なゴムを輪切りにしたみたいというか、口の中に入れてはイケナイ雰囲気漂っている。

が、ルーファスの真後ろではカーシャが無言のプレッシャーをかけている。

ルーファスは物体エックスをフォークで突き刺し、目を瞑って口の中に放り込んだ。

もぐもぐ。

一瞬にしてルーファスの顔を真っ青に変わった。

頬を丸くして、今にも××しそうなルーファスが物陰に駆け出した。

しばらくして、ゲツソリ頬の痩せたルーファスが帰ってきた。雪山で遭難して食料も底を突き、数週間ぶりに発見されたかのような衰弱ぶりだ。

「まるで生ゴミを食べてるみたいだった……（あんなの食べたら廃人になるよ、実際なりかけたし）」

無表情の顔のままローゼンクロイツは首をかしげた。

「そうかな？（ふあふあ）。美味しいと思うんだけどなあ（ふ



にふに)」

ローゼンクロイツは自分で捌いた刺身を指で摘んで、口の中にあむつと放り込んだ。

もぐもぐ、もぐもぐ。

「美味しいよ（ふあふあ）」

表情一つ変えないローゼンクロイツ。

ビビはローゼンクロイツの言葉を信じて、お刺身をつまみ食いした。

「うっ！」

ビビは顔を真つ青にして物陰に消えた。

やっぱりローゼンクロイツは首をかしげている。

「うん、味が薄いのかな？（ふにふに）」

そう言つてハンドバッグから取り出したのは、なんと七味唐辛子。常備持ち歩いてるのだろうか？

フタを開け、中のフタも開け、一気にドサツと刺身に山盛り。七味唐辛子が一瓶丸ごとお刺身に振りかけられ……じゃなくて盛られた。

ローゼンクロイツにお皿ごと差し出されて、ルーファスは両手を胸の前に突き出し首を横に振った。

「いらないうつていうか、食べ物じゃないから！（……ローゼンクロイツが味覚音痴だったの忘れてた）」

実はローゼンクロイツ、大の辛党で味音痴なのだ。ついでにしょっちゅう鼻炎らしい。

もはや七味唐辛子の塊を化してお刺身を食べながら、まだ首

を傾げてローゼンクロイツはフェードアウトしていった。微かに『美味しいのになぁ』と呟く声が聴こえてくる。

さて、気を取り直して次はビビの料理だ。

再びテーブルに座らせたルーファスの前に運ばれてくる料理。お皿にはフタがされてまだ中は見えない。

が、ガタガタつとフタが動いた。

思わず顔を引きつらせるルーファス。とつても嫌な予感がする。

ビビはニコニコ顔でフタを持ち上げた。

オープン・ザ・地獄への片道切符！

フタを開けた瞬間、生きたまま触手がルーファスの顔に飛び掛かった。

「ぎゃあ！（く、苦しい……）」

触手に付いた吸盤がルーファスの舌にへばりついた。しかも、触手はルーファスの咽喉の奥に入ろうとしている。このままでは窒息死は免れない！

ルーファスが暴れまわるのを見て、ビビは凄まじい勘違いをした。

「ルーちゃんそんなに喜んで食べてくれて嬉しいっ」

「うがっ（違っ）、うががだばばー！（早く助けて……）」

「やっぱりアタシ料理の才能あるのかなぁ」

暴れ狂うルーファスの姿をビビのフィルターを通すと、歓喜の舞を踊っているように見えるらしい。

カーシャがビビの頭をパコーンと叩いた。

「アホか、ルーファスが死に掛けておるだろう」

すぐにカーシャはルーファスの口からはみ出す触手を掴み引つ張った。だが、触手はなかなか剥がれない。

「ビビ、手伝え！（舌まで引っこ抜きそうだな）」

「うん！（ルーちゃん死に掛けてたんだ……きゃは）」

今度はビビも手伝い、綱引きの要領で引つ張った。そしたら今度は、力が強すぎてルーファスが踏ん張りきれず、地面の上をズルズル身体ごと移動するだけだった。

「あがぐだずげで！（早く助けて！）」

泣きそうな顔を必死に訴えるルーファス。だが、ハッキリ言つてなにを言つてるのわからない。

ルーファスの口から伸びる触手を引つ張る光景は、なにも知らない人が見たら舌が伸びちゃった人みたいだ。そして、この光景はもう一つなにかの光景に似ていた。

引つ張つても引つ張つても取れないので、諦めてカーシャとビビは手を放してしまった。次の瞬間、触手がゴムのように収縮してルーファスの顔にバチン！！

これぞ伝説の芸　ゴムパッチンだ！

顔を抑えて床に転がり回るルーファス。さそがし痛かったことだろう。

真っ赤に顔を腫らしてルーファスが立ち上がった。

「痛いじゃないか！！」

と、叫んだ口から触手が消えていた。地面を見ると取れた触手が痙攣している。

満足そうにカーシャが頷いた。

「うむ、計算どおりだ」

絶対にウソだ！

たとえ偶然だとしても、これで一件落着だ。

めでたし、めでたし……じゃなくいい！

そうだ、料理対決なんてバカなこととしていて、エロダコ本体のことを忘れていた。

辺りにエロダコの姿はなかった。

ルーファスは近くで騎士の手当てをしていた病院スタッフに尋ねた。

「あの、あのタコはどこに行きました？」

「シモーヌ川に向かって再び進みはじめましたよ」

料理対決なんかしてる間に、エロダコは再び町をぶっ壊しながら爆進していたのだ。

すでにカーシャはエロダコを追おうと走り出していた。

「ルーファス早く行くぞ！」

「早く行くぞって……（カーシャが料理対決なんかけしかけたんじゃないか）」

ビビもカーシャを追って走り出していた。少し遅れてルーファスも後を追った。

ついにエロダコは運河まで来てしまった。

物資を運ぶ作業がストップして、港は一時閉鎖に陥った。

魔導騎兵を引き連れてエルザが再びエロダコの前に立ちはだ

かった。

「全ての責任は私が取る、生け捕りは中止だ。総攻撃の体制を整える！」

魔力を増幅させる剣を魔導騎士たちが構えた。

各々の魔力が共鳴して、辺りにマナフレアが浮かびはじめた。大量のマナがこの場に集まってきている。

そして、魔導騎士の集めたマナが天に翳されたエルザの大剣に集められた。

「ギガサンダーソード！」

レイラが唱えられた瞬間、エルザの持つ剣が閃光を放ち、自分の身体の四、五倍はある雷光の剣に変化した。

歯を食いしばりながらエルザは、天を突くほどの雷光剣を振り下ろした。

稲妻が轟き閃光がエロダコを焼き斬った。

ギョギヤアアアツ！！

ヒトとも獣とも付かない断末魔が木霊して、真つ二つにされたエロダコが燃え上がった。

辺りにタコを焼いたような匂いが立ち込める。お醤油が欲しくなる香りだ。

その匂いもすぐに焦げ臭い悪臭に変わって、エロダコは完全に灰となってしまった。

エルザは剣を鞘に閉まって前髪をかき上げた。その額には汗が滲んでいる。

魔導騎士が集めたマナを一点に集中して解き放つ。攻撃力は

絶大だが、全てのマナを引き受けたときの負荷は想像を超える。心身ともにハイクラスの魔導騎士であるエルザだからこそできる技なのだ。

やっとこれで王都アステアにも平和が戻る……と思ったのも束の間、エルザは言い知れない殺気を感じた。

灰になったハズのエロダゴが再生をはじめている。なんてこつたい！

アンビリバボーなタフさで、エロダゴが元の姿 いや、それ以上の姿になるうとしていた。

触手の長さは数十メートルに及び、体長は一五メートル以上の大きさ、頭はまるでアフロヘアーのようにパンパンだ。

エルザが叫ぶ。

「一時退避だ！」

触手が縦横無尽に暴れ周り、魔導騎士たちは散り散りに逃げ出した。

エルザが倉庫の物陰に身を潜めると、そこには先客がいた。ディーだ。

「厄介なことになったなエルザ大佐？」

「こんなところに隠れていないでさっさと退避しろ」

「隠れていたのではないよ、日陰で休憩していただけだ」

やっぱりディーは陽光の下が苦手らしい。

二人が隠れる倉庫の陰に、触手が獲物を探して現れた。

エルザの聖剣が触手を一刀両断した。

斬られた触手は緑色の液体をばら撒きながら逃げて行った。

すぐにエルザは追おうとしたが、その腕をディーが掴んだ。

「待て」

「なにをするかせ！」

エルザは腕を振り払おうとしたが、それを許さないディー。

「灰から蘇る敵とどう戦うというのだね？」

「構うかそんなこと、全力を尽くすのみだ！」

「そんな猪突猛進な性格では、これ以上の出世は望めんな。さらに出世の道を歩みたいなら、頭を使いたまえ」

「……くっ（たしかに今の私にはあれを倒す術はない）」

生半可な攻撃では傷一つ負わせることはできず、傷を負わせなくてもすぐに再生する。そんな敵をどうやって倒すのか？

ディーはこう助言をする。

「どんな生物にも弱点はある、それを探すことだな」

「そんな弱点いつたい……？」

「私が研究中の細菌兵器があるのだが、使ってみるかね？」

「バカなことを言うな、水源の近くでそんな恐ろしい細菌をバラまけるか！」

「……残念だ（良い披見体が見つかったと思ったのだが）」

細菌兵器が万が一、近くの川に流れてしまったら、ここから下流はそりゃー大変なことになってしまう。

どこからか叫び声が聴こえた。女の子の叫び声だ。

エルザはすぐさま倉庫の影から飛び出した。

触手が蠢く中にビビの姿があった。どうやらまた懲りずに捕まったらしい。

ビビを助けようとルーファスが必死になって魔導を繰り出す。  
「ウインドカッター！」

風の刃が触手を切り刻む。だが、いくら切っても切がない。  
エルザは聖剣に稲妻を宿して助太刀に入った。

「ルーファス大丈夫か！」

「ダメ余裕ない！」

ものすごく正直だった。

触手に捕まったビビはまたくすぐり地獄を味わされていた。

「きやははは……ちぬう……」

全身をくすぐられて身悶えるビビの姿を真下から見て、ルーファスは顔を一気に沸騰した。

鼻血ブー！

真っ赤な鮮血が触手にぶつ掛かった。すると、やっぱり触手はヒドク暴れてビビを解放した。

それを見ていたディーは呟く。

「もしかしたら、この生物にとってヒトの血は毒なのかもしれない（ヒトの血ほど甘美なものはないというのに）」

これまでの経由を見ても、エロダコが血を恐れていることは明らかだ。ただ単にルーファスの鼻血がばっちいと思ってるだけかもしれないが。

しかし、これに賭けてみる価値はあるかもしれない。

エルザは即座に判断を下した。

「ディー、病院に連絡して至急輸血用の血液を持ってこさせる！」



「断る」

ザ・断言！！

思わぬ答えにエルザは苛立った。

「どうしてだ、事は一刻を争うんだぞ！」

「輸血用の血液は常に不足している。そんな大事な血液を下賤な生物を殺すために使えるか」

「ここでこの怪物を殺さなくては、怪我人が出るかもしれないんだぞ！」

「なら、これを代わりに使え」

ディーはある物をエルザに投げた。それを受け取ったエルザは呆気に取られた。

トマトジュースだった。

「バカかつ、こんな物が代用品になるか、この藪医者めっ！（非常事態にこんなギャグをかますなんて、いったいどういう神経をしているのだ）」

そんなミニコントをしている間にも、エロダコは暴れ周りながら港の物資を破壊していく。

触手に破壊されそうな積み荷を見てビビが叫ぶ。

「ラアマレ・ア・カピス！！」

ビビの大好きな果物の積み荷が木っ端微塵に破壊され、ピンク色の果汁がそこら中に散らばった。

食べ物の恨みは怖い。

大鎌を構えたビビがエロダコの本体に立ち向かう。そして、捕まる。懲りないリピートだ。

「きゃーっ！ ルーちゃん助けて！」

ルーファスに助けを呼ぶビビ。しかし、ビビを救ったのは別の人物だった。

切れ味鋭い鉄扇で触手を切り刻み、ビビの身体を抱きかかえてカーシャが地面に下りた。

あの利己主義で有名なカーシャが人助けをするなんて、明日は絶対にハリケーンと大雪と雷雨と地震がまとめてくる。

抱きかかえられながらビビはカーシャを見つめた。

「カーシャありがとう（まさかカーシャに助けられるなんて）」

「これは貸しだからな、絶対に返すのだぞ、ふふっ」

邪悪な笑みを浮かべるカーシャ。やっぱりこの人に慈善活動って言葉はない。

ビビを無事に救ったカーシャだったが、二人のすぐ背後にはエロダコの本体が！

『ハリセンボンのーます 』くらいの勢いで触手が二人に襲い掛かる。

誰よりも早くルーファスが動いていた。だが、間に合いそうもない。

ビビとカーシャが眼の前で襲われる寸前、ルーファスの目に飛び込んできたモノは！

なんと、カーシャがビビの上着を全て剥ぎ取ったあああっ！！

おっぱいポロリン

「キヤーッ！」

鼻血ブツハーツ！！

これまでにないほどの鼻血がルーファスの鼻から放たれた。

それは止まることなく噴き続け、エロダコをペンキで塗りたくったように真っ赤に染めた。

鼻血ブツハーツ！！

鼻血ブツハーツ！！

鼻血がブツハーツ！！

体内の血液を全部出す勢いでルーファスは鼻血を噴き続けた。そして、驚くべきことに、鼻血を浴びたエロダコが見る見るうちに縮んでいくではないか！

エロダコは子供ほどの大きさまで縮んでしまった。今がチャンスだ！

エルザの手から光の鎖が飛ぶ。

「エナジーチェーン！」

鎖でグルグル巻きにされたエロダコは身動き一つできない。

やった、ついにエロダコを封じることになった！

鼻血を浴びたのはエロダコだけではなかった。

ビビは真っ赤になった身体から蒸気を昇らせていた。そして、渾身の力を込めて拳を握った。

「ルーちゃんのばかーっ！！」

グーパンチはルーファスの顔面ど真ん中にヒットして、力なくルーファスがぶっ飛んだ。しかし、鼻を殴られたというのに、もう一滴も血は流れなかった。

突然、空が眩い光で包まれた。

何かと空を見上げたカーシャがいち早く発見した。

「UFOか？（そんなまさか……）」

円盤型の空飛ぶ物体が上空から地上近くまで下りてくる。まさしくこれは未確認飛行物体、略してUFOだ。

UFOは目が眩むほどの閃光を放った。

この場にいた全員が強く目を瞑った。これってまさかキヤトル・ミューティレーションの前フリなのか？

キヤトル・ミューティレーションとは、強い光もしくはUFOを見た直後に気を失い、目が覚めたら身体のどこかに金属片を埋められているっていうアレだ。

だが、そんなことにはならなかった。

閃光が治まって、視界が元通りに戻ると……。

「エロダコがない！」

ビビが叫んだ。

みんなで辺りを探し回ったが、やっぱりエロダコの姿はなかった。

あのUFOがエロダコを連れ去ったに違いなかった。

この事件は今夜のニュース番組でさっそく特集が組まれることになり、クラウス王国のみならず、近隣の国でも高視聴率を記録した。

そして、鼻血ブーで入院を余儀なくされたルーファスの元に、ローゼンクロイツがお土産を持って遊びに来た。

「鼻血で入院なんて聞いたことがないよ（ふあふあ）」

「悪かったね（出したくて出してるわけじゃないんだ）」

「体調のほうはどうだい？（ふにふに）」

「まだちよつと頭がボーつとしてるかな……」

ルーファスの鼻の穴から赤い液体がツーツと流れた。また鼻血だ。

ザ・おっぱい！

ルーファスの脳裏にアノおっぱいが焼きついてしまっていた。思い出すたびに鼻血が出てしまう。やっぱり免疫なさすぎである。

ローゼンクロイツは思い出したように、ハンドバッグからお弁当箱を取り出した。

「お土産を持って来たよ（ふあふあ）」

「なにこれ？（お弁当箱って……なんか嫌な予感）」

お弁当箱を受け取ってフタを開けてみると、中に入っていたのはタコヤキだった。

「食えるかっ！」

あんな事件があったあとで、タコヤキを食べれるほどルーファスの神経は図太くない。

「美味しいから食べてみてよ、ほら、あ〜ん（ふあふあ）」

ローゼンクロイツは爪楊枝でタコヤキを差して、それをルーファスの口に近づけた。

ここまでされたら食べるしかない。しぶしぶルーファスはタコヤキを一気に口の中に入れた。

もぐ……っ!?

「うえっ！」

顔を真っ青にしてルーファスは気絶した。

それを見てローゼンクロイツは首をかしげた。

「おかしいなあ、美味しいのに（ふにふに）」

ローゼンクロイツはタコヤキを口の中に放り込んだ。

実はこのタコヤキの原料は“アノ触手”だった。しかも、生

地はホットケーキミックス、マヨネーズとソースの代わりに、

カスタードクリームとチヨコのトッピング。

隠し味は……七味唐辛子だった。

「美味しいのになあ（ふにふに）」

いつまでもその眩きが病室に木霊したのだった。

第七話 不良娘はピンクボム

《一》

今日こそ成功させなければならぬ！！

……なにがって、追試である。

しかも、正確には再追試だったりする。

一度目の召喚実技を失敗して、追試試験でビビを呼び出し、再追試の練習では異世界のタコ魔神を呼び出してしまった。

召喚といえばルーファス。もちろん悪い意味で。

そんなへっばこの上塗りをしないために、今日という今日は失敗が許されない。

いつも以上に気合いの入っているルーファス。その気合いが空回りしないことを祈るばかりだ。

「よし、ファウスト先生よろしくお願いします！」

必勝ハチマキをおでこに巻き、ルーファスは脇に魔導書、手には水性ペンキの入ったバケツを持って準備万端。

だが、ファウストの表情は険しい。いつもよりも眉間にシワを寄せている。

「ルーファス、本当にはじめていいのか？」

「はい、完璧です！」

気合いの入った返事をしたルーファスの身体から、ジャラジャラと音が鳴り響いた。

ジャラジャラの代名詞と言えば、魔導学院ではファウストだ。その理由は、いつも持ち歩いている魔導具がジャラジャラとうるさいからである。けれど、今日のルーファスはそれ以上だった。

友人知人のルーファス私設応援団のみなさまからの贈り物。

腰にぶら下げた魔導具の数々。魔除けの鈴と魔寄せの鈴（いっしょに装備したら意味がない）、お守り各種（交通安全、家内安全、恋愛成就）などなど。

首からは千羽鶴や束のニンニクなどを提げている（ほとんど意味ない）。

背中にもいろいろな魔導具を背負っており、サンバ衣装の羽根みたいなのが目立っている（しかも単色ではなく毒々しい色とりどり）。

はつきり言って、ほとんど邪魔な装備ではない。

その役立たずの魔導具のプレゼントした張本人が、部屋の隅でルーファスを応援していた。

「ルーちゃんがんばれー！」

マラカスとタンバリンを装備したビビだった。

ファウストがビビを睨み付ける。

「うるさい！」

さらにファウストはもう一人にも目を向けた。

「ところでカーシャ先生、なぜあなたがここにいますか？」



（なにを企んでいるんだ？）

「ヒマだからに決まっておろう」

役立たずの魔導具の大半はカーシャがプレゼントした物だった。そんな物を渡すくらいだから、きつと失敗するのを楽しみに見物しに来たに違いない。へっぽこ魔導士ルーファスを観るのがカーシャの人生の楽しみの一つだ。

ここでカーシャを追い出そうとしても、ゴタゴタするくらいことはファウストでもわかっている。いくら犬猿の仲であろうと、ファウストのほうがまだ良識を持ち合わせている。

が、この魔女は本当にどーしょーもない。

「ところでファウスト、ルーファスがなかなかこの試験をパスしないのは、貴様の教え方が悪いせいではないか？」

とかカーシャの口が抜かしやがった。

ピキッとファウストのこめかみに青筋が奔った。

「静かにしていただけませんか、カーシャ先生？」

「冗談でルーファスの気を和らげてやろうとしただけだ。こんなことでイチイチ腹を立てるとは、まだまだ青いなファウスト、ふふっ」

「私が、いつ、腹を立てたというのですか、カーシャ先生？」

「今だ」

冷笑を浮かべるカーシャ。それはカーシャが勝ったことを意味していた。

すでにファウストはカーシャのペースに乗せられ、その時点で負けていたのだが、さらに敗北を決定したのは……？

ファウストは自分の足下を見て愕然とした。挑発され、いつの間にか足が一步前へ出てしまっていた。その足がなんと、魔法陣を踏んづけてしまっていたのだ。

ガーン！

ルーファスショック！

せつかく描いた魔法陣が水の泡。

さらにファウストもショックを受けていた。

「なんたることだ……この私が……（許しませんよ、カーシャ先生）」

まだ乾いていないペンキが靴にぐっしより。水性ですぐ洗い落とせるとはいえ、踏んでしまったこと自体がショッキングだった。

さらに最悪なことに、ルーファスは呪文を唱え始めていたのだ。ルーファスはファウストとカーシャの言い争いなど、耳に入らないくらいテンパっており、自分だけでどんどん先に進めてしまっていたのだ。

つまり召喚術は失敗したのだ。

召喚術の内容には空間移送も含まれており、空間移送は魔導の中でもかなり高等な部類に入っている。ゆえに失敗のリスクも大きい。

召喚術の失敗パターンは大きく二つに分けられる。なにも起こらないパターンとなにか起こるパターン。

凶運の持ち主であるルーファスのことだ、どっちのパターンか言うまでもない。

魔法陣が真つ赤に輝き、局地的な地震が起きた。

揺れでコテたルーファスはペンキまみれ！

ビビのマラカスとタンバリンは大合唱！

そしてカーシャはとつても楽しそう！

こんな状況の中で、ファウスト一人が迅速な行動を取る。カーシャの挑発には負けても、魔導学院の講師である。その職務を全うし、その資質を兼ね備えている。

「アクアウオツシュ！」

呪文を唱えたファウスト。

大量の水によつて魔法陣を洗い流す。ついでにルーファスも流された。

魔法陣を消すことによつて、召喚の出口となるゲートを閉ざす。だが、すでに手遅れだった。

高等な魔力を持った存在は、道具や準備なしに空間転送をやつてのける。あくまで魔法陣は補助であり、切っ掛けでしかない。魔法陣を座標の指針として、出口までのルートをすでに確保してある場合、あとは自力でゲートを開けることも不可能ではないのだ。

魔法陣があつた真上の空間が歪みながら渦巻いている。

ファウストの周りにマナフレアが発生する。

「強力なレイラをあそこにぶつけてマナを逆転させ、こちらに来ようとしている存在にお帰り頂く。いいですねカーシャ先生？」

「そんなめんどくさいこと妾はらんぞ」

「……なっ！」

見事にファウスト玉砕。

カーシャに協力を仰ごうとした時点で判断ミスである。

思わずカーシャのせいで集中力が乱れたファウストの一瞬のスキを突き、空間の歪みは大きくなり稲妻が部屋中を駆け巡った。

まだこちら側に召喚されていないというのに、マナの乱れの激しさは、その力の片鱗を窺わせる。今、こちらに来ようとしている存在は、並の魔力を持った存在ではない。

魔導耐久の高い召喚室の壁にヒビが奔った。天井からは石片が落ち、ここまま行けば、もしくは存在がこちらに出てきたと同時に、この部屋が倒壊する可能性が出てきた。

もはや一刻の猶予も許されず、危険や犠牲を顧みている場合ではない。

ファウストはマナフレアを集めつつ、床でびしょ濡れになって倒れているルーファスに目を向けた。

「ルーファス！ なんでもいい、レイラをあそこに放て！」

「えっ、僕がですか!？」

ルーファスが“私”ではなく“僕”というのは、素が出てしまっている状態だ。こんな状態のルーファスでは、いつも以上にまったく頼りにならない。

孤立無援状態のファウスト。別にファウストが悪いわけじゃない。たまたま居合わせたメンバーが悪かった。

まだファウストの魔力は高まり切れていないが、時間がもう

なかった。

「クツ……マジ・ダークスファイア！」

巨大な暗黒の玉がファウストの両手から投げられた。

ダークスファイアは球から楕円に変形して飛び、空間の歪みに激突した。と同時に、進路を変えて天井をぶち破り遙か空へと消えた。そう、何者かによつて跳ね返されたのだ。

空間の歪みから片手で出ている。繊細で美しい人間に似た手。稲妻を纏いながら、両の手が空間をこじ開けた。

その全身が這い出してくる。

巻き起こった竜巻がすべてを薙ぎ払う。

強烈なプレッシャーと危険を感じたファウストは、誰とも知れず存在に攻撃を仕掛けようとした。

しかし！

金色の瞳で睨まれただけで、身体が硬直して動けなくなってしまうた。

瞳に籠もった強い魔力。それだけでアステアが誇る魔導学院の教師の動きを制してしまつたのだ。

そこに立っていたのは、露出の激しい黒いレザードで身を包んだ女。そして、大鎌をモチーフにしたギターを背負っていた。

息を呑むルーファス。

冷静に茶を飲むカーシャ。

そして、ビビは言葉を呑み込み突然逃げ出した。

だが！

「待ちなビビー！」

鋼のような女な声が響き、ビビはその女に首根っこを掴まれていた。

恐る恐る振り返ったビビ。

「……マ、ママ……久しぶり」

なんと失敗した召喚で現れたのはビビのママだったのだ！

ルーファス愕然。

「な、なんだってー！」

カーシャは表情を崩さない。

「（顔が似ている。胸は断然母親のほうが大きい、妾よりは小さいな、ふふっ）」

しかし、ビビのママが現れるなんて、こんな偶然あるのだから？

いや、これは偶然ではなかったのだ。

「シエリルの魔力を辿ってやっと見つけたよ。まさかこの世界にいるなんてね、つたく、親にこんな苦労させんじやないよ。

ほら、さっさと帰るよ！」

シエリルとはビビの本名である。

実はビビは家出真っ最中で、ずっと親に搜索されていたりしたので。

そして、ついに見つかってしまった。

ビビはママの手を振り切って逃げようとする。

「やだもん、絶対に帰らないんだから！（もう決めたんだから、なにがあっても家には帰りたくない）」

「聞き分けのない小娘だね、つたく誰に似たんだか」

「ママに似たのお〜！」

「アンタはパパ似たる。子供っぽいところがそっくりだよ！」

「パパといっしょにしないで、キモチ悪い！」

父親というのは年頃の娘に嫌われるものだ。

ようやく呪縛から解放された身動きの自由を得たファウストが、親子の間に割って入った。

「ここはクラウス魔導学院の敷地内だ。親子喧嘩ならば別の場所で行ってもらおう」

先ほど魔力で制されたというのに、まったく物怖じしていないところはさすがというところか。それどころか、ファウストの全身からは黒いマナが漲っている。スゴイ敵意だ。

ビビママは余裕の冷笑でファウストを見下している。正確には長身のファウストを下から上目遣いで見つめている。

「若造がうるさいねえ。アタシとやりたりのかい？」

「アステア王国では外国・異世界問わずに訪問者を歓迎している。七日日以内の滞在にはビザを必須としないが、それ以上親子喧嘩が長引くようであれば、正式な手続きを行ってもらおう」

「そんなに長引くわきゃないだろ、今すぐ……いない!？」

捕まえていたハズのビビがいらない!

どこに行ったのかと首を振るビビママの視線の先に立っているルーファス。その背中にビビは隠れていた。

「ルーちゃんあんなオバサンやつつけちゃって！」

「オバサンってビビのお母さんでしょ？ 無理だよ、私にそん

なことできるわけ……（見るからに怖そうで強そうだし）」

ルーファス、ガクガクブルブル。

ビビママが近付いてくる。ビビにというより、ルーファス目掛けて近付いてきた。そして、ルーファスの前で止まったかと思うと、舐めるようにルーファスのつま先から頭の先まで見回して、鼻を『ふふ〜ん』と鳴らした。

「アンタ誰だい？ まさかシェリルの彼氏ってわけじゃないだろうねえ？」

そう来たか！！

ビックリしたビビが絶叫する。

「ママーツ！！」

言葉に詰まりながらルーファスも叫ぶ。

「ち、違いますからーツ！！」

ビビママは残念そうな顔をした。『あゝあ、つままない』という残念な顔だ。

「まっ、アタシはシェリルが誰と付き合おうと構わないんだけどね。こんなひ弱そうな男じゃ、パパに殺されるだろうけど。

それ、と、遊びで付き合うならいいけど、結婚する気なら同じ種族じゃないと反感買うことになるよ、役人や国民からね」

ビビの容姿は人間に近いが、まったく別の種族である。比較的開けたアステアでも、異種族間の結婚は異端とされることが多く、ほかの国となれば迫害の可能性もある。

ルーファスの背中に隠れながらビビがママに食ってかかる。

「アタシが誰と付き合っって誰と結婚しようが勝手にしょ！」



「勝手なことがあるもんか、アンタいちよう第一皇女なんだよー！」

ビビママの発言で、辺りは一気に静まり返った。

ファウストは眉をひそめ、カーシャはニヤリと笑い、ルーファスは腰が砕けた。

「ビ、ビビが皇女お〜〜！！！」

尻餅をついておののくルーファス。

すぐさまビビが笑って誤魔化す。

「あはは、アタシが皇女なんてうそうそー。どう見たってただのちよつと激しい音楽が好きな一般人でしょ？」

が、すかさずビビママがツッコミ。

「アタシの名前はモルガン・ベル・バラド・アズラエル。旦那の名前はデイズ・ベル・バラド・アズラエル。そして、娘の名前はシェリル・ベル・バラド・アズラエル。真正正銘のアズラエル帝国の第一皇女だよ」

しかし、こんなことじゃへこたれないビビ！

「そんな証拠ないじゃん！！！」

たしかに、今のところモルガンが口で言ってるに過ぎない。

ここでカーシャが後方支援。

「知っておったぞ、ビビが外国の皇女だってことくらい（言わないほうがおもしろそうだから、ここぞと時まで黙っておくつもりだったのだがな）」

モルガンの後方支援だった。

ファウストは頭を抱えていた。

「まさか外国の皇族を呼び出してしまおうとは、外交問題に発展するかもしれん」

しかも、召喚術の失敗を招いたのは、他ならぬファウストだ。もちろんカーシャの挑発やルーファスの凶運、はじめからモルガンがビビを探していたこともあってだが。

さらにはじめにビビを呼び出してしまったルーファスの立場も危うい。話があらぬ方向に行つて、皇女を誘拐なんてことに話がこじれる可能性だつてないとは言ひ切れない。

ファウストはビビに対する態度を変えた。

「ビビ皇女、貴殿は皇妃と共にご帰国ください」

普段はカーシャと張り合つて、校舎内で高等魔法をぶつ放しついても、大人としての良識は持っている。が、こつちに大人はそんな良識なんてあるはずもなかった。

「良かったなルーファス、ビビと結婚すれば将来一国の主だぞ（その器じゃないがな、ふふっ）」

煽りやがったこの女。

そして乗せられるモルガン。

「ほほう、やっぱリシエリルの彼氏つてわけか、見る目ないねえーアタシの娘のクセして。でもなんでも言うこと聞いてくれそうだし、死ぬまでこき使えそうな感じではあるけど」

カーシャの策略にハマっている。カーシャは自分が楽しむことしか考えていない。そのために他人を壮大に巻き込むのだ。特にルーファスはいつつもいい犠牲者だ。

ビビがルーファスの腕を掴んだ。

「ルーちゃんアタシを連れて逃げて！」

「は？」

思わず目を丸くしたルーファス。

カーシヤが呟く。

「ビバ・愛の逃避行。駆け落ちとも言うがな、ふふふ」

事の方向性を理解したルーファスが叫ぶ。

「ちよつと、なんでそうなるの！！」

しかし、流れはそっち方向に急速に流れていた。

ビビがルーファスの腕を引っ張って走り出そうとする。

「いいからアタシを連れて逃げて！」

「なんで、どうして、私が!？」

「いいから！」

グイグイ腕が引っ張られる。連れて逃げると言うより、連れられて逃げるだ。

カーシヤが箒を取り出し、それをルーファスに投げつけた。

「受け取れルーファス！」

「えっ、なに!？」

反射的に箒を掴んだルーファスの身体が浮いた。箒が空を飛び、気づいたときには箒を離したら骨折する高さだった。

片手で箒、もう片手にはビビがぶら下がっている。

しかも箒はグングン高度を上げて、さっきに穴の開いた天井から遙か空へ。

「ぎゃあああああーす！」

情けないルーファスの叫び声。

そして、二人は星となった。

《 二 》

折れた簾が転がっている。

その近くで倒れていたビビがピクツと身体を震わせた。

「うう……どこ……」

両手を床につけ立ち上がるうとしたビビ。

「痛っ！」

足首に激痛が走った。

仕方がなくビビは足を伸ばして床に座った。

「え〜っと……ルーちゃんといっしょにホウキで飛ばされて……」

フラッシュバック。

大砲のようにぶっ飛んだ簾につかまり、空高く夜空の星になりかけた。ホウキは操縦ができなくて、グングン迫ってくる大きな建物。それは王都アステア最大の聖堂　聖リユーイ大聖堂だった。

辺りを見回すビビ。

空が近く、背の低い建物がここよりも下に見える。床だと思っていたのは屋根だった。

「……ルーちゃん！　ルーちゃんどこ!?（どうしようルーちゃんがない!）」

斜めになって折り返している屋根の向こうから人影が現れた。

ふらつく足取りのルーファス。頭を押さえて今にも倒れそう  
だ。

「うう……」

「だいじょうぶルーちゃん！（ああ……よかった）」

屋根から足を滑らせそうになったルーファスをビビが抱きか  
かえた。足が痛むのか少しビビは苦しそうな顔見せたが、すぐ  
にそれを隠して笑顔を作った。

ビビとルーファスが間近で顔を合わせた。

瞳に映るお互いの顔。

ビビは息を呑んだ。

時間が止まったようにふたりは動かない。

そしてしばらくして、ルーファスの口がゆっくりと動き出し  
た。

「……君、だれ？」

「……………」

見る見るうちにビビの瞳孔が開かれていく。

パチパチとビビの瞳が開閉した。

「えええ〜っ!? うっそー、ウソだよねルーちゃん！（ど  
ういうこと、なにが起きたの!）」

空まで響き渡ったビビの叫び。

ルーファスは首を傾げて、不思議そうな瞳でビビを見つめて  
いる。

「ルー・チャンって僕のこと？」

『ルーちゃん』が名字と名前みたいな発音になっている。

これはまさかの記憶喪失ってやつだろうか？

おそらく原因は落下による衝撃。

状況を把握したビビは焦った。

「アタシのこと覚えてないの!？」

「ぜんぜん」

「えっと、アタシの名前はシエリル・ベル・バラド・アズラエル、愛称はビビ。これでも魔界ではちょく可愛い仔悪魔でちょっとは名前が知られてるんですけどあー……覚えてない？（うわあくん、どうしよールーちゃんがあタシのこと覚えてない!）」

「ごめん、ぜんぜん覚えてないんだ（というか、自分のこともよく思い出せない。困ったなあ）」

記憶喪失確定！

現状、最大の問題はルーファスが記憶喪失だということ。

そして、ほかにも身に迫った問題があった。

「アタシがどうにかしなきゃ……えっと、えとえと……まずは病院にルーちゃんを連れて……」

辺りを見回したビビはある問題に気づく。

「降りれない!」

ここは屋根の上。屋根伝いに行けそうな場所もない。聖堂から伸びる塔がいくつも見えるが、遠くて遠くて話にならない。

つまりこの場所に閉じ込められたのだ。

「ルーちゃん魔法でビューンと下りられない?」

「……僕、魔法使えるの?」

ガーン！

そこまで忘れてしまったのか……。

でも、魔法を覚えていたとしても、ここから下りられる魔法をルーファスが使えるかは怪しい。

自力でどうにかできないなら、助けを求めるしかない。

「ちょっとルーちゃんここでじっとしてて」

ビビはそう言い残して歩き出そうとしたのだが、

「いつ！」

激痛が足首に走った。だんだんと悪化しているようだ。

心配そうな瞳でルーファスがビビの顔を覗き込む。

「大丈夫？」

「うん！ ぜんぜんへーき！」

ビビは精一杯の笑顔で答え、足の痛みを隠しながら歩き出した。

それでもルーファスに背中を向けたあとは痛みを隠せない。

痛くて痛くて歯を食いしばってしまふ。隠そうとしているのに、

どうしても歩き方がぎこちなくなってしまう。

「（ルーちゃんに心配かけちゃいけない。きつとルーちゃんは記憶を失って不安で仕方ないんだから、アタシがしっかりしなきゃー！）」

ビビの気持ちとは裏腹にルーファスは。

「（いい天気だなあ）」

空を見上げて和んでいた。

ビビは屋根の端までやって来て、身を乗り出して地面を眺め

た。

聖リユーイ大聖堂前には巨大なアンダル広場があり、その周りには多くの建物が囲んでいる。時計台や鐘楼、行政館や郵便局などから、美術館や博物館まである。人通りも多く、観光客でいつも溢れかえっている。

ビビは地上にいる人に向かって手を振った。

「助けてー！」

ビビが手を振ると向こうも振り返してくれるが、見事なまでに笑顔。

声は高さの壁に掻き消され、どうやらまったく意思疎通ができていないらしい。

「手を振り返して欲しいんじゃないかって助けて！」

でも笑顔で手を振り返される。

建物の高さもあるが、この地域は風が強いことでも有名で、ダブルパンチで声が掻き消される。

「だめっばい」

溜め息を落としてビビはルーファスの元へ戻ることにした。

ルーファスは屋根に腰掛け座っていた。

「お帰り」

「うん（困ったなあ。下りれないし、ルーちゃん記憶喪失だし）」

悩みでモンモンとしながらビビはルーファスの横にちょこんと座った。

空を見上げると太陽がギラギラ輝いている。陽が落ちるのが



早くなりはじめているが、たまに夏の日差しが戻ってくる。夕暮れも近いが、暑さが引くのはまだ先だろう。

日が暮れば夜が来る。

ビビがボソツとつぶやく。

「いつまでここにいればいいんだろ」

誰かが気づいてくれるのを待つか、それとも自力でどうにかするしかないのだろうか？

さすがに明日くらいになれば、誰かが二人に気づいてくれるかもしれない。

幕でビューンと飛んで行って、そのまま消息不明になれば、普通は気にしてもらえずはずだ。

遠くを眺めているルーファス。その横顔を見つめるビビ。

「ルーちゃんなに考えてるんだろう。やっぱり不安なのかな」

「(お腹すいたなあ。なんでだろう、ご飯食べてなかったけ?)」

「(なんだか深刻そうな顔してる。やっぱり不安なんだ)」

「(あつ、あの雲クロワッサンに似てる)」

「(やっぱりアタシがどうにかしなきゃ!)」

男女のすれ違いが起きていた。

ビビは穏やかな眼差しでルーファスを見つめた。

「ねえ、ルーちゃん?」

「ん?(ルー・チャンって呼ばれてもしっくり来ないなあ)」

「自分の名前も覚えてないんだよね?」

「ルー・チャンっていうんだよね？」

「うん、ルーファスだよ。だからルーちゃんなの（あ、そういえばアタシ、ルーちゃんのフルネーム知らないや……そんなことも知らなかったんだ）」

「えっ？（ルー・チャンじゃなくて、ルーファスって名前だったんだ）」

驚いた顔をしたルーファスを見てビビに不安が過ぎる。

「どうしたの驚いて？（アタシなんかマズイこと言っちゃったのかな？）」

「別に、なんでもないよ（ルーファス……ルーファスかあ。けっこうカツコイ名前だなあ）」

「（アタシに言えないこと？ どうしよう、アタシどうしたらいいんだろう）」

見事なすれ違いだった。

不安を胸に悩むビビ。

「（ルーちゃんにしてあげられること。記憶を戻してあげられたら……思い出を話したら……記憶が戻るかも！）」

ひらめいて心が晴れたビビだったが、またすぐに気持ちが沈んでしまった。

「（思い出……考えてみたら、まだルーちゃんと出会って間もないんだよね。こっちの世界に来て、知り合いなんていなかったから、ルーちゃんの近くにいること多かったけど、まだ一ヶ月も経たないんだ……）」

ルーファスとビビの出逢い。

笑顔を作ってビビはルーファスに話しかける。

「ねえルーちゃん、はじめて会ったときのこと覚えてる？」

「ごめん、覚えてない」

「だよなー」

少し沈んだ声で下を向いたが、すぐに気を取り直してビビは顔を上げた。

「アタシとルーちゃんの出会いは、ええつと二週間くらい前。

ルーちゃんが召喚に失敗してアタシを呼び出しちゃったんだよ？」

「そうなんだ（ぜんぜん覚えてないなあ）」

過去を振り返るビビ。

あの日、ビビはライブハウスにいた。

ビビがヴォーカルを務めるバンドの演奏を聴きに、観客たちが歓声上げて詰め寄っていた。

社会のしがらみから抜け出したいくて、皇女に生まれた運命から逃げ出してくて、ビビは歌い続けた。

しかし、どこへ逃げても追っ手が来る。

ビビを連れ戻そうと王宮の兵士たちが観客に化けて紛れ込んでいた。

それに気づいたビビは観客たちに助けられながら逃げようとした。

一時的に振り切ることができた。それでもすぐに次の追っ手が来てしまう。そのときだった。

甘い甘い香り。

別の世界から漂ってきた香り。それはルーファスが召喚に用いた香かうだった。別世界の扉がすぐそこにある。

そして、ビビは新たな一步を踏み出したのだった。

「それからルーちゃんの影響に取り憑いたと思っただら離れなくなっちゃって、いろいろ大変だったよね、あのときは」

「ごめん、やっぱり覚えてない」

「ほら、カーシャさんのせいで死にかけちゃって」

「カーシャ？（なんだろ、寒気がした）」

記憶を失っていても、カーシャのことは身に染みて覚えていると言うことだろうか。

「うん、魔導学院の先生だよ（そう言えばルーファスとカーシャって普通の先生と生徒って感じじゃないけど、どーゆー関係なんだろ？）」

「僕って魔導学院の生徒なの？」

「うんうん、クラウス魔導学院の四年生だよ」

「クラウス魔導学院って名門中の名門だよな？（すごいんだなあ僕）」

それはルーファスが起こした最大の奇跡だろう。ぶっちゃけそこで運を使い果たしたと、友人知人に散々言われている。それ以前から運は悪いというウワサもあるが。

しかし、ルーファスは不運を呼び込む体質でも、ここぞという時にはとびきりの運を発揮する。

あのときもそうだった……。

「アタシ……嬉しかったよ、あのとき」

「あのととき？」

「一生懸命ルーちゃんがアタシのこと守ろうとしてくれたこと。炎に包まれて二人して丸焦げなっちやいそうになつたとき、ルーちゃんはアタシのこと命がけで守ろうとしてくれたの、本当に、本当に嬉しかったよ」

顔を背けてビビは潤んだ瞳を隠した。

命をかけて守られれば、誰でも感謝や嬉しさの気持ち芽生えるだろう。けれど、ビビはそれ以上に思い沁しみみることがあった。

「(アタシのことを守ってくれる人、それも命がけで守ってくれる人はいくらでもいた。でもそれはアタシ自身を守ってくれるんじゃないくて、皇女であるアタシを守ってくれてるような気がいつもしてた。もしもアタシが皇女じゃなかったらどうなんだろうって……)」

ルーファスの影から離れたあと、ビビはこの世界のこの街に留まった。

ずっと自分の立場から逃げ続けていたビビは、逃げるだけではなく新たな何かをこの場所で見つけようとしていたのだ。

ビビが皇女だということを知らない人々に囲まれ、知っていても今まで誰もそのことに触れた人はいなかった。そんな世界でビビは何かを見つけようとしていた。

ビビは涙を拭って話題を変えることにした。

「昨日も大変だったよねえ。またルーちゃん召喚に失敗して変なの呼び出しちゃうんだもん。でもあれなんだったのかな、

結局なんだかよくわかんなかったよね」

「あれ？」

「エロダコだよ、エロダコ。もしかしてアタシが手料理つくってあげたのも覚えてない？」

「ごめん、まったく（それにしてもお腹すいたなあ）」

「（また辛そうな顔してる。記憶喪失のことあんまり言わない方がいいのかな。きつと記憶がないことで悩んでるんだ）」

またすれ違いだった。

空を見上げるルーファス。

「召喚か……（食べ物召喚できないかなあ）」

「なにか思い出した!?（召喚で何かキツカケが!）」

「いや……その……（食べ物のこと考えてたなんて言えないよね）」

「（深刻そうな顔してる。やっぱり悩んでるんだ。早く記憶を戻してあげなきゃ）召喚で何か思い出したの？ 今日も召喚の追試テストで……あ……（ママのこと呼び出したんだって、そちの問題のことすっかり忘れてた）」

そのときだった！

遙か空から雷鳴のように聞こえてくるエレキギターの演奏。

大鎌をモチーフにしたギターをまるでサーフボードのように乗りこなし、グングン空を飛んで何者かが近付いてくる。顔が見えなくても誰だかすぐわかった。

「ママ!？」

叫び声をあげたビビ。

モルガン登場！

「やっと思つけたよシエリル！」

ギターに乗った変人に登場にルーファスは戸惑っていた。

「あのんだれ？（あれってギターなのかな、それとも鎌なのかな。上に乗ってるのにどうやって演奏してるんだろ。コンポになってるのかな？）」

空飛ぶギターに興味津々。

いきなりの登場でいきなり語りはじめるモルガン。

「アタシは旦那と違って腹が据わってるからね、決めたよ。アタシがその男と駆け落ちしたいならそれでもいいだろう。だがな、アタシはアタシより強い男じゃなきゃ娘はやらないよ！」  
話が飛躍しすぎていた。もともとこういう性格なのか、それともどっかの魔女の入れ知恵があったのだろうか。

ビビですら目を丸くしているのに、記憶喪失のルーファスにしてみれば、意味がわからないのも当然。

「僕がこの子と駆け落ち？」

「惚れてんだろ、アタシの娘に」

「そうだったのか！！（すっかり記憶がなくて忘れてたけど、僕とこの子は駆け落ちの最中だったのか！）」

記憶を失ってるせいで洗脳されてしまったルーファス。

母親であるモルガンのことならビビがわかっている。

「（言い出したら絶対に聞かないんだから）ルーちゃんいっしょに逃げて！」

ビビはルーファスの腕をつかんで走ろうとしたが、

「うっ（足が……）」

足首は見るからに腫れ上がっており、無理して動けるような状況ではなくなっていた。

ルーファスがビビを抱きかかえた。

「いつしよに逃げよう！」

無駄にかっこいいルーファス。記憶を失ってるせいだろうか？

走り出すルーファス。記憶を失ってるせいで自分の身体能力まで忘れているのだろうか。

「もうダメだ……（疲れた）」

すぐにルーファス失速。

さらにモルガンの魔の手が襲い掛かる。

「逃がしゃしないよ、スパイダーネット！」

モルガンの手から蜘蛛の巣のようなネットが放出して、ビビもろともルーファスを捕らえようとした。

空気が烧ける臭いがした。

「ファイア！」

ルーファスの手から放出した炎がスパイダーネットを焼き尽くす。

「ルーちゃんすごーい！」

ビビは感嘆の声をあげた。

魔法を使ったルーファスが一番驚いていた。口をあんぐり開けたまま、身動き一つしない。

そこへすかさず大鎌ギターを振りかざすモルガン。手加減な



しに首を狩る気だ。

「死ねーッ！」

モルガンの叫びに重なるようにビビも叫んだ。

「ルーちゃん危ない！」

そして、ビビはルーファスの身体を押し飛ばし、二人はもつれ合いながら屋根を転がった。

屋根を転げ落ちる二人。

その姿は一瞬にして見えなくなってしまった。

《三》

ふかふかの白い雲の上にルーファスとビビは落ちた。

思わずビビは、

「天国？」

と、つぶやいてしまった。

たしか高い屋根の上から落ちたはずだ。

なのに行き交う人々が同じ目線くらいのところを歩いている。

しかも、すぐに近くには見慣れた顔。

「バンジージャンプはヒモをつけてやるものだよ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツだった。

どうやらローゼンクロイツに助けられたらしい。

二人を乗せた雲は霞み消え、尻餅をついて地面に落とされてしまったが、もう地面との距離は三〇メートル（三六センチ）

もなかった。

でもちよつと痛い。

「いつた〜い！」

ほつぺを膨らませてビビちゃんは可愛らしさで抗議。

が、そんなことなどローゼンクロイツが意に介すはずもなく、いつもどおりに自己中心スルートーク。

「スカイダイビングもパラシュートをつけてやるものだよ（ふあふあ）」

会話があまり噛み合わないのはいつものこと。わざとやっているともウワサもあるが。

ルーファスはビビとローゼンクロイツを交互に見ている。関係性を見いだして解釈しようとして一生懸命に働かない。

「ええっと、もしかしてこの子も僕の知り合いだったりする？」

すぐさまビビが二人に説明する。

「ルーちゃん記憶喪失になっちゃったみたいなの。それでこのとぼけた変態がローゼンクロイツ、これでも男の子なんだよ？」

（でも本当に男の子なのか、今でも信じられない）」

「ええっ男なの!?(どう見ても女の子だし!)」

ルーファスシヨック!

ルーファスでなくとも、だいたいの方はシヨックを受ける内容だ。これまでローゼンクロイツに告白して撃沈した男は数知れず。ちなみに女の子のファンも多いらしい。

友人、それも幼なじみが記憶喪失と聞いても、いつもどおり

あまり表情を崩さないローゼンクロイツに、ビビはちょっとばかり不信感を持った。

「ルーちゃんが記憶喪失って聞いて驚いたり心配しないの？」

「記憶を失っても彼の魂は不滅さ（ふにふに）」

「そういう思想の話をしてるんじゃないかって、アタシたちのこと忘れて、思い出もなくなっちゃうんだよ？（そんなの悲しいじゃない）」

「……そうなの!?（ふにー!）」

目を丸くして驚いた表情をするローゼンクロイツ。

そして、すぐに口元だけでニヒルに笑ったかと思うと無表情になる。

なんだかビビは納得できなかったが、

「とにかくありがと、アタシとルーちゃんのこと助けてくれて。ローゼンクロイツが偶然ここにいなかったら、今頃アタシたちペしゃんこだったし」

「……トマト（ふっ）」

ボソツとつぶやいたローゼンクロイツ。

すかさずビビちゃん言い返す。

「グロイこと言わないでよ!」

「この世界に偶然なんてものはないよ（ふっ）。すべては必然さ（ふにふに）」

「ってことはルーファスとビビのことを助けに来てくれたのか？」

「ボクとルーファスは運命で結ばれてるからね（ふあふあ）。

偶然ここに居合わせたんだよ（ふにふに）」

どっちだよ！

さらにローゼンクロイツは続ける。

「偶然と必然は表裏一体なんだ（ふにふに）。つまりどちらも同じものということだね（ふにふに）」

結局なんでローゼンクロイツがここにいたのは不明。

クルツと一八〇度回転して背を向けるローゼンクロイツ。

「じゃ、ボクは教会の役人に呼ばれてるから（ふあふあ）」

それがここにいた理由らしい。

肩越しにヒラヒラ〜と手を振って、立ち去ろうとしたローゼンクロイツの前に、ギターに乗ったモルガンが現れた。

「屋根から落ちたときはヒヤッとしたけど、だいじょぶだったみたいね」

だが、かる〜く横を通り過ぎるローゼンクロイツ。

「ちよつと待ちな！」

モルガンはローゼンクロイツを呼び止めた。

理由は？

「アンタ、その男と運命で結ばれてるとか言ってただろ？」

いつの間に聞いていたのだろうか、耳がいい。

振り返るローゼンクロイツ。

「ボクとルーファスは切って切れない運命で結ばれているよ（ふあふあ）」

それを聞いたモルガンは、なぜかルーファスをピシッと指差した。

「アンタ二股だったのかい!!」

なんか話がこじれてる。

しかも、それを認めてしまうルーファス。

「そ、そうだったのか、僕は二股だったのか!!」

洗脳だ。記憶がないことを良いことに、どんどんルーファスが洗脳されていく。

しかも、ローゼンクロイツまで驚いた顔をしている。

「……ル、ルーファス、二股なんてひどい! (ふーっ!)」

この場の空気に流されてビビまでもが、

「やつぱりルーちゃんとローゼンクロイツってそういう関係だったのーっ!」

この中に誰か冷静なヤツはいないのか?

ただ、学院内でもルーファスとローゼンクロイツの、薔薇色のウワサがかねてからあつたりする。友達の友達が二人で手を繋いでいるのを見たとか、二人が公園のベンチでイチヤイチャしてるのを見たとか。まあ、そのウワサの出所をたどると、一人の魔女に行き着くことはいうまでもない。

モルガンはルーファスの襟首をつかんで持ち上げニヤリとした。

「よくもアタシの娘を傷もんにくれたね!」

殺される。絶対に殺してやるって眼でルーファスを見ている。しかも、怒った表情じゃなくて、薄ら笑いなのがよけいにマジっぽい。

ルーファスとモルガンの間にビビが割って入り、両手を広げ

て二人を押し離した。

「ママってば！ アタシ、ルーちゃんになにもされてないから！」

「そうなのかい？ それはそれで度胸ない男だねえ。そんなチキンにはアタシの娘はやれないね。そっちの娘とはもう寝たのかい？」

ルーファスは顔を向けられたが記憶喪失だし、なんだか魂が抜けたような表情でそこに突っ立っている。

次に顔を向けられたローゼンクロイツは首を横に振った。

「……最近は（ふう）」

なにその思わせぶりなセリフ！

意味深なローゼンクロイツの発言でビビちゃんシヨック！

「最近はってことは……やっぱりルーちゃんとローゼンクロイツって……」

最後まで口に出せなかった。

だが、疑惑は確信へ。

ビビフィルターを通したルーファスとローゼンクロイツのめくるめく愛。

あゝんなことや、そゝんなことをしちゃってる映像が脳裏を過ぎる。

顔を真っ赤にしたビビが駆け出す。

「わあゝん、ルーちゃんのはかあゝゝつ！」

いよいよ展開が混沌を極めてきたぞ！

そして、ローゼンクロイツが口を開いた。

「小さいころはよくいっしょに寝ていたね（ふあふあ）。お風呂もいっしょに入っていたよ（ふあふあ）」

子供のころの思い出話？

だが、ここにもうビビの姿はない。

しかも、モルガンもビビを追いかけていない。

さらにいえば、ルーファスはモルガンに眼殺ガンサツされた時点で気絶していた。

つまりローゼンクロイツの話为谁も聞いていなかったことになる。

なんとという運命のイタズラ！

さらにスパイス登場！

予備の幕の乗って現れたカーシャ。

立ったまま気絶しているルーファスを見つけて、カーシャは強烈な平手打ちをお見舞いした。

バシーン！

そしてルーファスはさらに気絶した。

さらに平手打ちの衝撃で倒れ、石畳に後頭部をぶつけた。

ゴン！

その衝撃で眼を覚ますルーファス。

そして、発した衝撃の一言！

「おばちゃんだあれ？」

ただたどしい言葉でしゃべったルーファス。

そんな普段と違うルーファスの変化を軽くスルーして叫ぶカーシャ。

「妾に向かつてオバチャンとは良い度胸しておるな！（ついにルーファスも反抗期を迎えたともいうのか！）」

胸ぐらをカーシャにつかまれブンブン振られるルーファスは涙目。

「おばちゃんこわいよお、このおばちゃんこわいよお」

「オバチャンオバチャン抜かしおって！ この白く瑞々しいもち肌は十代の人間のギャルにも劣っておらんのだぞ！！」

「うわあ〜んおばちゃんがいじめるよお」

さすがのカーシャもちよっぴりおかしいなあと気づきはじめた。

「まさか強く叩きすぎたか？」

最初の一発か、あるいは床にゴンのせいだろう。

記憶喪失だったルーファスが、さらに幼児退行までしてしまったのだ。

一方そのころ。

足を引きずり続け走っていたビビは、もうゴール直前だった。

沿道の脇にはのぼりが掲げられている。

『第三回アステアコスプレマラソン大会』

いつの間にかビビはマラソン大会に乱入してしまっていたのだ。

ビビは走り続けた。どんなに辛く苦しくても、そこにゴールの光がある限り。

その幼気な姿に胸を打たれ、沿道の人々がビビに声援を送る。



「がんばれ！」

「ピンクの子ががんばれ！」

「ゴールしたらオレとデートしようぜ！」

「今日のパンツ何色？ げへげへ」

だからビビは走り続けた。

見ず知らずの人々が応援してくれている。

しかし、ビビの足はもう悲鳴を上げていた。

もう足を引きずりながら歩くのが精一杯。いや、歩くことさ

え困難な状況の中で、ビビは戦い続けたのだ。

彼女はいつたいなにと戦っているのか？

ゴールはすぐそこだ！

ビビのためにゴールのテープが貼り直される。

あと少し、もう手を伸ばせば届きそうだ。

ビビの手がゴールテープに伸びる。

指先がテープに触れた瞬間、ビビの身体がスローモーションのように前のめりになった。

そして、そのままビビは転倒した。

沿道の人々が口を開けたまま息を呑む。

静まり返ったこの場所に、季節外れの桜吹雪が舞い落ちた。

空を見上げると、天空を舞う巨大な翼竜の影。

白銀の長い毛を蓄えた靈竜ヴァツファート。極寒の地グラ―シュ山脈の主にして、アステア王国の守護神。

桜吹雪だと思われた物は、ヴァツファートが運んできた粉雪だった。

人々が国家であるヴァツファートの歌を口ずさみはじめた。  
この歌には魔力が宿っており、輝く希望の光が心の底から湧いてくる。

ゴールテープを切って倒れていたビビが、両手を地についてしっかりと立ち上がる。

足の痛みはどこかに消えていた。すべては歌の力。

「みんな……ありがとう……」  
涙ぐむビビ。

改めてビビは歌の力を知った。

「(やっぱり)アタシ歌が好き。今までアタシは歌うことすべてを放り出そうとしてた。でも今は……誰かに伝えるために歌いたい)」

マラソンを完走したビビは拍手で迎えられた。

アステアマラソン大会では、速さを競うだけでなく、芸術賞などの特別賞が数多く設けられている。その中の一つ、感動で賞にビビが輝いた。

戸惑いながらもビビは壇上に背中を押されて担ぎ出された。

このマラソンを主催するトビリアーノ国立美術館の館長から、受賞のトロフィーと記念品が贈呈される。

「痛みを耐えてよくがんばった。感動した！」

館長の言葉で授賞式は盛り上がり、トロフィーを掲げるビビに記念品のピンクボム 別名ラアマレ・アカピスが贈られた。  
じゅるりとビビは唇を拭った。

ピンクボムはビビの大好物のフルーツだ。

超高級大玉ピンクボムの大きさはビビの顔ほどもある。こんな大きなピンクボムを丸々一個、独り占めして食べるのがビビの幼いころの夢だった。

幼いころママから言われた言葉がビビの脳裏に蘇る。

ラアマレ・ア・カピスは大人の食べ物だから、子供は一日八分の一切れしか食べちゃダメよ。

その言い付けに縛られ、今日の今日までビビの夢は叶うことがなかった。

でも、ここは王宮でもなければ、ビビがいた魔界でもない。自分の力で手に入れたピンクボムを丸々食べても、文句を言う者など。

「シエリルーツ！」

怒号と共に空飛ぶギターに乗ってぶっ飛んでくるモルガン。

ピンクボムを抱きかかえ守ろうとするビビ。

「このラアマレ・ア・カピスは誰にも渡さないんだから！」

そして、ビビは思わぬ行動に出た。

ピンクボムを上空に投げたかと思うと、時空保管庫から大鎌を召喚して、その刃でピンクボムをカッティングしたのだ！

八つ切りにされたピンクボムが一切れずつ落ちてくる。

ビビはキャッチした一切れを怒濤の勢いでむしゃぶりつく！  
まるでスイカの早食いだ。

美少女ビビの形振り構わぬ行動に歓声があがる。

ビビは一切れを完食すると、その皮を投げ捨てて、次に落ちてきた一切れをキャッチして食らいつく！

「もぐ（絶対に）……もぐ（絶対に）……もぐもぐもぐ（ひとりで食べてやるんだから！）」

次々と落ちてくるカットフルーツを平らげるビビ！

そして、モルガンがビビの目の前にやって来たと同時に、ピンクボムは完食された。

「うっぷ……（食べ過ぎた）」

ビビの足がグラつく。

モルガンが眼を丸くした。

「まさか……今のは……ラアマレ・ア・カピス！（なんてこつた）」

動揺するモルガンの前で、ビビは顔を真っ赤にしてユラユラと酔っぱらいのように踊った。

いや、本当に酔っぱらっているのだ。

「ひつく……もっとラアマレ・ア・カピスもってこーい！」

だから一切れしか食べちゃダメって言われていたのに。

「あはははは、あははは」

笑いながらビビは大鎌を振り回した。

その瞳は金色から燃えるような赤に変わっていた。

《四》

酔っぱらいと化したビビを止めようとモルガンが魔法を放つ。  
「スパイダーネット！」

広がったネットがビビの頭から覆い被さって来ようとする。

ビビは手に持っていた大鎌をfrisビーのように投げた。

「あははははは！」

ビューン！

凄まじい勢いでぶっ飛んだ大鎌は回転しながらネットを切り裂き、さらに勢いは留まらず風を切りながら、集まっていた人々目掛けて飛んでいった。

危ない！

大鎌がオツサンの頭部を掠め飛んだ。

なんとという逆モヒカン！

オツサンは大鎌に髪の毛を切られ、お外に出られない髪型にされてしまった。

それでも大鎌の勢いはまだまだ収まることを知らない。

人々の服や髪を切り裂き大鎌は踊り狂った。

たちまち悲鳴の大合唱。

ポロリン、ポロリン、またポロリン

みなさんのご想像にお任せするモノが次々とポロリンしていく！

それにしても血の一滴も流れず、服と髪だけを切り裂く絶妙なコントロール。今のビビなら鎌投げ大会で金メダル間違いなしだ。そんな大会あるかわからないが。

グルグル回った大鎌がビビの手元に戻ってきた。回転する大鎌を見事にキャッチするとは、鎌取り大会で金メダル間違いなしだ。そんな大会あるかわからないが。

「あはは、なんでみんな裸なのー？」

自分でやったんだる！

そんなツツコミ酔いどれに言っても意味がない。

モルガンが鎌の付いたギターを握った。

目には目を、歯には歯を、鎌には鎌を！

「大人しくしなシエリル！」

モルガンの鎌ギターが振り下ろされる。

ガツ！

ビビの大鎌の柄がモルガンの鎌の柄になっているギターのネックを受け止めた。

ギターをそんな使い方したら絶対に調律が狂う！

てゆか、ギターは武器じゃないという苦情は受け付けない。

なぜなら、エレキギターは太古の昔から武器だからだ。その証拠に、過激なギタリストはよくギターを振り回して武器にするし、ときには燃やしたりするわ、観客に投げつけたりもする。どう考えてもエレキギターは武器である！

力押しでモルガンが鎌ギターをブンブン振り回す。娘を殺る

気満々だ。

一方のビビは酔拳を駆使する。

ゆらり、ゆらりと捉えようのない動き。かと思うと速攻を仕掛け、やっぱり仕掛けないで、やっぱり仕掛ける。

「あははは、ママに遊んでもらうのひさしぶりー！」

「ビビが空中に飛び上がり、意味なくバク転。ついでに意味もなくパンチラ。今日は白と黒のストライプ（ちっちゃなりボン付き）だ。」

トリツキーなビビの動きに翻弄されるモルガンは武術で競うことをやめた。

「シエリル歌で勝負するよッ！」

「歌大スキー、あはは！」

ビビはこんな状態で歌えるのか？

ギターを構えるモルガン。やっとギター本来の使い方をされる。

空を飛んだりすることからもうご存じかも知れないが、このギターは魔導具であり、演奏は魔力を帯びる。

ガンガンにギターを掻き鳴らしはじめると、ギターの音のほかにドラムやベースの音も響いてきた。

大きく息を吸い込み、モルガンは力強い歌声を吐き出した。

怒り渦巻く感情が歌声に宿っている。

歌声によって大地が震え、建物を揺るがす。

攻撃と威圧のサウンドが破壊をもたらし、さらに不気味さと苦しさや痛みサウンドが人々に恐怖をもたらす。

それは戦の歌であり、その先にある死を暗示していた。

間奏に入りモルガンはビビに視線を送った。

「アズラエル一族は死の一族って言われていることはシエリルも知ってたんだろ。アタシらは魂を狩ることによって強大な力を得ることができる。今じゃ契約だなんだで、好き勝手に魂を狩ることは禁止されちまつてるけど、それ以前の血塗られた歴史は怨念で渦巻いてるのさ。この歌はそういった負の塊なんだよ」  
再びモルガンの歌声が響く。

街の隙間に悪寒のする風が吹き荒む。

建物が腐食しはじめた。

騒ぎを駆けつけた治安官たちがやって来たが、歌声を近くで聞いた途端、気分が悪くなってその場でうずくまってしまった。バルコニーから人が飛び降りようとしている。

街灯にロープを引っかけて首をつろうとしている人がいる。

負の魔力がこもった歌は人々の心を蝕み闇を生み出す。

親子歌合戦が王都アステアを未曾有の恐怖で呑み込もうとしている。親子歌合戦って言葉の響きだけなら、グダグダな番組企画みたいなのに。

ビビは大鎌からマイクスタンドに持ち替えた。

ついにビビが歌い出すのか!?

「ひつく…… あーあーマイクテストチュー…… チューだって、チューって、チューってなにそれ、あははは、あはははははははは！」

だめだ、酔ってて話にならない。

このままでは歌合戦にならないじゃないか。これじゃあワンマンライブだ。企画倒れになってしまっではないか！

せっかく中継カメラで撮影しているのに！！

マラソン大会の取材でたまたま居合わせたテレビ局が、モルガンの歌声をあるうことが臨時の生放送で国中に流していたのだ。

このままでは国中で自殺祭りが起きてしまう。

即刻放送を中止させようと局や王宮も動いたが、歌の持つ魔



力で聞きたくないのに聞いてしまうというしがらみに囚われてしまっていた。

臨時決議によつて魔導部隊が編成され現場に派遣されたが、歌声と演奏を生の間近で聞くと精神が負に蝕まれなにもできなくなつてしまった。もうモルガンに近付くことすらままたらないう状態なのだ。

だがそんな中でカーシャは余裕で現場にやつて来ていた。

街中で蝕まれ倒れる人々に目を配るカーシャ。

「精神力の低い小童どもには堪えるか（いや、そういうわけでもないのか）」

カーシャに腕をつかまれルーファスは引きずられて来た。

「あたまがガンガンするよお、あのおばちゃんのうちうるさくてこわいよお」

「（怖がっておるが、ほかの者に比べれば影響が少ない。ほう、逆に精神の未熟な子供は、影響される精神も持ち合わせていないと言うことか）」

街中、国中が危機に陥っている中で、カーシャはその対応を決めかねていた。アステア王国が滅びてもカーシャは悲しんだり心が痛いんだりしないが、ほかに困ることがあつたりした。

「ふふっ、楽しみが減るな」

長い眠りから覚めたカーシャの今の楽しみは、ルーファスウオッチングと悠々自適な学院生活だ。それを考えるとこの街が滅びるのは困る。やつぱりカーシャは利己的なのである。

ルーファスとカーシャに気づいたビビが、二人のもとに駆け

寄ってきた。

「あははははは！」

笑いながらビビはルーファスに抱きついた。

そして、笑いながらルーファスの体を締め上げる。

「あははは、ルーちゃん元気つきー？」

「いたいよお。おねえたんはなしてよお」

「どーちたのルーちゃん、しゃべり方カワイイっ」

二人の様子を見ながらカーシャはおでこに手を当てた。

「ビビまでどうしたのだ、まさか酔っておるのではなからうな？（ふふっ、笑えん）」

「酔ってないデース！」

酔ってる人は必ずそう言う。

カーシャはルーファスからビビを引き離し、ビビのツインテールを両手でつかんで拘束した。

「よく聞けビビ。おまえの母親が起こした問題だ、子供のおまえがどうにかするのだ（できれば妾はなにもしたくないのである）」

さすがカーシャ！

めんどくさいことは自分じゃやらない主義の代表だ。

というわけで、カーシャはビビの髪の毛をつかんだまま投げたーッ！！

「い、ったーいー！！」

絶叫しながらビビが宙を飛んだ。

地対地ミサイルのように上空からモルガン目掛けて落下。カ

ーシャのコントロールは完璧だった。さすがいつもルーファス  
投げで培った技だ。

モルガンが演奏を一時中断して　　と言っても自動演奏機能  
で音は流れ続けているが、とにかくモルガンはネックを握り締  
めギターを逆に持ち、とある球技のフォームで迎え撃った。

そう、バツティングフォームだ！

カッキーン！

「ぎゃああああつ！！」

鳴り響くビビの悲鳴。

打ち返されたビビがぶっ飛び、その先にぼつーと突っ立っ  
ていたのがルーファス。

ドカーン！

大激突したルーファスとビビ。

だが、ビビは軽傷で済んだ。なぜならルーファスが受け止め  
たというか、良いクッションがわりになったというか、良く言  
えば身をしていしてビビを守ったのだ。

その一部始終を見ていたモルガン。

「まさか……（あのガキンチョが危険を顧みずシエリルを守っ  
たというの？）」

見事な勘違い！

でもポジティブな解釈！

痛む体を押さえながらビビがゆっくりと立ち上がる。もうす  
っかり酔いは醒めてしまった。

「いてて……カーシャさんもママもホントに容赦ないんだから

……っルーちゃんだいじょぶ!？」

自分の近くで倒れているルーファスにビビは気づいた。

カーシャに投げられ、モルガンに打ち返されたのはあつという間の出来事で、ルーファスが人間クッションになっていたことに今気づいたのだ。

慌てたビビはルーファスの上体を起こして肩に手を掛けると激しく揺さぶった。

「ルーちゃんしつかりして!」

ブンブンされるたびに、ルーファスの首がガツクンガツクン揺れる。あんまりやると首の骨折れちゃうよ。最悪もう折れる可能性もあるが。

閉じられたルーファスのまぶたがピクツと動いた。

「うつつ……」

ゆっくりと開かれるルーファスの瞳をビビは覗き込む。

「ルーちゃんだいじょぶ!」

「……ここは……?」

「ルーちゃん? (よかった、死んでない)」

「わたしはだーれ、ここはどこ?」

「えっ?」

「ガーン!」

「やっぱり記憶喪失。」

でも、幼児っぽさは抜けているような気がする。一段階回復したのか、それともさらに悪化したのだろうか?

再び歌いはじめたモルガンの声がルーファスの耳にも届く。

すると力なく立ち上がったルーファスは、ぶつぶつ呟きながらゆらゆらと歩き出した。

「えへへ……なんだかわからないけど首つって死のう」

幼児退行が回復したせいなのか、歌の影響をダイレクトに受けてしまったのだ。

どこに行こうとするルーファスの腕をつかんで必死にビビは止めた。

「ルーちゃん行かないで、アタシの傍にいて！」

「なんだかわからないけど、私みたいな人間は死んだ方がいいんだ、そうだ、そうに決まってるよ、えへへ」

笑い方が完全に壊れていた。

ビビはルーファスを引き止めながら遠くモルガンを見つめた。あの歌を止めなくては、そうしなければ大切なひとを失ってしまう。

国中が悲しさに包まれてしまう。

「そんなのイヤ！」

大声でビビは叫んだ。

でも、どうしたらいいのか、今の自分になにができるのかビビにはわからなかった。

「ママ……ママに勝たなきゃ（でもアタシにそれができるの？ だってママなんだよ、アタシよりも強くて歌もうまいママなんだよ？）」

瞳を閉じたビビ。思い出されたのは沿道から聞こえてきた歌声。自分を勇気づけてくれたみんなの歌。

そのときにビビは再確認したのだ。

「アタシやっぱり歌が好き。だからアタシは歌わなきゃいけないんだ。そして、ママの歌に勝つ！」

決意が奇跡を呼んだのか、偶然にもどこからか心地の良い演奏が聞こえてきた。

アンダル広場のその先の聖リユーイ大聖堂から、そのメロディは街中に響き渡っていた。

間違いない、聖リユーイ大聖堂にある世界最大級のパイプオルガンだ。

魔導の力が宿ったそのパイプオルガンは、演奏者の魔力によってさまざまな効果を発揮する。その調べは街中に響き渡り、年に一度だけ建国記念日にその音色を聞くことができるのだ。

けれど建国記念日は三日後である。そう、誰かが何らかの意図を持って演奏をしているのだ。

国中に響き渡るパイプオルガンの音色はバラードを奏でていた。

ビビはハッとした。

「この曲……聞き覚えがある！」

勝手に路上でちゃぶ台を置いて茶を飲んでいたカーシャもこの曲を知っていた。

「ふふつ、太古に詠まれたライラを題材にした歌だな。屍の王とそれを愛した女の物語。絶望にありながら、希望と愛を歌ったくだらん曲だ。曲名はたしか……」

ビビが言葉を紡いだ。

「朽ち果てようと永久愛ここにあり」

作詞作曲を誰がしたか不明であり、正確な題名すら不明だったが、そのフレーズが何度か使われていることから、それが歌の題名として広まっていた。

「ママが独りで歌ってたの聞いたことがある」

この歌はこちらの世界であるガイアのみならず、魔界などでも知られた歌だったのだ。

なにも言わずカーシャがビビにマイクを投げつけた。

ビビはうなずき大きく深呼吸をした。

そして……。

優しい歌声が国中に響き渡った。

死者のように嘆いていた人々に生氣を取り戻そうとしていた。ビビの歌声が人々を救っている。

腐食していた建物が再生しはじめ、王都アステアは元の活気を取り戻そうとしていた。

しかし、モルガンも負けてはいなかった。

世界全体の放出していた歌と演奏をビビだけに向けたのだ。

歌に込められた魔力と魔力がぶつかり合う。

余裕の笑みを浮かべるモルガン。

苦痛に顔を歪ませるビビ。

再び腐食がはじまった。今度はビビの周りだけだ。石畳が風化し、金属が腐蝕し、物が崩れはじめ。

歌い続けるビビのすぐ間近は、かろじて腐食の侵蝕を抑えていた。

しかし、ビビが蝕まれるのも時間の問題だ。

腐食した街灯の根本が歪んだ。揺れる街灯の先にいるのはビビだ！

「危ない！」

ルーファスが叫んだと同時に街灯が倒れビビの頭上に落ちようとしていた。

気づいたモルガンも演奏を止め叫ぶ。

「シエリル！」

地面に叩きつけられた街灯が轟音を立てた。

ビビは無事なのか？

地面に倒れていたビビ。その視線の先に見たものは、街灯の下敷きになり、頭から血を流したルーファスの姿。

皆息を呑んだ。

そして、ビビはルーファスを街灯の下から引きずり出しながら、歌い続けたのだ。

なぜ歌うことをやめなかったのか？

それはおそらく本能のようなものだったのだろう。

ビビの歌声はルーファスの全身に届いた。

傷口から流れ出していた血が止まった。目に見える擦り傷なども消えていく。ルーファスの傷が癒えていくのだ。

ゆっくりと瞳を開けたルーファスの瞳に映るビビの姿。

「……ビビ？」

ビビが深くうなずくと同時に、ちょうど歌詞も終わっていた。パイプオルガンの音色が遠ざかっていく。



モルガンはビビとルーファスを遠くから見つめていた。

「また……（命がけて守ったのか？）」

それは一瞬の出来事だった。

あのとき、偶然ではなくルーファスは自らビビに飛び込んだ。少なくともモルガンの目にはそう映っていた。

モルガンはギターに乗り、なにも言わず去ろうとしていた。それに気づいたビビが呼び止める。

「ママ！」

振り返ったモルガンは鼻先で笑っていた。

「旦那には彼氏のことは内緒にしといてあげるよ。それとシエリルの歌声、まだまだただけどまあまあいいと思うよ。それじゃ、またそのうち遊びに来るから」

ビビになにかを言われる前にモルガンはビューンと飛んで行ってしまった。

……召喚でこっちの世界に来たのに、空からどうやって帰るつもりなのだろうか？

というツツコミはきつとしちゃいけない。

ルーファスはビビの膝の上で抱かれながら、なにがなんだかさっぱりわからなかった。

「カーシャのハウキで飛ばされたあとから記憶がないんだけど？」

「でもほかの記憶はちゃんとあるんでしょ？」

ビビは笑顔で尋ねた。

「なきゃ困るよ」

「よかった、なら別にいいじゃん」  
さらにビビは笑顔になった。

どこかで『ぐう』と腹の虫が鳴いた。

お腹をさするルーファス。

「追試のことで頭一杯で朝から食事がのどに通らなかつたんだよね…… ああ、追試！！（大変だ、追試どうなるんだろ。もしかして今度こそアウトかな。でもあれって僕のせいなの？）」

急に慌て出したルーファスをよそに、ビビは呑気な声を出した。

「アタシもお腹すいちゃったなあ（歌ったせいかな）。ちょっと早いけど夕飯はルーちゃんのおごりね」

「えっ、なんで私のおごりなの？」

「なんでもそうなの！！」

強引に押し切ってビビはルーファスを立たせると、その腕をグイグイ引っ張って歩き出した。

まだまだビビのこっちの世界での生活は続くのだった。

第八話 アイツの姉貴はセクシー美女

《一》

魔導産業によつて栄えたアステア王国。

小国でありながら、その経済力は世界トップ水準であり、王都とならばその発展はめまぐるしい。

今まで発展の乏しかった大運河を挟んだ東側にも、発展の波が押し寄せ建設ラッシュが進んでいる。

魔導産業で栄えたこともあり、王都には魔導に関するショップが数多く点在している。

クラウス魔導学院の近くにもいくつか魔導ショップがあつて、ルーファス御用達のお店といえば、マジックポーションショップ、ブ鴉帽子！

三角帽子を被つたカラスがマスコットのこのお店は、クスリの調合に関してはエキスパート。しかも金さえ払えばどんなクスリでもつくっちゃいます。もちろん裏ルートからの仕入れも豊富だったりする。

お店のドアを開けると、  
「いらつしゃいませ」

三角帽子を被つた童顔の女主人マリアが出迎えてくれる。自称二三歳とのことだが、実年齢に関しては諸説ある。ちなみに

童顔のクセにカーシャに勝るとも劣らないスイカップだったりする。

「マリアさんこんにちは」

ペコリとルーファスはカウンターのマリアに向かって頭を下げた。

店内は薄暗く、パツと見渡せるくらいの大ささしかない。壁一面の棚には薬が並び、店の奥からは謎の臭いが漂ってくる。

そして、どこからか聞こえてくる悲鳴。

ルーファスは怯えた表情で店の奥に首を伸ばす。

「あのお、また悲鳴が聞こえるんですけど？（怖いなあ、地獄の釜で人が茹でられてるみたいないな悲鳴だよなあ）」

「ごめんなさあい、すきま風がひどいんですぅ〜（つたく、ガタガタうるさいのよね、いつも）」

ぶりっこ口調と裏腹の心の声。この魔性の女に痛い目を見た魔導学院の男子生徒は数知れず。

もちろんこの店のルーファスが被害に遭ってはいないはずがない。

マリアは注文を聞く前にカウンターのの上に薬のビンを置いた。「ルーたんのために今日も特別な胃薬と下痢止めを調合しておいたから、今度は効いてくれるとうれしいなあ」

「いつもいつもありがとうございます」

「いいえ、こちらこそごひいきにしてもらってうれしいですぅ（今回のクスリはどんな効果が出るか楽しみ楽しみ）」

見事なまでに実験台！

しかも、どうやらそれに気づいていないルーファス。

「前回のクスリは体に合わなかったみたいで、日焼け後にみたくに全身の皮がむけちゃって大変でした。すぐ治りましたけど（せっかく僕専用で調べてもらってるのに、ぜんぜん胃が良くななくて悪いことしちゃってるなあ）」

実験台にされていることに気づいていないだけではなく、自分を責めるというおバカっぷり。

本当に良いカモだ。

魔性の女マリアは瞳をキラキラ輝かせて、ルーファスの手をギョツと両手で握り締めた。

「ごめんなちゃ〜い、今度こそは大丈夫だからわたしを信じてっ！」

女の子の手の柔らかさと、その心地良い温もり。さらに輝く瞳で見つめられたら、ルーファスなんてすぐに顔が真っ赤になっってしまう。

そして、大きくうなずいてしまうのだ。

「あ、はい、信じます！」

ルーファスKO！

見事なダメっぷりを今日も見せつけてくれる。さすがへっばご魔導士ルーファスだ。

落ちた人間を操るのは容易い。

「そうだルーたん！（そうだ、アレ頼んじゃお）」

「なんですか？」

「ちよつとホワイトドラゴンまでおクスリを運んでもらいたい

「ただけどお」

「あ、ホワイトドラゴンって港にある酒場ですよね？（なんだから怖そうだなあ）」

「ねえ、お願い」

マリアの瞳からキラキラビーム発射！

直撃を受けたルーファスは首をカクンとうなずいた。

「あ、はい！」

「ありがとおルーたん（ほんとルーファスってばかなんだから）」

それがルーファスクオリティですから。

産業が盛んなアステアは貿易も盛んであり、王都の横を流れるシーマス運河は今日も多くの貨物船が行き交っている。

内陸にある王都アステアの港は運河にある。

港近くには男たちをねぎらう酒場がいくつもある。その中でもつとも賑わっている酒場と言えば、アステアの強さの代名詞になぞられた『ホワイトドラゴン』だ。

店内に入る前から酒の臭いが漂ってくる。酒に弱いものなら、その臭いで酔ってしまいそうだ。

小包を抱えたルーファスはすでに吐きそうだった。

アステア王国では一五歳から飲酒が認められており、一六歳のルーファスはその年齢に達しているのだが、彼は一滴も酒を飲むことができない。

ホワイトドラゴンは船乗りだけでなく、船に乗ってきた渡航

者の客も多く、魔導衣もちらほらといるにはいるが、やっぱりルーファスはなんだか浮く。

ルーファスはヨロヨロとしながら、カウンターに向かって歩き出した。

テーブル席になにやら人ばかりができていて、男たちの歓声があがっているが、ルーファスは無視無視。自分が場違いなこともくらい、ルーファスにだってわかっていている。なるべーく、人とも目を合わせないようにさっさと移動する。

カウンター先に付いたルーファスは身を乗り出して、マスターに声をかけた。

「鴉帽子からのお届け物を預かってきました（うつぶ、吐きそう）」

すると、ガタイの良いスキンヘッドのオッサンがルーファスの前に現れた。

「おう、ご苦労さん。ありがとよ」

オッサンが小包を受け取るため手を伸ばす。その腕にはドラゴンの刺青が彫っており、ルーファスはちよっぴりドッキリする。

この店にいる人たちは、ルーファスの人生ではあまり関わらない人たちだ。もう心臓バクバクである。

「あ、えっと、お荷物ちゃんと渡しましたから。じゃあさよなら！」

急いで立ち去ろうとするとオッサンに呼び止められてしまった。

「兄ちゃん、せっかく来たんだから飲んでけよ」

「いえ、私は……まだ用事があるのでまた今度（またとか絶対ないけど）」

そこは社交辞令である。

今度こそルーファスはこの場を逃げ出そうと出口向かって歩き出した。

そのときだった！

眼を剥くルーファス。

ドスン！

目の前に人が降ってきた。

嫌な予感がする。という、人が降ってきた時点で嫌なことが起きているはずだ。

ルーファスは人が飛んできた方向を急いで振り向いた。

すると、人だかりの中から次々と人がぶっ飛んでくる。まるで噴火だ。

しかも運が悪いことに、全部ルーファスのほうに落ちてくる。「ちよつと、えつ、なに!？」

ビツクリしながらルーファスは必死で避ける避ける。案外ルーファスは避けるが得意だったする。

落ちてきた男たちの顔をよく見ると、殴られた青あざがある。

状況的に考えて、乱闘がはじまってしまったらしい。

飲み屋の乱闘なんて夕チが悪すぎる。

巻き込まれる前にルーファスは立ち去ろうとしたのだが、騒ぎの中心から聞こえる声で足を止めてしまった。



「オラオラ！ もうおしまいかい、男のクセに度胸のない奴らだねえッ！」

女の声だ。

足を止めていたルーファスの不意を突いて男が飛んできた。

ゲフツ！

落下の直撃を受けたルーファスが押しつぶされて床にへばった。

カエルのようにつぶされているルーファスの顔の横で、座って飲んでいるガタイの良い老人が、被害に遭ったルーファスをチラリと見て騒ぎの中心に目を戻して口を開く。

「新米の船乗りじゃあ仕方ねえが、あの娘に手を出すなんて命がいくらあっても足りねえな」

つぶやいた老人にルーファスは潰されながら顔を向けた。

「あの娘ってだれですか？」

「一年ぶりに帰ってきたんだよ、酒場荒らしの」

その名を口に出す前に、ルーファスはその女の顔を見てしまった。

ぶっ飛ばされた男たちが道を空けたその先で、テーブルの上に立つてボトルごと酒を飲み干し手の甲で口元を拭った赤髪の若い女。

向こうもルーファスに気づいたらしく、片手を上げてニヤリとした。

「よお、ルーファス」

息を呑むルーファス。

「……………リファリス姉さー…ん！！」

叫び声が酒場中に木霊した。

リファリスはズリ落ちたノースリーブの肩紐をクイッと直し、ついでにホットパンツもキュッキュッと直してから、ひよいとサンダル履きでテーブルから飛び降りた。

そして、ルーファスの上に乗って気絶していた男を軽々と放り投げると、ルーファスに手を貸して立ち上がらせた。

「相変わらずだねえアンタ」

「リファリス姉さんこそ相変わらずで（……酒臭い）」

久しぶりの姉との再会。ルーファスはあからさまに嫌そうな顔をしている。というか、怖がっている。

立ち上がったルーファスといっしょに並ぶと、猫背のルーファスよりもリファリスのほうが背が高く見える。ホットパンツから伸びる足も長く、酒飲みのクセにお腹も出ていない。その体のどこに男をボコボコにして投げ飛ばす力があるのが不思議だ。

リファリスの片手にはまだ酒のボトルが握られている。アステア名産で、この店の由来にもなっているホワイトドラゴンだ。かなり強い酒で、シヨットグラスで飲んで倒れる大の男がいるというのに、それをボトルから直接飲むなんて気が狂ふれている。倒れていた男が立ち上がるうとしていた。それをリファリスの肩越しに見たルーファス。

「姉さん後ろ！」

「あん？」

後ろから空のボトルを持って襲い掛かってきた男に、リファリスは振り向きざまの回し蹴りを喰らわした。もちろん顔面。

ボキッ！

嫌な音だ。きつと口周りとか鼻あたりの骨が逝ってしまったに違いない。かわいそうに。

リファリスは酒を口にして息を吐いた。

「ったくよー、飲み比べで負けたのがそんなに悔しかったのかね」

さきほどリファリスのいたテーブルに、シヨットグラスが転がっていた。

店の外に向かって歩き出したリーファリスは、途中でマスターに顔を向けた。

「酒代はそこでおねんねしてるやつらに払わせてちょーだい、そんじゃ」

肩越しにヒラヒラ手を振って店の外に出てしまったりリファリスをルーファスが急いで追いかけた。

「リファリス姉さん！」

すぐに追い着くことができた。

「ああ、ルーファス」

「ああ、じゃないよ。なんで置いていくのさ」

「別にあんたと飲みに来たわけじゃないだろ」

「それはそうだけど、久しぶりに会ったんだから、なんかいるあるでしょ」

「ははーん、美人のねーちゃんが恋しかったのかい？　かわいい

「い弟だねえったく」

「違うよ！（自分で美人つて。でも酒飲みすぎるからモテなんだよね）」

酒場で大暴れするような女じゃ、モテないのもうなずける。

大運河を挟んだ向こう岸にリファリスは顔を向けた。

「知らないうちはこの街も変わったねえ。間違つて向う側の街に行っちゃってさあ、酒場が少なくて少なくて、新しい港なんだからもつと酒場を増やしたらいいと思うんだよね」

「（姉さんの体の七〇パーセントは絶対に酒だ）ところでリファリス姉さん？」

「ん？」

「なんで帰ってきたの？」

「自分の故郷に帰ってきて悪いのかい？　そこに理由なんて必要あるのかい？」

「（目が怖い）なくてもいいけど」

「あるに決まってるんだろ、もうすぐ祭りがあるじゃないか、アステアーのでっかい祭りがあるだろ？」

「建国記念日のことね」

明後日に控えたアステア建国記念日。王都では盛大な祭りが開催され、国内のみならず、海外からの多くの観光客で賑わう。わつちと言えば祭り、祭りと言えばわつちさ。世界各国お祭り巡りしたけつどさ、故郷の祭りが一番だね、うんうん」

世界各国酒巡りの間違いじゃないだろうか。

急にリファリスは真面目な顔つきになって、ルーファスの瞳

をしつかりと見据えた。

「でさ、ねーちゃん世界中を旅して思ったんだ」

「なにを？」

「海賊王になろうと思って」

「はあッ!？」

あまりの衝撃にルーファスは鼻水が出そうになった。

そんなルーファスを置いてけぼりで、リファリスは遙か空を眺めて夢を語り出す。

「冒険王でもいいんだけどさ、わっち海好きだろう？ だからさ、海賊王になって青くて広い大海原に揺られながら、毎日甲板の上で酒飲んだら楽しいだろうなあって」

「はあ」

驚きは溜め息に変わった。

姉の横顔を心配そうにルーファスが見つめた。

「(たぶん本気だろうし、現実になりそうだから怖いなあ。気が変わりやすいから、ならない可能性も高いけど)」

ついでに話もコロコロ変わる。

「ところでルーファス、お母さんとローザまだ修道院にいるのかい？」

「うん、まだカッサンドラ修道院にいるよ」

「そんじゃ行ってみようかな」

「行ってみようかなじゃなくて、普通帰ってきたら挨拶くらいしないよ。もちろん父さんにも」

歩いていたりファリスの足がピタッと止まった。

「わつちに親父なんて居たっけ？」

「父さんだつてきつと……」

「会いたいわけないだろ、あんただつて会いたいかい？」

「うっ……」

言葉に詰まったルーファス。

「あんただつて親父のことの苦手なんだろ。わつちの場合は苦手なんじゃなくて、嫌われて嫌つてんだけどさ」

「私だつて嫌われてるよ」

「あんたは嫌われてんじゃなくて、愛想尽かされてんだろ」

「僕だつてがんばってるよ！」

「知ってるよそんなこと。でもあの人欲しいのは結果なんだよ、それもとびきり良い結果がね。長女は不良娘に育つて、長男じゃこれじゃねえ、怒りたくなるのもわかるけど」

言われてルーファスは肩を落とした。

父からのプレッシャーを感じながらも、へつばこ魔導士とみんなから言われることが、どんなにルーファスを苦しめていることが。

「僕だつてがんばってるんだ」

「だから知ってるって言つてんのに。クラウス魔導学院に入学できただけでもすごいのに、親父が馬鹿なんだよ」

「自分の親のこと悪く言わないでよ」

「親父の肩持つつてーの？」

「だつて父さんはすごい人だよ。今度は防衛大臣になつたんだよ」

「はいはい、そりやすごい。家庭もろくに守れない男が防衛のトツプって、アステアがいつ滅んでも可笑しくないね」

「だから！」

怒りを露わにするルーファス。けれど、すぐに肩を落として沈んでしまった。

弟として姉の姿を見てきた。

父親と姉が対立する姿も幼いころから見てきた。

だからルーファスは姉にこれ以上強く迫ることはできず、ただ口を閉ざすことしかできなかった。

気づけばリファリスはルーファスの先を歩いていた。

リファリスは振り返り、

「ほらルーファス、置いてくよ！」

「待つてよ！」

「やだ」

ルーファスは重い表情を振り切って姉の背中を追いかけたのだった。

《二》

ガイア聖教と言えば今や世界中にその根を下ろし、その総本山はサーベ大陸のおよそ中心にある聖都アークである。

アステア王国はもともと聖都アークの開拓地であり、ガイア聖教がもつとも布教している宗教である。

しかし、時代の流れか、それともアステアが先鋭的な国だけ

らか、戒律の軟化が著しく進んでいる会派も多くある。

聖カツサンドラ修道院はもとも女性のための修道院であったが、最近では男性も受け入れており、男女が共同で生活をしているという稀な修道院となっている。

共同生活と言ってももちろん男女の部屋は分かれているし、さらに男性の数もまだまだ少ない。そして、この修道院には希有な存在も住んでいる。

修道院の廊下をルーファスとリファリスが歩いていると、前から空色の影がふあふあとして近付いてきた。

気づいたリファリスが軽く手をあげた。

「よお、ローゼンクロイツ。相変わらず女の子の格好だな」

声をかけられたローゼンクロイツは無表情のまま、

「……だれ？（ふにゃ）」

ボソツと言った。

だれもお気づきだろうが、リファリスとローゼンクロイツは顔見知りだ。それどころか、ルーファスと幼なじみのローゼンクロイツは、もちろんリファリスとも幼なじみだ。

「わっちのこと忘れたなんて言わせないよ。いっしょにお風呂だつて入ったことあるし、家族以外でわっちのヌード見たことあるのあんただけなんだからね（ガキのころの話だけ）」

「……そうなの？（ふに）」

眼を丸くしてローゼンクロイツは驚いた。でもすぐに無表情に戻る。どこまで本気なのかわからない。

そして、ローゼンクロイツは口を丸く開けた。



「あっ、思い出した（ふにゃ）。近所のお姉さん（ふにふに）」

「近所じゃなくて、ルーファスのお姉さんだよ！」

「ボクの知っているルーファスの姉は別の人だよ（ふあふあ）」

「だーかーらー！（相変わらずだなローゼンクロイツは）」

リファリスが頭を抱えていると、廊下の向こうから修道女がやって来て、驚いた顔をして口を開いた。

「お姉ちゃん！」

小柄な少女が笑顔で駆け寄ってきた。それを指差すローゼンクロイツ。

「あれがルーファスの姉だよ（ふにふに）」

ローゼンクロイツの言っていることは間違えではない。

やって来た修道女にルーファスはあいさつをする。

「ローザ姉さんこんにちは」

「ルーファスこんにちは。お姉ちゃんも久しぶり、いつ帰ってきたの？」

「今日の朝……かな？」

ちなみにもう夕方だ。間の時間になにをしていたか言うまでもない。

ルーファスは三人姉弟だったりしたので。

長女のリファリス、次女のローザ、そして長男で三番目の子供のルーファス。

リファリスとローザは姉妹なので顔が似ているが、そっくり

というほどでもない。リファリスを『軟』に例えるなら、ローザは『柔』だろう。

しかし、姉妹にルーファスを加えると違和感がある。

リファリスの髪色は赤系の中でもカーマイン。

ローザの髪色は同じ赤系でローズ。

ルーファスの髪色だけが、赤から遠い灰色がかったアイボリーなのだ。

辺りを見渡しながら慌てたようすの修道女がこちらにやってくる。その修道女はルーファスたちを見つけて目を丸くした。その顔つき、ローザにそっくりだ。

「まあ、リファリス久しぶりね！」

見た目の年齢は姉妹といっても通用するが、

「久しぶりママ」

と、リファリスは笑顔で答えた。

そう、新たに現れた修道女はルーファスたちの母親だったのだ。

母親の髪の色は綺麗な亜麻色。姉妹ともルーファスとも違う色系統だ。

髪の色はマナにも影響されるため、遺伝ですべて決まるわけではないのだが……。

ルーファスたちの母ディーナは、子供たち、そしてローゼンクロイツの姿を見てながら、昔を懐かしむようだった。

「リファリス、ローザ、ルーファス、ローゼンちゃん、私の子供が四人も揃うなんて嬉しいわ。今日は久しぶりにみんなでお

「食事しましょう。腕によりを掛けて料理しちゃうわよ！」

捨て子だったローゼンクロイツを育てたのもディーナだった。ディーナにとってローゼンクロイツも我が子と同然なのだ。

ローゼンクロイツは本当に申し訳なさそうな顔をしてディーナを見つめた。

「申しわけありませんディーナ夫人（ふにふに）。建国記念祭の準備で立て込んでいて、今日も用事があるので（ふにふに）。せっかくお食事のお誘いですが、また今度の機会にお誘い願えればと存じます（ふにふに）」

まさかの言葉遣い！

あのローゼンクロイツが、他人に対して敬語でしゃべっている！

むしろそういうしゃべり方もできるのかっ！

と、ツツコミたい。

丁重に深々と頭を下げてローゼンクロイツは立ち去った。おそらく普段のローゼンクロイツしか知らない者が見たら、そりやもう驚きの光景だったに違いない。

リファリスは細い眼をしてディーナを見ていた。

「ところでママ？」

「なァにリファリス？」

「わっちのいないうちに、料理できるようになったの？（そんなまさか、料理センスゼロのママがたった一年そこから料理できるようになるはずが）」

「ええ、できないわよ」

かわいく言われた。

すかさずリファリスのツツコミが炸裂。

「さつき腕によりをかけるって!!」

「腕によりをかけてローザに料理をしてもらいましょう」

めっちゃ笑顔。めっちゃ他人任せ。めっちゃかわいく言っても騙されません!

バトンタッチされたローザは唇に指を当てて考えた。

「うん、まずは買い物に行つて、下ごしらえが……」

リファリスが割つて入る。

「やつぱどつか食へに行こう。もうおなか空いちゃつて、昨日の夜から飲んで食べるの忘れちゃったんだよね。ルーファスもそれでいいだろ、な?」

「うん、私はそれでいいよ」

ディーナもそれに同意する。

「じゃあ外食で決定ね。ローザもそれでいいでしょ?」

「はい、お母様」

「パパも誘いましょう。きっと喜んできてくれるわ」

笑顔のディーナに反してルーファスの顔色は悪く、リファリスにいたつてはあからさまに嫌な顔をしている。

だが、あえて二人ともなにも言わず母に合わせることにした。こうしてルーファス一家は外食へ出掛けることになった。

無理矢理正装させられた二人。

着慣れないスーツ姿にもジモジするルーファスと、似合っ

はいるが本人が気に食わないドレス姿のリファリス。

スタイル抜群のリファリスはドレス姿で歩くだけで男の目を惹く。横を歩くローザはまだ幼さが残っているが、ドレスを着るとお姫様のようだ。男たちがこの姉妹を放っておくわけがなかったが、男が近寄ってくるたびにガン飛ばしてリファリスが追い払っていた。

母のディーナはルーファスと腕組みをして歩いている。腕組みをさせられているルーファスは気恥ずかしそうだ。二人で歩いていると、母が童顔のためかカッブルに見えなくもない。ルーファスがもう少し上だったら完全にそう見えるところだ。

リファリスの足が止まった。

「やっぱ居酒屋とかにしない？」

正装をさせられたということは、それなりの店に行くということだ。それがリファリスは嫌で嫌で溜まらなかつた。もしも相手が母親じゃなかつたら、殴つても自分の意見を通すところだが、そういうわけにもいかない。

「それが駄目ならせめてトリプルスターでどう？」

リファリスは代案を出した。

トリプルスターとは王都アステアで有名な酒場である。ショーダンスが有名で、ショーチケットはプレミアがついている。女性でも入りやすい店内だが、家族で行くのは場違いだ。

そういうしているうちにレストランの前に来てしまった。

三つ星レストランとして名高いショコラクイスイポー。もともとは洋菓子店だったのだが、食いしん坊だった主人がいつか

らかケーキのみならずパンも売るようになり、やがては創業五〇以上が経ち洋食屋になっていたという一風変わった店だ。アンジェルガイドによる三つ星を獲得したアステアの店第一号でもある。

ちなみにアンジェルガイドとは、ホテル・レストランガイドの決定版である。飛空艇製造会社アンジェラの創設者が、航空旅行で気軽に多くの人々が旅行する時代が到来することを予感し、自社の製品の宣伝をかねて旅行者たちに役立つ情報を発信するためにフリーペーパーを配布したのがはじまりである。のちに書籍化して、今では世界各地の情報が地域ごとにまとめられ、ガイドブックとして販売されている。

店内に入るとすぐに支配人が出迎えてくれた。

「ようこそお出で頂きましたアルハザード夫人」

「どうやらディーナの顔を覚えていらっしゃるらしい。」

「予約してないのだけれど、席は空いているかしら？」

シヨコラクイスイポーは予約なしでは入れない店だ。が、ディーナの表情は至って平然としている。

支配人は困った顔ではなく、少し不思議そうな顔をしたが、「すぐに席をご用意します、五名様でよろしいでしょうか？」  
ディーナは首を振った。

「パパは用事で来られないみたいなの、だから四名でいいわ」  
そう答えると、また支配人は不思議そう顔をしたが、待たせることなくすぐさま席をディーナ・アルハザード夫人たちのために空けた。

リファリスがルーファス耳打ちをする。

「やっぱラーメン食べたいんだけど？」

「ここまで来ちゃったんだから仕方ないよ（僕だってカップラーメンのほうがいいよ）」

リファリスの腹がぐうぐうと鳴った。

「焼き肉のほうがいいな。あと酒」

グズグズ言いながらも、仕方なく席についたリファリス。思いつきり脚を開いて座った。

ルーファスも席に座ってから落ち着きがない。幼いころはよく高級な雰囲気のお店に連れて行かれたが、幼かったので意味もわからずそこで飲み食いしていただけで、今のようなプレッシャーを感じることはなかった。物心ついてからも、事ある事に連れて来られたことがあるが、それでもこーゆー雰囲気は苦手だ。

ルーファスはテーブルの下に首を突っ込んで、こっそり内ポケットから胃薬を取り出した。マリアお手製の水なしでも飲める下痢止めを呑み込んだ。

「（……マ、マズイ）」

思わず吐きそうになるほどゲロマズだった。しかも錠剤が大きいため、噛むか口で溶かさなくてはいけない試練。

隣に座っているローザが心配そうにテーブルの下を覗き込んだ。

「どうしたのルーファスだいしょうぶ？（顔色が青いけど）」  
「うん、ぜんぜん大丈夫だよ」

ルーファスがバツと顔を上げた瞬間、リファリスが眼を丸くした。

「ルーファス……あんた……その顔（いつたいなにが!?）」

「えっ、なに？（僕の顔?）」

なにがなんだかわからないルーファス。

ディーナは微笑みながらルーファスの顔を見ている。

「あらあら、どうしたのルーファス。お顔が真っ青よ、まるでサカナガエルみたい」

サカナガエルとは、真っ青なボディに魚のような顔をしたカエルの名前である。これに例えるときは、だいたい相手をけなすブサイクという意味だ。が、たぶんほわわ〜んと言つてのけたディーナに悪気はない。

ローザが化粧ポーチから手鏡を出してルーファスに見せた。

そこに映った自分の姿を見て、ルーファスは驚愕のあまりさらに青くなつてしまった。

本当の意味で顔が青いのだ。まるで青いペンキを顔面にぶっかけられたように青い。しかも器用なことに手などはまったく普通で、顔だけが青くなつてしまったのだ。

焦るルーファス。さらに腹痛が襲う。

「うっ……おなかが……（もげる）」

すると、なんとルーファスの顔色が黄色に変わったのだ。

黄色い顔で脂汗を掻きながらルーファスは悶え死にそうになった。

トイレに行かなくては、今すぐトイレに行かなくては死んで



しまう。

すると、なんと今度はルーファスの顔色が赤に変わった。おそらく限界を示している色だ。

歯を食いしばりながら立ち上がったルーファスが駆ける。

トイレに向かって駆け出してすぐにそれは起きた。

店に入ってきた二人組の客。

青ざめるルーファス。

白髪にメツシユのように入った赤髪。老人とは思えぬ覇気を纏い、眉間にしわを寄せながら太い眉毛の下で光る眼でルーファスを睨み付けている。

唾を飲み込む音が店の端まで響いた。

震える脚で体が支えられずルーファスが後退った。

そして、口にした言葉。

「と、父さん……」

ルーベル・アルハザード。現アステア王国の国防大臣にして、ルーファスの父親だった。

いつしよにしているのはどこかのお偉いさんだろう。近くにはSの姿もある。

あのととき支配人が不思議そうな顔をしたのはこれだろう。ルーベルの予約が入っていたに違いない。

ルーファスを一瞥しただけでルーベルはお偉いさんと談笑しながら横を通り過ぎた。見なかったことにされたらしい。

だが、ルーファスの横を通り過ぎたルーベルは、テーブルに座っている三人を見つけ、その中の一人を憎悪のこもった瞳で

睨み付けた。

リファリスがテーブルを両手で叩きながら立ち上がった。

「帰る」

すぐにローザがリファリスの袖を引っ張った。

「お姉ちゃん」

小声で制されてゆっくりと席に着くりファリス。

ピリピリした空気が漂う中、ディーナが見事に空気を読まない！

「パパもこのお店だったの？」

「あとにしなさい」

静かに、いぶし銀のような声でルーベルはディーナを制し、何事もなかったようにお偉いさんとテーブルに着いた。

しかも、運が悪いことに隣の席。

はじめっからシカトを通す気らしいルーベルは、席を変えてもらう気などないらしい。

そっちがその気ならリファリスもどっしりと構える。

母の前ではローザも姉のために席を変えて欲しいとは言えず、怒る姉のプレッシャーを横で感じることはできない。

ルーファスも真つ青の顔のまま、トイレに行くことも忘れて席に戻ってきてしまった。

この中で平然としているのはディーナだけだ。肝が据わっているのか、抜けているのかどっちかだろう。

この状況で波風立たずに終わると思えない。

まだ前菜すら運ばれてきていないのだ。

食事はまだはじまっていない。

これからルーファス一家最悪の晚餐が幕を開けようとしているのだ。

《三》

食事が運ばれてきてから無言で食べ続けるリファリス。

「(っ)たく、なんで親父がいんだよ。食事が不味くなる)」

とか思いながらもガツガツ喰っている。血の滴るレア肉だ。

隣のルーファスの肉と比べると三倍以上のポリウムだ。

一方、食が進まないルーファス。顔は依然として真つ青のまま。腹痛も治まらないが立つに立てない。なぜなら立とうとすると、リファリスにガン飛ばされ「逃げるなよ？」のアイコンタクトを送ってくるからだ。

股を開いて椅子に座り、フォークとナイフでガツガツ音を立てながら食べるリファリスは、この店の雰囲気にもそぐわない。真後ろでシカトしているルーベルのこめかみに、ピクピクと青筋が立っている。

そして、やっぱり空気を読まないディーナ。

「パパもシャイなんだから、こっちでみんなで食事したらいいのに」

それを聞いていたリファリスの手が滑ってナイフが飛んだルーベルのテーブルまで。

これには思わずルーベルもお偉いさんも動きを止めた。

SPは状況を見ながらいつでも動けるように構えている。ルーファスの顔もさらに青くなっている。

当の本人も『やっちまった』という表情をしているが、謝らずに身動き一つしない。自分が悪いのがわかっていても、父親に謝ることが嫌なのだ。

「(どうする……)ここは親父に出方を待って様子を見るか)」  
だが、ここで動いたのは次女のローザだった。

すぐさまローザは席を立ち、深々とルーベルに頭を下げた。

「申しわけございませんルーベル・アルハザード様」

あえて“父”とは呼ばなかった。

「構わんよお嬢さん」

ルーベルもまた“娘”とは呼ばなかった。

これでルーベルの面子などが保たれる。

が、ここで緊急事態が起きた！

ブツ！

小規模な爆発音がした。

SPがすぐさま動く。

そして、拘束され床に押さえつけられたルーファス。

「あ、ええっと……ちよっとお腹の調子が……(オナラ出ちゃっただけなのに)」

完全にやっちまったルーファス。

ナイフが飛んだだけなら穩便に済まされたものを、捕り物を演じてしまつては周りの客たちの目を完全に惹いてしまった。

紳士淑女たちも人が床に押さえつけられている光景を見たら、

そのまま食事を続けるといふわけにもいかないだろう。わざわざと色めき立つ。

そして、ついにルーベルが切れた。

席を立ちルーファスを指差した。

「ルーファスどうしておまえはいつもそつなのだ！」

「ご、ごめんなさい父さん（ヤバイ、父さんの髪の毛が逆立ってるよ。マナフレアまで出てるっ）」

「謝って済むものかっ。いつもいつもわしに恥をかかせて楽しいのか！」

「そんな楽しいだなんて……（思ってるわけないじゃないか）」

「愚図で鈍間の出来損ないの異形め。その髪の色はなんだ、我が赤の一族は代々赤髪が受け継がれておるといのに、貴様と血が繋がっていると考えるだけで気持ちが悪い。どうしておまえのような息子が生まれてきたのか、何度間違いだと思いい検査をしたことか、それでも我が息子という事実は変えられず、どんなにわしが一族から白い目で見られてきたかわかるかっ！」

怒濤の勢いでルーファスを貶したルーベルは、血圧が上がリ肩で息を切っている。

だが、まだ口を開く気だ。

「それでも待望の男児が生まれてきてわしは喜んだものだ。髪の色などにこだわらないようにしようとも思った。だが、貴様はわしの期待を裏切り、なんと無様に育ったことか。運動もできず、勉強もできず、貴様は我が一族の面を汚すために生まれ

てきたのかっ！」

「生まれて来てごめんなさい……全部……僕が悪いんだ……」

言葉を受け入れてしまったルーファス。

歯を食いしばったままリファリスが席を立った。

「黙って聞いてりやいい気になりやがって……ルーファス、あんたはわっちのかわいい弟だよ。だがなっ！」

リファリスの拳が風を切り、ルーベルの頬を抉った。

「この男はクズだ！」

激しい衝撃を受けながらルーベルは床に手をついてしまった。すぐさまSPがリファリスに攻撃を仕掛けようとしたが、それをルーベルは手で合図を送って制した。

「どこの小娘だか知らんが、暴力でわしを痛めつけ気が済んだか？」

「いいや、まだ殴り足りないね！」

「ふん、国防の観点からもこのような野蛮人は入国させるべきではないのだ」

「ならあんたのような口の汚い男も国外追放だな！」

「うぬぅっ」

言葉に詰まりながらルーベルは唸った。

そして、凄まじく空気を読まないディーナ。

「みんなお料理が冷めちやいますよお」

ふわ〜んとした声で、なんだかルーベルの肩から力が抜けた。ルーベルにとってディーナが安定剤になっているのかもしれない。老人のルーベルと若妻のディーナ。いくつになっても男は

女に弱いのか。ちなみにルーベルは六六歳、ディーナは三六歳である。

さらにローザが後押しする。

「ルーベル様、大事なお客様の前ではないのですか？（また血圧が上がったら大変）。お姉ちゃんもお肉冷めたら美味しくないよ？（ほんと手の焼けるお姉ちゃんなんだから）」

母親に顔がそっくりの娘に言われるのもルーベルには効くよ  
うだ。

「食事の席を騒がせてしまって、ここにおられる皆さんにもご迷惑をおかけした。そこでわしからのお詫びの印として、今日の食事代はわしに持たせていただきたい。よろしいかな？」

客たちは頷いて見せたり、小さな拍手をした。  
が、そんな中でただひとり。

「なんでも金で解決か」

ボソツとつぶやいたりリアリス。

「お姉ちゃん！」

ローザが小声で注意した。

さすがにルーベルは聞き流して、何事もなかったように席に  
ついた。

ルーファスも無事解放され、空気はまだギクシャクしている  
が、再び食事が続けられることになった。

今まで出るにいらなかったウェ이터が替わりのナイフを  
持って現れた。

「新しいナイフをお持ちしました」

ナイフをリファリスのテーブルに置き、ルーベルのテーブルからナイフを回収した。

殺気！

ナイフを手に取ったウェイターが、なんとルーベルを人質に取ったのだ。

「貴様何者だ！」

ナイフを首に突きつけられながらルーベルが叫んだ。

辺りが騒然とする。

SPたちも動けない。

まさかの事態にルーファスの顔面は真っ青。

ウェイターは自ら着ていたジャケットを脱ぎ捨てた。その下に着ていたベストに縫い付けられている謎の物体。すぐさまルーベルは気づいた。

「爆弾か!?（自爆も覚悟の上ということか!）」

「そうだ、下手に手出しをすれば木端微塵だ。我らアルドラシルの使徒は崇高な目的のためなら死など恐れぬ!」

「アルドラシルだと……（テロリストどもか!）」

国防大臣であるルーベルでなくとも、その名を知っている者がほとんどだろう。

邪教集団と広く認知されているアルドラシル教団。彼らが崇拜する神の理想郷を築くため、過激なテロ活動を行う残虐非道な団体として、アステアのみならず世界中から危険視されている。

アルドラシル教団の主な標的はガイア聖教である。彼らはガ



イア聖教こそ邪教として、総本山である聖都アークヤ、それ以外のガイア聖教を信仰する国々に攻撃を仕掛けている。

しかしアステアの国防大臣に手を出してくるとは。

理由はつい先頃にあった事件の可能性がある。アステア国内でアルドラシル教団のナンバー三と目される男が拘束されたのだ。

「この度の我らの目的は、アステア国内で拘束された同志の身柄解放にある。速やかに我らの要求を呑んでいただきたい！」  
やはりそうだ。

ルーベンスは冷淡な眼をしていた。

「我がアステア王国がテロなどに屈すると思うておるのか？」

教団員は眉をひそめた。

「貴様の命、我が手中にある。己が命、恋しくないというのか？」

「おぬし、自分の言ったことを忘れたか。わしも恐れなどしない、それだけのことだ」

「歳は取つても 赤鬼のルーベル か。貴様の肝が据わっていることは認めるが、貴様の

命の価値は貴様が決めるのではない。交渉相手は貴様ではなく、政府である」

赤鬼のルーベル とは、彼が若かりしころにつけられたあだ名だ。緋色の髪と、怒号の性格、そして前線で戦うその姿が鬼のようであったから、揶揄される名前がつけられたのだ。

「ならば国防大臣として言おう。テロリストとの交渉には応じ

ない、と」

ルーベル言い切った。

拘束されているのはルーベルだが、人質はルーベルだけではない。

こっそりと逃げ出しそうになった客を教団員は見逃さなかった。

「その場を動くな！ この爆弾は店ごと吹き飛ばすことができない。ここにいるだれか一人でもおかしな真似をすれば、命の保証はないと考えてもらいたい！」

人質はここにいる全員。

ルーベルは教団員に悟られないように、ほかの客たちを観察していた。

「（単独で行うなら無謀な作戦だ。仲間がいる可能性がある）」

端から自爆するつもりであれば数が少なくてもいいだろうが、目的が同志の解放である以上は、成功させるための採算を練ってくるだろう。ならば単独で行う犯行としてはリスクが大きすぎる。

客の中に仲間がいるのか、店員の中にいるのか、それともルーベルの読みが間違っているのか。

リファリスはずっと教団員を睨み付けていた。

「（親父……なにかできることはないのか……）」

どんなに嫌っていても、最後は父の身を案じる。リファリスも「子」であった。

汗が床に落ちた。

だれのもつてルーファスのだ。

父親が命の危機に晒されている中、ルーファスは敵と戦っていた。

敵の名は腹痛！

父親のことも心配だが、だからと言って腹痛を忘れることはできない。今すぐトイレに行きたいほど腸が悲鳴をあげている。でもそんな願いが通らない状況なのもルーファスは承知している。

父親の命と腹痛の板挟み。明らかに父親の命のほうが大事だが、切実な腹痛とも戦わなければならない。

ちよつと気を緩めたらちよびつてしまふ。

「（お腹が……死ぬ……けど……父さんも死ぬかも……でも僕が先に死ぬかも）」

滝汗がボトボトと流れる。

床にできる水たまり。水というか汗だが。

ルーファスの顔面は青を通り越して白くなりつつある。

眼も白黒してきて、頭もクラクラする。

ついに体が痙攣しはじめた。

明らかに可笑しいルーファスの様子に周りもざわめき立つ。

教団員が威嚇する。

「静かにしろ！」

客たちは静かになつたが、ルーファスを放って置くわけにもいかない。病人は作戦遂行の邪魔だ。

「おい、どうした！」

教団員がルーファスに尋ねるが、返事など返ってこないのは一目でわかる。

大きく痙攣しながら白目を剥いたルーファスが、いつに泡を口から噴いて椅子から転げ落ちた。

女性客の悲鳴があがった。

予期せぬ事態に焦る教団員。

その一瞬の隙を突いてリファリスが動いた。

彼女は席を立つと同時に今座っていた椅子で教団員を殴りつけたのだ。

よるめく教団員からルーベルが解放された。

しかし！

「なぜ助けた！」

叫んだルーベル。

リファリスは啞然とした。

「は？」

そして、すぐに言葉を吐き出す。

「あんたがクソ野郎でも、助けるに決まってるんだろ！」

その発言はルーベルの言葉の意味を間違って解釈していた。ルーベルが言いたかったのはそういうことではなかった。

「仲間がいたらどうするのだッ！」

敵の仲間の有無を確認できるまで、人質と甘んじていることで、騒ぎを大きくしないようにルーベルは勤めていたのだ。

客の一人が立ち上がった。

「作戦ベータに変更だ！」

叫びながら男は手から氷の刃をルーベルに向けて放った。  
ルーベルは呪文を唱える。

「ファイア！」

刹那にして氷が蒸気になる。

だが、敵は氷の刃を放つと同時に、仕込み杖の刃も抜いていた。  
た。

細く尖った切っ先がルーベルの胸を突かんとする。

「トイレー！」

場違いな叫び声。

眼を剥きながら倒れたルーベル。

鋭い切っ先が刺したのは、ルーベルではなくルーファスの胸  
だった。

なにが起きたのか？

それは腹痛のあまり暴走したルーファスが、脳内から状況が  
ぶっ飛んでしまい、ただ一心にトイレへ向かおうと駆け出した  
ときだった。周りが見えなくなっていたルーファスは、偶然に  
モルベルの体を押し倒し、自らが刃の餌食となってしまうた  
のだ。

なにも言えずに倒れてままのルーベル。

ローザもディーナも言葉を忘れた。

リファリスが叫ぶ。

「ルーファス！」

リファリスは仕込み杖を持った男を殴り倒し気絶させ、ルー

ファスの体を抱きかかえた。

「しつかりしろルーファス！」

「ううっ……痛い……お腹が……死ぬう」

「ルーファス！ 助かる、絶対に……ん……おなか？」

おかしなことにリファリスは気づいた。

ルーファスが刺されたのは腹部ではなく胸のはずだ。

そのとき、ルーファスの内ポケットから何かが転がり落ちた。

床に落ちたそれを見たルーベルはハツとした。

「わしがやった懐中時計？」

それはルーベルがルーファスに贈った懐中時計。

とても古い物で、ルーベルもまた父から贈られた品だった。

「ずっと持っておったのか……（おまえが幼稚園に入学してから、長い月日が経ったといのに）」

あのときはまだ、ルーベルはルーファスに期待を抱いていた。

だからこそ、父から受け継いだ懐中時計をルーファスに託した。

リファリスはルーファスの胸を確かめ、傷などないことを確

認すると、懐中時計を拾い上げて握り締めた。

「わっちがくれて言ったのにくれなかった時計か。ルーファスがもらってよかったよ、これがルーファスの命を救ったんだらな」

仕込み杖の刃は懐中時計が受け止めていたのだ。懐中時計には受けた刃が深く穿たれていた。

「きゃーっ！」

女性の悲鳴だ！

リファリスとルーベルが感傷に浸っている間に、まだ身を潜めていた別の敵が姿を現したのだ。

敵の数は今確認できるだけで男女二人。

その二人はなんとディーナを人質に取って逃げようとしているところだった。

リファリスはすぐに動けなかった。

動いたのはルーベル。

「スパイダーネット！」

手から放たれた網がディーナごと敵を捕らえようとする。

だが、捕らえられたのはディーナだけ。敵は易々と人質を捨てて逃げたのだ。

「しまった！」

ルーベルが苦虫を噛み潰した。

ディーナ誘拐は陽動だったのだ。

なんと敵は二人意外にも潜伏していた。しかもそれはSPの二人だった。

SPに扮していた男たちがローザをさらって逃げおおしたのだ。

ルーベルはすぐさま追いかけようとしたが、

「くっ！」

激しく顔を歪ませながら胸を押さえ、床に膝をついてしまった。

すぐさまリファリスが駆け寄った。

「親父！（くそっ、持病の発作か！）」

「構うな、ローザを追え！」

「このクソ野郎！」

リファリスは吐き捨ててローザの行方を追った。

《四》

王宮の執務室で待たされているルーファスたち。

腹痛やあの異質な顔色は治まったが、ルーファスの顔色はまだ悪い。

ディーナは穏やかな表情をしているが、先ほどから目を閉じ指を組んで祈りを捧げている。

苛立つリファリスは部屋を行ったり来たり落ち着かない様子だ。

「まったく、どれだけ待たせれば気が済むんだい。わつちらは家族なんだ、それなのになにもわからないなんて！（もつと早くわつちが動ければ）」

あのととき、リファリスはレストランからローザを追いかけたが、見失ってしまいなにもできなかった。自分を責め、悔やむ気持ち強い。

しばらくしてルーベルが部屋に入ってきた。表情は読めず、その顔を見た途端にリファリスが襟首をつかんで飛び掛かった。

「ローザは！」

「犯人からの要求があつた。ローザはまだ無事だ」

淡々とした口調。自分の娘が人質にされているとは思えない



ほど、事務的に固い言葉を響かせた。

それに腹を立てるリファリス。

「自分の娘がさらわれたんだ、もっと心配したらどうだ！（クソ野郎め、ローザにも冷たい態度を取りやがるのか！）」

「心配はしている。だがな、わしはローザの父である前に、政府の人間なのだ。職務を果たす義務がある」

「なにが職務だ、娘のことが一番に決まってるだろ！」

「国民が第一だ」

「ならその国民の中にローザも入ってるはずだろ！」

「国民とは個人のことをいうのではない。我らは国民全体、そして国のためになることを決断して遂行するのだ」

「まさか……いざとなったらローザを見捨てる気じゃないだろうな！」

憎悪が胸の底から沸き立つてくる。今にもリファリスはその手でルーベルの首を絞めそうだった。

静かにルーベルは口にする。

「テロには屈しない」

揺るぎなさその言葉からは伝わってきた。

ついにリファリスの怒りは頂点に達し、ルーベルの首に手をかけた。

「この野郎！」

「わしを殺しても無用な痛みが増えるだけだぞ。痛みは最小限に留めなくてはならない。そのためであれば、最低限の犠牲者も已む得ぬ」

ルーベルは動じない。首を絞められるまま動かない。そのまま殺される覚悟もしていた。

それを止めたのは温かな手だった。

「やめなさいリファリス」

リファリスの腕を握ったのはディーナの手だった。

静かな眼差しでディーナはリファリスの瞳の奥まで見つめた。「パパは冷酷無情なひとではありませんよ。ローザにもしものがあつたとき、誰よりも傷つくのはパパでしょう。家族として傷つき、犠牲を決断したことで傷つき、さらに多くの批判でも傷つくでしょう。パパはその覚悟をした上で揺るがないのよ」

ディーナの言葉を聞いてもリファリスは納得できなかった。

「そんな決断をしなきゃいけない職なんて捨ててしまえばいい！ なにがあつてもローザを助けることを考えろよ！」

襟首を直してルーベルは無慈悲の仮面を被った。

「嫌な役目だろうと誰かがやらねばならんだ。綺麗事が通用しない道を選ばなくてはならないときがある。そのときに揺らいではないのだ、たとえ傷つく者がいようと心も鬼にして決断しなくてはならないのだ。そうしなければ、さらなる犠牲者が出ることになるのだ」

リファリスは髪の毛を掻き毟り、床を叩くように蹴った。

「クソツ！（言いたいことはわかるよ、でもそういう問題じゃないだろ）」

国としての大義名分なら、多くを救うため多少の犠牲もやむ

を得ない。

しかし、傷つき苦しむ何の罪のないひとを自分の間近で見たら、世界を救うためだとしても見殺しにすることができるだろうか。

リファリスにはそれができない。ルーベルにはそれができる。部屋の中にはいつの間にか第三者が立っていた。

「三八年前のカルツタ事件のことを言っておるのだろ、アルハザード？」

その姿を確認してルーベルやほかの者は畏まった。

この場に姿を見せたのは第一〇代アステア国王クラウス・アステアであった。

「畏まらないでくれたまえ、今の僕はルーファスの一友人として様子を見に来ただけなのだから。家族のみなさんの心中はお察しします、国王としての立場から全力でご家族を救えるように務めます」

リファリスはその言葉を聞いて安堵した。ウソだとしても、前向きな言葉が聞けて良かった。

クラウスはルーベルの前に立った。

「カルツタ事件の際、猛抗議の末に出世の道から一時外れたそうだな？」

「はい、仰せの通りです（国王陛下からまさかその話が出るとは）」

「貴公の助言を聞かなかった当時の役人たちは、テロの威しに屈して拘留中のメンバーを解放し、さらには金まで渡したそう

だ。のちに解放されたメンバーたちはいくつもの事件を起こし、多くの尊い人命が失われることになった」

「(その犠牲者の中に父がいたのだ)」

だからルーベルはテロには屈しない。気持ち揺らぐことなく、なにが起きるか誰よりも痛感しているからだ。

なにを思ったのか、リファリスは椅子に座っているルーファスの首根っこをつかんだ。

「塞ぎ込んでんじゃないよ、行くよ！」

「えっ？」

「そのクソ野郎がテロには屈しないってほざいてやがるなら、わつちらはわつちらのできることをすればいいだけさ」

「え？ え、えっ!？」

「いいから、わつちらでローザを助けに行くんだよ！」

ルーファスを引きずりながらリファリスは部屋を出て行ってしまった。

祈りを捧げるディーナ。

出て行った二人と入れ替わりで役人が飛び込んできた。

「大変です！」

クラウスは口を閉ざし役人の次の言葉に耳を傾け、ルーベルは眉間にしわを寄せながら促した。

「なにがあつたというのだ！」

萎縮する役人だったがすぐに言葉を発する。

「そ、それが……拘置所からアルドラシルのライガス・レイドネスが連れ去られました」

それはアルドラシルのナンバー三の名前。教団員が釈放を求めていた男の名だ。

クラウスもルーベルも驚きを隠せなかった。

鬼のような表情でルーベルは役人に詰め寄った。

「どういうことだ！ アルドラシルの仕業なのか！！」

「それが……どうやら違うようで」

「違うだと？（ほかの者がなんの目的で？）」

「レイドネスを連れ去ったのは、マスクをした赤髪の女で……」

「馬鹿な……（いや、今出て行ったばかりだ。わしとしたことが取り乱してしまった）」

ルーベルの頭に真つ先に浮かんだのはリファリスだった。だが、リファリスに犯行が不可能なことは明らかだ。

クラウスは深く頷いた。

「噂の義賊か……薔薇仮面という通称で呼ばれていたな。しかし、なぜ彼女がアルドラシルのメンバーを手助けするような真似をする？」

その問いには答えず、ルーベルは別の言葉をクラウスに投げかける。

「本物の薔薇仮面であろうと、そうでなかるうと、さらに義賊であろうと犯罪者は犯罪者です国王陛下。どんな理由があろうと、投獄を手助けすれば罪」

「どんな理由があろうと自国の民を見殺しにすれば非難されるのと同じか？」

「わしは自分の信じた道を揺るがず歩き続けておるだけです」  
「そうやって貴公は私が被るべき泥も代わりに被ってくれてい  
る」

「希望の光は一点のくすみすら許されない故」

国王の高潔を守るためにルーベルは揺るがない。

王宮を飛び出したりリファリスは行く当てがなかった。防衛の  
トップであるルーベルすら手をこまねいているというのに、な  
んの情報も持たないリファリスに解決の手立てがあるはずがな  
い。

冷静に考えれば、リファリスが動くことでローザに危害が及  
ぶかも知れない。そんなことにも頭が回らず、ただリファリス  
はローザを救いたい一心で後先考えずに飛び出したのだ。

それに巻き込まれたルーファス。

「これからどうする気なの？　ねえ聞いてるリファリス姉さ  
ん？（僕たち二人になにができるっていうんだろう。でも姉さ  
んの気持ちもわかるよ、僕だってローザ姉さんを助きたい……  
でも）」

「ちゃんと聞いている、作戦も考えてある」

「えっ、ホントに!？」

政府が対応に紛糾しているというのに、リファリスはいった  
いどんなことを思い付いたのか？

「ほんとに決まってるんだろ。わっちをだれだと思ってんだ  
い？」

「私の姉だけど?」

「そうじゃないよ、世界で一番出来の良いおねーちゃんだる?」

「あ、はあ……(その自信はどこから来るんだろう)」

いつも自信のないルーファスは、ほんの少しくらい見習った方がいい。

自信満々にリファリスは語りはじめる。

「作戦はこうだ。いいかい、今からアルドラシルのナンバー二だかなんだかを刑務所から連れ出す」

「ええっ!?(というか、ナンバー三だし、たぶんたしかまだ刑務所じゃないと思うけど)」

「つまりだ、クソ野郎はテロには屈しないし交渉もしないとか抜かしやがるなら、わっちらが材料を手に入れてテロリストどもと交渉する」

「ええーっ!!!」

「でもクソ野郎の言ってることもわかる。易々テロリストにメンバーを返してやるようなことはしない。ローザを取り戻したら、ちゃんとナンバー二を刑務所に送り返してやんよ」

テロに屈しない姿勢を見せている以上、作戦であろうと一時的に犯罪者を釈放することは政府にはできない。だからと言ってそれをリファリスが……。

たとえローザを救い出すためだとしても、それは犯罪であり、自分が罪を負うだけではなく、周りも迷惑をかけることになる。

ルーファスは首を横に振った。

「ダメだよ、そんなことしたら私たち捕まるよ。それに父さんだつて職を失うことに」

「クソ野郎が無職になろうとわっちの知ったこつちゃないね。わっちはなにがあるうとローザを助けるよ」

「その気持ちは私だつて同じだけど、他に方法が……っ!?（スカート!?）」

空をふと見上げたルーファスの目に飛び込んできた靴の裏。

「フガッ！」

鼻血ブー!!!

大輪の花のような真紅のドレスを着た謎の人物が、ルーファスの顔を踏み台にして飛んでいった。

リファリスはその瞬間を間近で見ている。

弟の顔を踏んづけた謎の人物は、赤髪を靡かせ、顔を蝶のマスクレードマスクで隠し、大きな袋を担いでいた。その袋から飛び出していたのは人間の顔だったのだ。

「あの顔……見覚えが……思い出した！」

リファリスは気絶しているルーファスを文字通り叩き起こして、その襟首を持ち上げながら叫ぶ。

「ニュースで見たことあるぞ、あいつがアルドラシルの野郎だ!!!」

「ううっ……（頭がクラクラする）」

「ルーファスも見たる！」

「えっと、スカートの中はふわふわの白いやつで見えなかったけど」



ふわふわのやつとは、おそらくスカートのポリウム出すために穿くパニエかなにかだろう。

……そうじゃなくって!!

「パンツの話してんじやないよ! 今の赤い女が連れてたのがローザを救う切り札なんだよ!」

「……え?」

ルーファスたちは知らなかったが、アルドラシル教団のライガス・レイドネスは、薔薇仮面と思しき人物に脱獄されているのだ。

リファリスは突然ルーファスを脇に担いだ。

「間違いない、追いかけるよ!」

「え、え、えーっ!!」

パニック状態のルーファスを抱えて走り出したリファリス。すでに袋抱えた影はどこにもない。

「ルーファス! あんたも魔導士の端くれなんだから、追尾魔法とかそんなの使えないのかい!」

「ええつと、なんだろう……ごめん、思い付かない」

「へっぼこ魔導士!!」

「ご、ごめん……ええと、足を早くする魔法ならあるよ!」

「だつたら早く使え。こっちは足の遅いあんたの分も走ってんだよ!」

「怒鳴らないでよ、すぐ使うから。マジクイック!」

風の支援によりリファリスの足が急激に速くなって、思わずつまずきそうになってしまった。

「おっと、いきなり使うんじゃないよ！」

「早く使えて言ったじゃないか！」

「かけ声くらいかける！」

「ご、ごめんなさい（なんで僕を怒られなきゃいけないんだる）」

心ではそう思っている、やっぱり謝ってしまうルーファスクオリティ。

リファリスの眼に映った真紅の影。

「いたっ！」

影は細い路地を曲がった。

すぐにリファリスが同じ角を曲がると、真紅の影はマンホールから落ちていく瞬間だった。

「地下に潜った！」

リファリスはルーファスを放り投げてマンホールの中に飛び込んだ。

見事に腹から地面に激突していたルーファスは、

「ううっ（痛い）。リファリス姉さん待ってよ〜！」

手を伸ばすがリファリスの姿はもうない。

ルーファスは自力で立ち上がり、急いでマンホールを下りた。

地下は暗かった。水が流れる音がする。

リファリスが囁く。

「ルーファス明かり」

「うん。ピコライトボール」

ゴルフボールくらいの小さな光の玉を出したルーファスは、

それを手のひらの上で安定させた。ルーファスは失敗を恐れてやらなかったが、この光の玉は体の回りに漂わせることもできる。

アステアの下水道。比較的広いこの下水道を通る浄化された下水は、やがてシーマス運河まで流れ着く。

下水の流れる脇の小道を歩く。

「本当にこつちで合ってるの？」

心配そうに尋ねたルーファスの口をリファリスは急いで塞いだ。

そして耳元で、

「あの先に光が見える。明かりを消せ」

言われたとおりライトボールを消して、ルーファスは道の先を見た。

横からの光が漏れている。おそらく先の道から、脇に逸れる

道か何かあるのだろう

足音を殺しながら二人はその光に近付いた。

すると声が聞こえてきた。

「約束の金はここにある」

男の声だ。

次にしたの声ではなく、まるで文章が頭の中に流れ込んでくる感覚。おそらくテレパシーだ。

《足手まといになると困るから、彼には少し眠ってもらって  
けど、心身共になんら異常はないよ》

「レイドネスを我々に渡したら、さっさと金を持ってこの場を

去れ」

脱獄させたライガス・レイドネスと金を交換というわけか。ルーファスが無言のまま下水の方を指差してリファリスに見せた。

そこには小型のボートが停められていた。これが敵の足であることは間違いない。

角を曲がった先の様子を探りたいが、迂闊に顔を出せば見つかつてしまう。今は声を頼りに想像するしかない。

また頭の中に言葉が流れ込んできた。

《とここで、そこにいる人質はどうするんだい？》

「貴殿のおかげでレイドネスは我々の元へ戻り目的は達せられた」

それを聞いたりファリスは心臓が激しく打った。

「(まさか殺される!)」

「新たな要求に使う人質にする予定だ」

「(よかった)」

安堵の溜め息をリファリスは吐いた。

今の会話でローザがすぐ近くにいることがわかった。それは好機だったが、それと同時に不安要素にもなる。ここで下手な真似をすれば、ローザの身に危険が及ぶ可能性が高いからだ。

すぐ近くにローザがいるのがわかっていながら、今はまだリファリスもルーファスも身を潜めることしかできない。せめて向う側の様子がわかれば状況も変わるかもしれないのだが。

苛立ちが募るリファリスは勢いだけで今にも飛び出しそうだ

った。それを制しているのは、リファリスの腕をつかんでいるルーファスの手だ。姉が飛び出したいのをルーファスもわかっている。

しかし、事態は急激に変化した！

「な、なにをする！」

「俺たちを売るのか薔薇仮面！」

「きゃっ！」

焦り入り乱れる男女の声が聞こえてきた。

ライガスを背負った男がボートに向かおうと角から飛び出してきた。

「行かせないよ！」

叫んだりリファリスの回し蹴りが男の腹に食い込み、背負ったライガ스에潰されながら男は倒れた。

身を潜めていられなくなった。

ルーファスも慌ててリファリスを追って姿を晒した。

やはりそこにいたのは教団員。レストランで見た男女だ。新たに現れた二人に驚きを隠せないようだった。

教団員の女が叫んだ。

「わたしたちを売ったのね薔薇仮面！」

《たまたま付けられていたらしいよ》

薔薇仮面の手から放たれたチェーンが女教団員を雁字搦めにした。

ここにいた教団員の数は十人余り。その半数はすでに気絶しているか、拘束されていた。

薔薇仮面と武器や魔法で抗戦する教団員の中にローザがいた。周りの敵に構わずリファリスはローザの元へ駆け寄る。だが、敵の放った炎がリファリスを呑み込もうとしていた。

「ウォーター！！」

叫んだルーファスの放った水の塊が炎を呑み込んだ。

びしょ濡れになりながらリファリスはローザの手を取った。

「だいじょぶかいローザ！」

「はい、あのお方がわたしにだけテレパシーで合図を送って助けてくれたの」

ローザが指差したのは薔薇仮面だった。はずだった。

しかし、そこには薔薇仮面の姿はなく、取引に使われた大金も消えていた。

先ほどまで飛び交っていた攻撃魔法のレイラも治まり、辺りはわめき声だけが響き渡っていた。

「くそつ、我々の拘束を解け！」

教団員たちは壊滅させられていた。立っている者は誰一人としていない。気絶しているか、魔法のチェーンで拘束されているかだ。

すぐに王宮の兵士たちや治安官たちが現場に駆けつけてきた。

その中にはルーベルもいた。

「ローザ大丈夫か！」

ルーベルは両手を広げローザを抱きしめた。

それを見た静かにつぶいた。

「……親父」

父と娘が抱き合う姿。リファリスにとっては感慨深いものだった。

ルーベルはローザの体を離し、ルーファスとリファリスに顔を向けた。

「おまえたちがやったのか？」

「わっちがやったのは二、三人だよ」

その言葉を受けたルーベルに顔を見つめられたルーファスは焦った。

「いやっ、わ、私は……（逃げ回るので精一杯だったんだけど）」

教団員のほとんどを片づけたのは薔薇仮面だ。

ローザは微笑んだ。

「お父様、わたしと姉が敵の炎で焼かれそうになったとき、それを救ってくれたのはルーファスです。ルーファスはわたしたちの命の恩人です」

「……そうか」

ルーベルは深く頷きそれ以上言わなかった。

きつとルーベルは勘違いをしているに違いない！

リファリスはルーファスの肩を出して無理矢理歩き出した。

「さーって、運動のあとは酒、酒！（たまにはかわいい弟に花を持たせてやらないとな）」

「え、私はだから……ちょっと（逃げ回ってただけなのに！）」

でも、それをはっきり口に出せないとこがルーファスクオ

リテイ。

のちに本当のことを言い出せないまま、感謝状まで贈られることになるルーファスだった。



第九話 角笛を吹き鳴らせ

《一》

「ただいまー」

自宅に帰ってきたルーファスは、久しぶりに『ただいま』のセリフを言った。

リビングに向かうと、ソファに立て膝をついて座って、陽が落ちる前から飲んだくれていている誰かさんがいた。

「おかえりルーファス」

ビール片手にあいさつをしたリファリスだった。

下着姿同然で目のやり場に困る。

「リファリス姉さん、服着てよ」

「ん？ 着てるつもりだけど？」

「そうじゃなくて、もつと厚着してよ」

「いいじゃん別に家の中なんだし」

「だからさ……（これ以上言ってもムダかも）」

ルーファスは溜め息を吐いて口を結んだ。

久しぶりに故郷へ帰ってきたリファリスは、昨日からルーファスの借家に同居中。はじめはルーファスも反対したが、母と姉は修道院暮らし、父親のいる本宅なんかには行きたくない、かと言つて宿屋に泊まるのもお金がもつたない。そんなこん

なで、強引に押しかけられてしまった。

飲んだくれているリファリスの周りには空き瓶が転がっている。かなりの散らかりようだが、はじめから部屋が汚かったので、あまり目立っていない。ルーファスと同じでリファリスも片付けなどが苦手らしい。

リファリスのせいで腐海の侵蝕が二倍のスピードだ！

だが、ルーファスは空き瓶を片付けはじめた。

「ゴミくらいちゃんと片付けてよ」

人が散らかすのは気になるらしい。

「そんなこと言うなら、ちよつとは部屋片付けるよ」

「うっ（痛いところ突くなあ）」

たしかの片付けられない人間が、片付けられない人間に説教しても説得力がない。

ルーファス敗北！

まあ、ルーファスがどんなに正しくたって、リファリスは力押しで勝つだろうが。

玄関のドアが開く音がした。

「ルーちゃん元気！」

今日も元気なビビだった。てゆか、ルーファスとさつき別れたばかりだ。

勝手に家に入り込んでリビングまで来たビビが凍り付く。ソファで飲んでくれている謎のお色気美女。

「……ルーちゃんのえっち！」

ビビのパンチが炸裂！

「ふぼッ！」

無実の罪でぶっ飛ぶルーファス。

ビビは鼻血ブーしているルーファスに詰め寄った。

「ルーちゃんだれあの人！ お酒飲まして泥水したところを襲おうなんて変態のすることだよ！」

「ちょちょちょ、ちょっと！」

「ルーちゃんがそんな人だとは思わなかった。もう幻滅だよ」

「誤解だつてば！」

「あれのどこが誤解なの！」

ビビはビシツとバシツとリファリスを指差した。

のんきにリファリスはあくびなんかしちやってる。それを見たビビはさらなる妄想。

「もしかして一夜過ごしちゃったの！ 昨日の夜は朝まで寝かせないよつとか言つて、この人今起きたんでしょ！」

「だーがーら！」

ルーファスはリファリスの横に立って顔と顔を寄せた。そつくり度を示すつもりだったが、完全に裏目。だつて似てないもん。

「女に近付いちゃつて、もう親密な仲つてことなの！（そんなのアタシにわざわざ見せつけるなんてホントサイテーだよ）」

「違うつて、僕ら姉弟なんだよ！」

「ウソばかり、ぜんぜん似てないじゃん！」

「似てるよ！ 僕とリファリス姉さんは父さんになんだよ！」  
このルーファスの一言がさらなる戦いの火ぶたを切つてしま

った。

リーファリスがルーファスの胸ぐらをつかんだ。

「誰と誰が似てるって？ もう一度はつきりと言ってごらん？」

目が座っている。

急接近したルーファスとリファリスの顔を見たビビが目を丸くした。

「キスするつもりなの！！（しかも女からなんて積極的！！）」

ビビの勘違いは止まらなかった。

リファリスはルーファスの胸ぐらを押し飛ばし、ズカズカとビビの目の前に立った。

「あんたもギャーギャーうるさいねえ」

そして、事件は起きた！

ブチュー！

リファリスがビビの唇を奪ったのだ！！

凍り付くビビ。

唇を離して舌なめずりをしたリファリス。

「キスしてやったんだから黙ってな」

だれもキスしてくれだなんて言っていないのですが？

ここでルーファスがボソツと。

「ごめん、言い忘れたけど、リファリス姉さんは男でも女でもイケる人だから」

両刀遣い！

ビビちゃんショークー！！

「…………アタシ…………今…………女の人にキス…………されたよね？」

魂離脱寸前、放心状態。

理解不能な衝撃的なことが起きたとき、冷静になるうと人はとにかく理由付けをする。

「(きつと今のキスはカモフラージュなんだ)ルーちゃんと付き合ってることを隠すためにアタシとキスしたんだー！」

パニック状態の時の理由付けは、だいたいツツコミどころがあるものだ。

ルーファス&リファリス。

「はっ、」

きょとんとされてしまった。

それでもビビはとまらないのだ。

「絶対にアタシは騙されないからー！」  
なにを？

とツツコミたいところだが、ビビの中では成立している。

突っ走るビビについていけないリファリスは溜め息を吐いた。

「はいはい、わっちはそろそろ出掛けるから、あとは二人で解決しろよー、ルーファス？」

「僕が!？」

二人つきりにされたら、ルーファスが押されて話がこじれそう。三人でも十分こじれるが。

そこら辺に脱ぎ捨ててあった服に着替え、玄関に向かおうとリファリスが歩き出した。

だが、両手を広げて立ちふさがったビビ！

「逃げるなんてズルイ！（とことん追求してやるんだから！）」

「わっちは今から大好きな酒を飲みに行くんだ。止まるんだったら承知しないよ」

リファリスは牝豹の表情でビビを舐めるように見た。

再び凍り付くビビ。

「うっ……（またキスされる）」

ササツとビビは身を引いた。そして、ルーファスの後ろに隠れ、

「出掛けるんだったら、ルーちゃんとアタシも手を繋いでついて行くから！」

「は？」

つと言ったのはルーファスだった。

「私とビビがどうして手を繋がなきゃいけないの？」

「もしも本当に付き合ってるんだったら、ほかの女と手を繋いでるの見せつけられたらイヤでしょ？ ルーちゃんと手を繋いせてくれたら二人が間違いを起こしてないって信じてあげるよ！」

つて言われても。

うんざり状態のリファリス。

「手を繋ぐだけなんてぬるいね。ヤルとこまでヤツちまえばいいだろルーファスと」

この過激な発言にルーファス放心

「……………」

ビビは顔を真っ赤にした。

「ヤルって、そんな……ヤルだなんて不潔な言い方しないで！  
（結婚する人としかそういうことしちゃいけないだよ！）」  
いちよう皇女様なので、そういうところは固い。

爆弾発言だけ残してリファリスはさっさと立ち去ろうとしていた。

「んじゃ、わっちは祭りで思う存分酒を浴びてくるから」  
祭り？

それを聞いたビビが気持ちを一変させた。

「お祭りってどこどこお？」

なんかもうさっきのことなんか、なかったことにされてるくらい  
の食い付きだった。

目を輝かせるビビに見つめられたリファリスは、ニヤリとして答える。

「祭り好きなんてわっちと気が合いそうだねえ。どうやら知らない  
みたいだから教えてやるけど、この国最大の祭りが建国記念日の  
明日やるんだよ。今日はその前夜祭ってわけさ」

「そうなの!?(だから明日学校休みだったんだ)」

まだこの国に来て間もないビビは、かなりこっちの情報にう  
とい。

ビビは目を輝かせたままルーファスを見つけた。

「早く行くようルーちゃん!」

「え?(さっきの勘違いとかはもういいの?)」

「早く早く！」

ビビはルーファスの腕をつかんで、リファリスを押しつけて玄関を出て行った。

国内最大級の建国記念祭　　の前夜祭。

前夜祭と言ってもその盛り上がりは異常なほど盛り上がっている。

この国の人々は年明けの夜もドンチャン騒ぎをするが、それと同じような盛り上がり方をしている。

まだ少し陽は高いが、出店は賑わって混み合っている。

「次は金魚すくいやるよ！」

ルーファスの腕をグイグイ引つ張るビビ。

「生き物とかは飼うのめんどくさいよ」

「だったらカメすくいでもいいよお」

ほっぺを膨らませてビビはすねて見せた。

「金魚もカメも生物だよな？　私の言ってたこと聞いてた？」

「べつにアタシが飼うんじゃないしー」

「じゃあ誰が飼うの？」

「そんなのルーちゃんに決まってんじゃない！」

勝手に決められた。

リファリスが『フフン』と鼻を鳴らした。

「わつちを差し置いて金魚すくいをやるつなんざ良い度胸だね。

金魚すくいゲーム荒らしと言われたわつちと勝負するかい？」

ビビちゃんは『フフン』と鼻を鳴らした。



「その勝負受けるよ、ルーちゃんが！」

「はっ？　なんで私なの!?（金魚すくいとか一匹も取れたこと  
なんだけど）」

勝負をルーファスに託したと言うことは、きつとビビも金魚  
すくいが苦手なのだろう。

ヤル気まんまんのビビとリファリス　の犠牲者になって引  
きずられていくルーファス。

が、ここでビビがある物を発見！

「リンゴ飴だ！」

さらにリファリスもある物を発見！

「おっ、ビールと肉が売ってるじゃないか」

二人とも金魚のことなど忘れて店に向かって走り出す。

ビビに腕をつかまれてたルーファスが引きずられる。今日は  
なんだか振り回されっぱなしだ。あ、いつもか。

リンゴ飴をおっちゃんから受け取ったビビはルーファスの顔  
を見て、

「ルーちゃんお金」

「はいはい（月末は苦しいのになあ）」

しぶしぶ財布からお金を出すルーファス。

家出少女のビビは、あまりお金を持っていないので、いつも  
周りの支援者に助けられて生活をしています。

お返しはとびっきりの笑顔。

「ルーちゃんありがとー」

八重歯がとつてもチャーミングだ。

リンゴ飴を買ってもらったビビはスキップをして歩き出したのだが　ドン！

人とぶつかってリンゴ飴を落としてしまった。

「アタシのリンゴ飴ーっ！」

ビビちゃんショック！

ぶつかった人物はフードを目深に被って顔を隠していた。それに腹を立てるビビ。

「ちよつと顔見せてよ！（その顔絶対忘れないんだから）」

食べ物のうらみは怖い。

フードの男は首を横に振った。

「ごめん、あまり人の多いところでは顔を出したくないんだ」

「何様のつもりー！！」

「本当にごめんよビビちゃん。ちゃんと弁償するから許しておくれ」

「……え？（なんでアタシの名前知ってるの???)」

男は少しだけフードを上げて見せた。そこにあっただのはクラスメートで、しかもこの国のいつちばんエライ人の顔。

思わずビビは叫ぶ。

「あっ、クラウス！」

名を呼ばれたクラウスは唇の前で人差し指を立てた。

「しーっ、いちようお忍びなんだ」

そう言っただけクラウスは新しいリンゴ飴を買って、それをビビに手渡した。そして、この場から逃げるように、ルーファスたちと歩き出した。

出店を楽しそうに見つめながらクラウスは話しはじめた。

「まだ零時まで時間があるだろう。ヒマで仕方なくてね、コッソリ抜け出して来ちゃったよ」

それを聞いてルーファスは心配そうな顔をした。

「コッソリはマズインじゃなの？」

「城の者は大騒ぎだろうね（特にエルザは怒り心頭かな）。でも零時まで軟禁状態で、すぐ目と鼻の先でお祭りの音や匂いを嗅がなきゃいけない僕の身にもなっておくれよ」

この祭りの風習を知っている者なら引つかからない言葉だが、当然ビビは気になった。

「零時までって？」

クラウスはニッコリ笑った。

「そうかビビちゃん知らないんだね。明日が建国記念日なのは知ってるかな？」

「うん、今日よりすっごいお祭りやるんでしょ？（わくわくするー）」

「その建国記念祭のはじまりを合図を国王である僕がやらなくてはいけなくて、少しでも合図が遅れては行けないと言って、あそこに見える塔に僕を軟禁するんだよ役人たちがね」

前夜祭のメイン会場は聖リユーイ大聖堂が見下ろすアングル広場。その聖リユーイ大聖堂には、今は使われていない鐘楼があり、そこから国王が零時ちょうどに合図をすることになっている。

ビビは大きく何度かうなずいた。

「ふうん、それで合図ってどうやるの？」

「角笛を吹くんだけ。これは建国時から伝わる王家の家宝で、その音色は遠くグラーシユ山脈の山頂まで届く。と言っても実際に音が届くのせいぜい塔の下くらいまでで、山頂まで届くのは魔力の波長なのだけだね。それによってヴァッフアートの街の上空までやって来て、建国記念祭がはじまるんだよ」

「ヴァッフアート？」

「この国の守護神である白いドラゴンだよ」

「へえ〜っ（そう言えば、この国の国旗ってドラゴンだったよ  
うな気がする、ような気がする）」

アステア王国の国旗は白銀の靈竜ヴァッフアートである。

いつの間にか三人は聖リユーイ大聖堂に近くまで来ていた。

ここでクラウスは別れを告げる。

「僕はそろそろ戻るよ。あまり留守にしていると、騒ぎを多く  
なってしまうからね。では、またね」

立ち去ろうとするクラウスの腕をビビがつかんだ。

「ちよつと待って！」

「ん？」

「角笛見せて！ だつてすっごいお宝なんでしょ、興味あるも  
ん」

「う〜ん（どうせヒマだしな）。可愛いビビちゃん頼みなら  
仕方がないね」

ここでルーファスがボソツと。

「クラウスはいつも女の子に甘いなあ」

そして、ルーファスがいつも女性軍に振り回される。

こんなわけで、ルーファスとビビは角笛を見せてもらえることになった。

一方、別の場所ではリファリスはというと、もちろん酒を浴びるように飲んで暴れ回っていた。

《二》

零時までの待機時間、クラウドは聖リユーイ大聖堂の中で過ごすことになる。

聖堂内を歩き回ることはできるが、もちろん護衛や付き人と行動を共にしなければならぬし、はじめて来た場所でもないのを見て回る気も起きない。

長い時間を過ごす待機室は警護が厳重だったが、クラウドは人払いをして部屋にルーファスとビビだけを残した。

「城の者がいると口うるさくてね。会話一つにも目を光らせてきて、リラックスもできないよ」

クラウドは若い王でありながら、すでに手腕を発揮して国を大きく繁栄させてきた。そうは言っても、若さ故に王として縛られることに窮屈さを感じていたのである。

「なんだかビビはクラウドを感心しているようだった。」

「クラウドも大変だよな。お祭りで遊びたいのに、こんなところに閉じ込められちゃって」

「君も大変だろう？ 君も皇女で、父君は皇帝なのだから」

「アタシはべつに将来国のトップになるわけじゃないし、パパは好き勝手やってるだけだし（それにアタシは逃げ出してここにいるんだし……）」

皇女という地位に縛られるのがイヤで逃げ出したビビは、クラウスの姿を見てみると罪悪感に囚われてしまう。

しゅんとしているビビを見取ってか、クラウスは爽やかに微笑んだ。

「角笛を見せてあげるんだったね。その箱の中に入っているから、ちょっと待っていてね」

「うん」

ビビは笑顔で答えた。

さっそくクラウスは箱の中から角笛を取り出す。

箱には魔導錠が掛けられており、クラウス 王家の魔力に反応して開くようになっていた。

取り出された角笛を白く磨かれ、ドラゴンのシルエットが描かれていた。魔力を感じることでできる者であれば、それがただの角笛でないことがわかるが、そこら辺の土産屋に売っているだけでもある。実際、簡単な作りなのでレプリカが大量に土産として出回っている。

クラウスが持ってきた角笛に興味津々のビビ。

「へえ、意外に質素なんだ」

「ガツカリした？」

「ううん、アタシ楽器とかそーゆーの興味あるから、見せてくれてありがとう」

「いえいえ」

見せ終わってすぐにクラウドスは箱に戻そうとしたが、ビビは後ろ髪を引かれていた。

「ええ〜っ、もう閉まっちゃうのお？ もし良かったらちよつと吹いてみてもいい？」

大事な国の宝だ。そう易々と吹かせてくれるわけが

「いいよ」

あっさりクラウドスOK。

「ホントにありがとう！」

喜ぶビビの横でルーファスは不安そうだった。

「その角笛が大事な物だっことを国民だったら誰でも知ってるよ。それを異国の、しかもビビに触らせていいの？」

「『しかも』ってどーゆーこと？」

じとーっとした瞳でビビはルーファスを睨み付けた。

「もしもビビが壊したら国際問題だよ。私が壊したって絶対に打ち首獄門……もしかしたら生きてまま拷問されるかも」

言いながらルーファスは青い顔をした。

クラウドスは笑って見せる。

「あはは、大丈夫だよ。角笛は固い角で出来ているのだから、そう壊れたりはいしないさ」

そう言っただけでクラウドスはビビに角笛を手渡した。

「ありがとうクラウドスー！ ルーちゃんと違ってやさしいー！」

「私と違っては余計だと思っただけ」

「ふん、だってルーちゃんイジワルなこと言うんだもん」

「別にそんなつもりで言ったんじゃないよ」

「べーっだ。ルーちゃんには吹かせてあげないもん」

舌を出したビビはそっぽを向いてから角笛に口を当てた。

ふうっ！

ほっぺいっぱい空気を吹き込んだ。

ふうっ！

さらに息を吹き込んだが　　鳴らない。

顔を真っ赤にするビビ。

ふうっ、ふうっ、ふうっ！

だが鳴らない。

「ゼーハーゼーハー（なんで鳴らないのぉ〜!?!）」

酸欠になりそうになって、ビビは肩で息を切った。

ルーファスがビビから角笛を奪おうとする。

「私にもやらせてよ」

「ルーちゃんには吹かせてあげないって言ったじゃん」

「少しくらいいいでしょ」

「ダメ、絶対にダメ」

「ケチ」

「ケチじゃないもん、ルーちゃん絶対に壊すもん」

「壊さないってば、だから貸してよ！」

ルーファスは角笛をつかみ、無理矢理ビビから奪い取るうとした。

ビビも取られまいと必死に抵抗する。

そこへクラウスが割って入ろうとしたとき、ビビとルーファ



スの手がすべった。

ガン。

床に落ちた角笛。

凍り付くルーファスとビビ。

クラウスは冷静に角笛を拾い上げた。

「大丈夫、壊れていないよ。(実は僕も前に落とすことがあ  
るからね)このくらいでは壊れないさ。さあ、ルーファスも吹  
いてごらん」

角笛はクラウスの手からルーファスに渡った。ビビは不満そ  
うな顔だ。

さっそくルーファスはお腹の底まで空気を吸い込み、角笛に  
口をつけると一気に噴き出した。

ふおーっ！

空気が抜ける音しか聞こえない。

それを見てクラウスは笑っていた。

「ごめんごめん、実は王家の者しか音を出すことができないの  
さ」

だから吹かせてくれたのだ。

この角笛はヴァツファートを呼ぶための物。もしも音が出て  
しまったら、用もないのにヴァツファートを呼び出してしまっ  
てもルーファスは意地になって再トライ。

ふおーっ！

顔を真っ赤にしてほおがはち切れんばかりに膨らませる。  
まるでタコだ。

ふぁーっ！

王家の者しか吹けないのであれば、音が出るわけがない。  
ぶぁーっ！

限界まで空気を吹き込んだときだった。

角笛が真っ赤に輝き、三人は目を丸くした。

ドーン！！

角笛が大爆発してしまった。

吹き飛ばされて腰を抜かしたルーファスは言葉も出ない。

言葉を出ないのはルーファスだけじゃない。

クラウスは啞然と口を開けたまま。

やっちまった。

さすがへっばこ魔導士ルーファス。

期待を裏切らない。

そう、期待を裏切らないと言うことをクラウスは考慮するべきだった。

「嗚呼、僕のせいだ。大切な友だからと言って、国宝を見せるのみならず、触らせて、さらには吹かせるなんて……僕の責任だ」

頭を抱えてしまったクラウスをすかさずビビちゃんがフォロ

！。  
「そんなことないって、壊したのルーちゃんなんだし！ クラウスはぜんぜん悪くないって」

その言葉がグザッとルーファスの胸に刺さった。  
ルーファスはその場にしゃがみ込み、頭を抱え込んでしまっ

た。

「打ち首だ、絶対死刑だよ、市中引き回して公開死刑だよ。明日の建国記念祭は公開死刑祭りだよ」

こつちもビビちゃんがフォロー。

「そんな死刑なんて大げさだよ。ねえクラウド？」

と話を振ったのだが、クラウドはかなり重い表情をしていた。「あながちそうとも限らない。頭の固い保守派は、絶対に死刑を望んでくるだろう。加えてルーファスの父であるルーベルの失脚を狙っている奴らにもまたとないチャンスだ」

ガーン！

さらにクラウドの言葉で追い込まれたルーファス。

「そうだよ父さんにまで迷惑かけるんだ。うわあ、生まれて来て本当にごめんなさい」

さよならルーファス！

キミが最後までへっぴりだったことは忘れない。

魔導士ルーファス 完。

なんてことにならないように、クラウドが小さな声でしゃべり出す。

「誰にも気づかれないように直そう。直せなくても、とにかく誤魔化そう」

王様ならぬ発言。これはルーファスの友人としてのクラウド個人の発言だ。

ビビもそれに賛成した。

「そうそう、バレなきゃいいだよ、バレなきゃ！」

だが、ルーファスはしゃがんだまま頭を抱えて動かない。

「直すって言っても時間がないじゃないか」

残念なことに角笛は木端微塵。接着剤でどうにかなるってレベルじゃない。

しかし、クラウスは揺るぎない表情で、

「大丈夫だ。もしも直らなくても、レプリカで代用すれば人の目くらいは誤魔化せる。問題はヴァッフアートを呼ぶことだけど、今から直接ヴァッフアートの会いに行つて、角笛が鳴らなくても零時に来てくれるように頼もう」

それには問題があつた。

ネガティブ思考のルーファスは、悪い点がすぐに気づいてしまふ。

「それは無理だよ。ヴァッフアートはグラーシユ山脈の奥の奥にいるんだよ、今からじゃ到底会いに行けないよ」

極寒の地グラーシユ山脈。

猛吹雪に覆われるその地は、未開拓の地が多く存在しており、確立されているルートですら、死と隣り合わせというような場所だ。

そんな場所で毎年、クラウス魔導学院の一年生は遠足をしているわけだが……。

本来学生、ましてや山のプロですら易々と足を踏み入れている場所ではないのだ。

それでもあの場所で行われる特殊な鉱石や、あの場所にしか生息しない珍獣を目当てで山に入る者も多い。そして、多くの

命が犠牲になるのだ。

そんな場所で毎年、クラウド魔導学院の一年生は遠足をして  
いるわけだが……。

しかし、実はへっぽこ魔導士と言われているルーファスが、  
グラーシユ山脈登頂という偉業を成し遂げていた。

ふと、ここでルーファスはあることを思い出した。

「そうだカーシャに頼めばすぐにヴァツファートに会いに行け  
るかも」

ほかの者は知らないが、ルーファスはその場所にカーシャの  
城があり、山頂やほかの場所に通ずるワープ装置があることを  
知っていた。

ただここで問題が一つ発生した。

ボソツとルーファスが囁く。

「カーシャどこにいるんだろう」

「ルーちゃんカーシャさんの連絡先知らないの？」

「私もカーシャもケータイ持ってないし。そもそもカーシャの  
家すら知らないし」

「クラウドスは？」

「僕はケータイを持っていて、カーシャ先生もケータイを持  
っているはずだけど？」

思わずルーファスは、

「えっ？」

ぶつちゃけクラウドスよりもルーファスのほうが、断然カーシ  
ヤと付き合いがあるはずなのに。実はルーファス嫌われてるん

じゃ？

なんだかルーファスショック！

クラウスはケータイを出しながら話をする。

「教職員の連絡先は必ず届け出てもらうことになってるんだ。

だからカーシャ先生の自宅とケータイの番号が僕のケータイにも登録されていて、もしもし、カーシャ先生ですか？ クラウス・アステアです」

《なぜ妾のケータイ番号を知っておるのだ!?!》

「教職員の連絡先を学院に提出してもらっている筈ですが？

あそこはクラウス魔導学院ですから、僕が知っている可能性があるのもご理解いただけるかと思います」

《職権濫用までして妾にかけて来るとは、まさか愛の告白でもする気じゃあるまいな?》

「急ぎの用なのでルーファスと変わります」

あつさりスルーして、クラウスはルーファスに通話を変わった。

「もしもしカーシャ?」

ルーファスは口元に手を当てて、クラウスとビビから遠ざかって部屋の隅まで移動した。

「頼み事があるんだけど?」

《ほう、妾に頼み事とは良い度胸だな。もちろんそれなりの報酬はあるのだろうな?》

「いやっ、それは……あとで考えるとして、とにかくグラーシユ山脈に行ってヴァッフアートに会わなきゃいけないんだけ

ど」

《それはおもしろい（さてはルーファスめ、また事件を起こしたな、ふふ）》

心が躍るカーシャさん。

「別におもしろくないんだけど。国宝の 誓いの角笛 を壊しちゃって、とにかくヴァッフアートの会わなきゃいけないんだ。それでカーシャならヴァッフアートのところへ早く行ける方法を知ってるんじゃないかと思って。ワープ装置とかあるよね？」

《ふふふ……（ウケるー。さすがルーファスだな。このままだとギロチン確実だ、ふふ）。妾ならたしかに知っておる》

「お願い力を貸して！」

《だが……クラウスは知らんのか？》

「なにを？」

《ヴァッフアートの巢への近道だ。とにかくクラウスに替われ》

ルーファスは二人の元へ戻り、クラウスにケータイを返した。

「カーシャがクラウスに替わって」

ケータイを受け取ったクラウスはすぐに、

「もしもし替わりました」

《おまえ本当に知らんのかヴァッフアートの巢への近道をも？》

「近道なんてあるのですか？」

《そうか……王家の者でも知らんのか。王都アステアには建国時に作られたヴァッフアートの巢に繋がるワープ装置があるの

だ》

「本当ですかっ!？」

心底驚いている様子だった。

《元々、王がヴァツファートに会いに行くために作られたものなのだが。きつといつの間にか使われなくなったのだな》

「なぜ現国王である僕よりもどうして詳しいのですか？」

《妾が初代国王にくれてやったからに決まっておるだろう》

「……………（それが万が一本当だとしたら）カーシャ先生っておいくつですか？」

《レディに歳を聞くでない（自分でも正確な歳は覚えておらんのだが。そもそも一年に一つ歳を取る言う算出方法がおかしいのだ）》

カーシャが何者であるのか？

実はルーファスですらわかっていない謎。

クラウスは通話越しに頭を下げた。

「申し訳ないカーシャ先生。僕としたことが女性に配慮が足りませんでした」

《わかればいいのだ》

「それでワープ装置の場所はどこにあるのですか？」

《ふむ、建国時はまだ城も建っていないかった。小さな集落があったくらいなものだ。そこで目印となる物の近くにワープ装置は作られたのだ。今はその目印はなくなってしまったが、その上に建っておるのがリユーイ大聖堂だ》

なんと近道は目と鼻の先にあつたのだ。



さらにカーシャは話を続けた。

《ワーブ装置は静寂の間にある隠し部屋から行くことができ  
る》

「静寂の間は……今いる場所なのですが？」

ミラクルだ！

すでに名君と呼び声高いクラウスは、きつと運も備わっているのだろう。英雄とはここぞというところで、幸運に恵まれるものなのだ。

だが、そんな運を不運に変える存在がここにはいた。

ここでカーシャがなぜかうなった。

《うゝん、隠し部屋の入り口はその部屋のどこにあったのか…

…覚えとらん》

絶対ルーファスのせいだ！

クラウスは今聞いたことをみんなに伝える。

「この部屋から繋がる隠し部屋があって、そこにヴァッファートの元へ行けるワーブ装置があるらしい。けれど、隠し部屋の入り口を覚えてないらしいんだ」

ここで疑問に思ったルーファスが通話を替わる。

「もしもしカーシャ。あのさ、別の方法ないの？」

《どういう意味だ？》

「ほかのワーブ装置。あの城経由で行く方法あるよね？」

《アホか。妾の城のことは他言無用だと言っておろう。おまえだけでヴァッファートに会いに行くと言うのなら、自由に使うがよからう。だがな、ヴァッファートと対面し、角笛の話をす

るとなるとクラウスは必用だろう」

とかルーファスとカーシャが話しているうちに、ビビが声をあげた。

「見つけたよ、隠し部屋！」

たまたまビビが寄りかかった壁が、スイッチになっており、ラッキーにも隠し部屋を見つけたのだ。

ルーファスが動くと言えないのに……。

「あ、カーシャ。見つかったって隠し部屋」

「つまらん、もう見つかったのか。妾は宴会の途中だから切るぞ」

と、言って切れるまでのほんの少しの時間、通話の向こうから女の声が聞こえてきた。

「カーシャどこ行った！ わっちの酒が飲めないってのかい！！」

ブチっと通話が終了した。

明らかに聞き覚えのある声だった。

ルーファスは聞かなかったことにして、隠し部屋に急いだ。

《三》

暮れる空が照らす遙か先まで続く連峰。

白銀の大地を彩る朱。

まるでそれは黄昏の海のように輝いていた。

白銀のドラゴン　その毛も今は朱く染まっていた。

霊竜ヴァッフアート。

膨大な知識を強力な魔力を持つグレートドラゴン。ヴァッフアートはアステア建国前から、この地方で信仰されていたドラゴンだった。

全身を柔らかな羽毛で覆われたヴァッフアートは、その巨大を揺らして体の雪を払うと身を起こした。

鳥のようなつぶらな瞳で小さき三人を見下ろした。

「わしになに用だ、クラウス・アステア？」

玲瓏な女性のような声には魔力がこもっている。まるで言葉を発するだけで、呪文を唱えているようだ。

クラウスは一步前へ出た。

「久しゅうございます、偉大なる守護者ヴァッフアート」

「年に一度も顔を見せず、敬意の欠片もない愚かな王が、わしを偉大と申すのは皮肉か？」

威圧的な声音であった。

ビビはルーファスにそつと耳打ちをする。

「なんか怒ってない？」

「うん（ここで角笛壊しましたなんて言ったら殺されそうだなあ）」

壊したのはルーファスだが、クラウスまで被害に遭いそうだとすぐにクラウスは訴えかける。

「決して我が国の守護者をないがしろ蔑ないがしろにするような真似は……」

言葉に詰まるクラウスからは焦りを感じられた。

国王と言ってもまだ一五歳。

躍進を続ける国の繁栄を担い、勇敢にも魔物の支配地域に自ら乗り込む王であっても、古い時代から生き続ける知識と力を持った者の前では、王と言えど一人間として畏怖しざるを得ない。

ヴァッフアートは首を伸ばしクラウドに近づき、呑み込めるまでの距離まで迫った。

「貴公の噂はいくつも風の便りで聞く。急死した父の意志を継ぎ、幼くして即位した貴公の重責はわからぬでもないが、わたしに会いに来る時間すらも作れぬというのは、言い訳にしか聞こえぬな」

「申しわけ御座いませぬ。余が驕おこっておりました」

深々と頭を下げるクラウドを見ながら、再びビビはルーファスにそつと耳打ちをする。

「べつにクラウドが驕おこってるなんて思ったことないけど。あのドラゴン、会いに来てくれないもんだから、ちよつと拗すねてクラウドに当たってるだけじゃないの？」

その言葉が聞こえたのか、ヴァッフアートはピクツと身体を振るわせ、ビビを眼中に収めた。

「そこにおるのは、アズラエル帝国の第一皇女シェリル・ベル・バラド・アズラエルだな？」

「えっ、アタシのこと知ってるの？（うっ、目つけられた）」

「出来の悪い不良娘だと風の噂で聞いておる」

「ッ!? アタシのどこが出来の悪い不良なのーっ!!」  
顔を膨らませてビビは怒りを露わにした。

ヴァッフアートの目はルーファスにも目を向けた。

「そこにおるのは、赤の一族と名高いルーファス・アルハザードだな？」

「私のこともご存じなのですか？」

「へっぽこ魔導士だと風の噂で聞いておる」

「うっ、へっぽこって……」

そして、ヴァッフアートはクラウドを中心に三人を瞳の中に収めた。

「長らく顔を見せなかった貴公がわしに会いに来たということは、よほどのことがあったと見える。それも建国記念日の前夜にというのも、なにか事に絡んでおるのか？」

クラウドは息を呑んだ。

「正直に申し上げます。誓いの角笛が跡形もなく壊れてしまいました」

次の瞬間、大地が震えどこかで雪崩が起きた。それはヴァッフアートの咆吼で引き起こされたことだった。

「愚か者め！」

ヴァッフアートの怒号が連峰を木霊した。

一番震え上がったのはルーファスだ。

「（僕がやったなんて言い出せない……絶対殺されるよあ）」  
凍り付くルーファスを背に据えてクラウドが深々と頭を下げた。

「余の迂闊さが招いたこと。すべての責任は余にございます」  
ルーファスとビビが同時に声をあげる。

「えーッ!?」

ルーファスの『ル』の字も出てこなかった。

なんにも言い出せないでいるルーファスの脇腹をビビがど突いた。

「ルーちゃん! (自分がやったって言いなよ!)」

「うっ…… (言えないよ、言えるわけないよ)」

「ルーちゃん!! (いくじなし!)」

「あの……その……」

口ごもるルーファスにそつと顔を向けたクラウス。

「ルーファスは何も言わなくていい」

三人のようすを見ていたヴァッファートの眼が輝いた。

「なにやらわしに隠し事があるようだ。まさか、誓いの角笛を壊したのは、ルーファスではあるまいな?」

グサツ、グサグサグサツ!

ヴァッファートの言葉がルーファスの胸をグツサリ射貫いた。

あまりの恐怖にルーファスはガクガクブルブルだ。

「いや、その……ぼ、僕がやりましたごめんなさい!!」

ルーファスは恐怖で膝が崩れると同時に、そのまま土下座した。

鋭い眼でヴァッファートはルーファスではなく、クラウスを睨み付けた。

「わしに嘘をついてまで、王である貴公が身分の違うただの男をなぜ庇うた?」

「それは王としてではなくひとりの人間として、ルーファスは

大切な友だからで御座います」

その言葉を聞いたルーファスは鼻水ダラダラで眼に涙を溜めていた。

「クラウスうゝ（ホント良い友達を持ってばかあ幸せだなあ）」

急にヴァツファートが微笑んだ。

「ならばわしも友として王を許し、ならびにその友の行いも同時に許そう」

その言葉にクラウスは少し不思議そうな顔をした。

「友として……で御座いますか？」

「そうだ、わしと王家は代々友として付きおつて来た。いつしかその関係も、そちら側は忘れてしまったようだがな。誓いの角笛 とは、友との誓いの証であった」

それが壊されたのだ。

しかし、ヴァツファートはそれでも友であろうと申し出たのだ。

クラウスは沈痛な表情を浮かべた。

「恥ずかしながら、誓いの角笛 という名は残っていても、その名の由来は今の王宮には残っておりません。これから友として良好な関係を築いていくためにも、なぜ王家に 誓いの角笛 を贈与してくださったのは、そのお話をぜひにお聞かせ願いたく存じます」

「文献という形ですら今の王宮に話が残っておらんのは、暴君ルイ国王の時代にすべての資料が焼き払われたからだろう。よ

かるう、今ここで再び物語を綴って進ぜよう」

ヴァッフアートの語りはじめた内容は、アステア建国以前まで遡る。

時は聖歴六六六年、一説には異世界に準ずる外宇宙からやって来た侵略者、大魔王カオスの時代。

多くの国が魔王軍によって落とされ、生き延びた人々は難民となり世界を放浪した。

その中のひとりに名を馳せた吟遊詩人の若い男がいた。それがのちにアステアを建国し、初代国王となったラウル・アステアだった。

あるときグラーシユ山脈の麓まで旅をして来たラウルは、美しいと評判の白銀の霊

竜ヴァッフアートの噂を聞きつけ、ぜひに会いたいと願ったそうだった。

しかし当時、大魔王カオスの呪いを受けていたヴァッフアートの、グラーシユ山脈に誰も近付かせないため、すべてに死を与える猛吹雪によって閉ざした。そして、元々住んでいた生物は冷凍冬眠させていた。

ラウルは美しい歌にヴァッフアートの心を開かせ、ついに念願の対面を果たしたのだったが、そこにいたのは美しさの欠片もない醜いドラゴンだった。

ヴァッフアートの呪いによって全身の毛が抜け落ち、まるで毛をむしられたチキンのような姿に成り果てていたのだ。それを隠すためにヴァッフアートの山を閉ざしたのだった。



心優しいラウルはヴァッファートに同情し、呪いを解く方法を探して旅に出た。

そして、数年の後にようやく秘薬を見つけ出し、ヴァッファートにそれを贈ったのだ。

秘薬よって美しさを取り戻した毛並みは、前よりも美しく輝き、ヴァッファートは心からラウルに感謝した。

その時にヴァッファートはラウルを偉大な王にすると約束し、多くの財宝と三つの秘宝、そして一つの誓いの証を授けたのだ。

三つの秘宝は今もアステアの王家に伝わる三種の神器。

一つは 白輝びやくきのマント と呼ばれるヴァッファートの羽毛でつくられたマント。とても軽く、空をも飛べる魔力を秘めている。

二つ目は 豎琴の杖 と呼ばれる名前のとおり杖の先端に豎琴のついた杖。琴を奏でることにより、自然を操ることができる。

三つ目は ウラグライトの指環 であり、今もクラウスは肌身離さず指に嵌めている。これは大変希少価値の高い結晶でつくられており、魔力を大幅に増大させてくれる。

そして、ヴァッファートは未代まで国を守護することを誓い、なにか困ったことがあったときに、自分に助けを呼べるように角笛を贈った。これこそが 誓いの角笛 である。

すべてはヴァッファートの感謝の印であった。

ここまで話し終え、ヴァッファートはこう付け加えた。

「故に、わしは守護者ではあるが、王の上に立つ者ではない。」

角笛は壊れても、感謝と友情をなくなるものではない。吟遊詩人ラウルと同じ心を持つ者であれば、わしは友として接しよう」

そんな大事な物を壊したルーファス。胃痛で死にそうだった。

「(国民から袋叩きに遭うよあ)」

さらにクラウスは自分を羞じていた。

「(ルーファスを助けようとはいえ、レプリカで代用して誤魔化そうと考えた僕は、ラウル国王に羞じることをしてしまつた) お話をお聴かせくださりありがとうございます。なんとしても角笛をもう一度作り直して、忘れられていた誓いを新たに立てなくてはなりません。ラウル・アステアの心を忘れないうめにも」

建国記念日を知らせる角笛の音をなんとしても響かせねばならない。

時間は刻々と迫っている。

ヴァッフアートは遠く空の向こうに眼を向けた。

「作り直すというのなら、わしが材料となる角の在り処まで案内しよう。いくつもの山を越えた先だが、わしの背に乗れば今日中には採りに行くことが可能だろうて」

こうして三人はヴァッフアートの背に乗って、グラージュ山脈を越えた場所へ向かうことになった。

星空を飛ぶ巨大な影。

空の上で酔ったルーファスがゲロを吐きそうになるが、白銀

の羽毛を汚したら汚名を残し国中の人々から何度も殺されると  
思い、どうにか呑み込んで事なきを得て目的地に着いた。

ヴァッフアートの話によると、誓いの角笛 は妖獣モレチ  
ロンの角で作られているらしい。

そのモレチロンは湿原に棲んでいるらしく、三人は近くの草  
原で下ろされることになった。モレチロンは臆病な性格をして  
いるらしく、巨体を有するヴァッフアートは湿原近くまでは行  
くことができないのだ。

モレチロンは牛の仲間らしい。水辺に棲む水牛の一種で、精  
霊の力を宿すことによつて進化し、魔導生物学的には妖獣に分  
類されている。

とりあえず三人は角の生えた牛を探した。  
が、どこにもそれらしく動物はいない。

湿原には多くの動植物が生息している。

カエルなどの両生類から、それを食う鳥たち、さらにカバの  
仲間などもいる。

角が生えている動物は草陰に隠れているシカの仲間くらいだ。  
すでに日も暮れていることから、辺りは暗く見通しが利かな  
い。

ビビが水面を指差した。

「見て、あそこにあるの眼じゃない？」  
ルーファスは首を傾げた。

「どこ？（暗くて見えないよ）」

「ほら、そこそこ」。アタシ暗いところでもよく見えるの。だ

「から、ほら、あっちにあるのわからない？」

よく見ると水中から眼と鼻腔を出して周囲のようすをうかがっている謎の動物。

ビビはルーファスの背中を押した。

「ルーちゃんゴー！」

「ええっ！」

湿原の水辺に突き飛ばされたルーファス。

次の瞬間、水しぶきを上げながらカバが水面から飛び出してきたのだ。

カバと言えば鈍くて穏和のイメージがあるが、実はかなり獐猛でテリトリーに入ったが最期、ワニや人でも容赦なく攻撃してくるのだ。

しかも、このカバはカナヅチカバという名前で、その名の通りカナヅチのような四角く硬い頭をしている。

そんな頭でルーファスに向かって猛突進してきた。

「ぎゃーっ！」

ルーファスは逃げようとしたが、足がもつれて尻餅をついて転んでしまった。

カナヅチカバが巨大な口を開いた。一八〇度近く開いた口はルーファスなんて軽く丸呑みしそうで、しかも長く先のとがった槍のような歯が生えている。噛まれたら絶対死ぬ。

地を駆けるクラウス！

「ルーファス！！」

剣を抜いて立ち向かって一発では仕留められない。それを

判断したクラウスはルーファスの体を抱きかかえた。

巨大な口が激しく閉じられた。

「うほっ！」

痛いと言うより、ちよつと情けない声があがった。

もちろんそんな声をあげるのはルーファス。束ねた長髪がカナツチカバの口に挟まれ、引つ張られた拳げ匂に首がガクンっとなつたのだ。

「いたいー！」

何本か髪が引き千切れて、どうにか逃げる事ができた。

が、後ろからカナツチカバは猛烈に追いかけてくる。しかも意外に足が早い。

いつの間にか逃亡にビビも加わり、

「なんでアタシまで逃げてるのぉー！！」

元はと言えばビビがルーファスをど突いたせいだ。

三人は必死で逃げ周り、ついにはスタート地点のヴァッフアートの元まで戻ってきてしまった。

カナツチカバを見たヴァッフアートが咆吼をあげる。

大地が揺れ、草木も震え、動物たちも身を強ばらせた。

目の前で咆吼を浴びたカナツチカバは、気絶して倒れてしまったほどだ。

クラウスはヴァッフアートに頭を下げた。

「助けて頂きありがとうございます」

「礼を言われるほどのことでもない。して、角は手に入ったのか？」

「それがモレチロンらしき姿も気配もまったくなく、どうしていいものかと」

「そうか……実はな、角笛をラウルに贈ったのはわしだが、その材料はラウルに採ってきてもらったのだ。モレチロンは用心深く臆病なため、そこでラウルの歌と演奏によっておびき寄せたのだ」

歌と聞いたクラウスにビビは顔を向けられた。

「え、アタシ？」

記憶に新しい親子歌合戦事件。

あの事件は他国の王妃や皇女が絡んでいることから内々にされたが、もちろんクラウスは詳細に事件の調査結果を把握している。

「ビビちゃんの歌ならきつとおびき寄せることができる！」

「力強く言われても……自信ないんだけどお」

でも、ビビの顔はまんざらでもない。ちょっとモジモジしている。

さつそく再び湿原に向かった三人。

獯猛なカナツチカバに警戒を払いながら、クラウスとルーファスに守られながらビビが大地に立つ。

大きく息を吸ったビビが歌いはじめた。

優しい歌声が静かな夜に響く。

草陰に隠れていた動物たちが少しずつビビの元へ近付いてきた。その中にはカナツチカバもいて、ルーファスはビビり、クラウスは身構えたが、襲ってくるようすはまったくない。動物

「たちは穏やかな雰囲気で、ビビの歌に聴き惚れているようだった。」

しかし、モレチロンは姿を現さない。

湿原は広い。もしかしたら、ここにはいないのかもしれない。あきらめてクラウスがビビに声を掛けようとしたとき、ルーファスが『あっ』と声をあげた。

「水の中から角が！」

まず見えたのは二本の小さな角、さらに下から巨大な二本の角が水面から這い出てきた。

四本の角を持つ黒い牛が水面から上がってきた。

こいつが妖獣モレチロンに違いない！

ビビは眼を丸くしながらも歌い続けた。

手の届くところまでモレチロンがやって来た。そして、そこで腰を下ろして眼を閉じて、まるで眠ったように動かなくなってしまうた。

クラウスが静かに長剣を抜く。

鞘から抜かれた切っ先が月光を反射した。

刹那、鋭い切れ味でモレチロンの短い角が切り落とされた。

「あっ！」

ビビは驚いて歌うのをやめてしまった。

すぐにクラウスは落ちた角を拾い上げてビビに顔を向けた。

「どうしたの？」

「だって角を切ったらかわいそうだと思って！」

「ビビちゃんヴァツファートの話を聞いてなかった？ 短いほ

うの角は一年に一度生え替わるそうだよ。それに角には神経が走っていないから痛みは感じないはずさ」

「よかった、そうなんだ」

と、安堵したのもつかの間、ルーファスが青い顔をしている。

「か、かば……」

巨大な口を開けるカナツチカバ。

クラウスが叫ぶ。

「撤退！」

三人は一目散にヴァッフアートの元まで逃げた。

#### 《四》

どうにかモレチロンの角を手に入れ、再びグラージュ山脈まで戻ってきた。

が、ここで問題発生。

「知らん」

と言ったのはヴァッフアート。

なにがというと　クラウスが改めて尋ねる。

「ヴァッフアート様が加工したのではないのですか？　以前はどうやって加工したのですか？」

「腕の良い魔楽器作りの名人に頼んだのだ。風の噂ではとうの昔に死んだと聞いたが……？」

「ほかに加工の出来る者はいないのですか？」

「さてな、あと数時間で加工できるほどの腕を持つ者がこの国



にいるとは思えんが」

なにそれ、今になってそれ!?

日数を掛けて加工していいなら、この国にも多くの職人がいる。だが、日が開けるまで二時間を切っていた。この制限時間は刻々と迫っているのだ。

ビビがじとーっとした瞳でヴァツファートを見た。

「もしかして間に合わないの気づいてた?」

「角笛を手に入れようという心意気が友の証なのだ。祭りの知らせはレプリカでよからう。零時に妾が飛んでいけばいいこと。実際に毎年、角笛の音を行く前に近くまで行っておるしな」

うわっ、テキトー!

結局それ?

それで誤魔化すつもり?

はじめにレプリカで誤魔化そうとしたクラウスは自分を羞じたというのに、結局同じ方法で誤魔化しかいっ!

ここでクラウスが食い下がった。

「本当に間に合わないのでしょうか? まだ少しでも時間がある以上は、最後まで諦めたくはないのです」

真摯な眼差しをするクラウスを見てヴァツファートはなぜか笑った。

「似ておるなああの者の瞳に……。実は一人だけ可能かもしれぬ者がこの国におる」

まさかクラウスを試したのか?

てゆか、時間がないんだからそれを先に言えよ。

クラウスはヴァツファートに詰め寄った。

「それはどなたでしょうか!？」

「偉大なる母の娘。その名は」

急いでルーファスたちは王都アステアまで戻ってきた。

目的の人物はこの街にいる。

クラウスがケータイを片手に首を横に振る。

「駄目だ、マナ源が切られている」

通話が繋がらないようだ。

ルーファスはここを立つ前のことを思い出していた。

「あの……もしかしたら私の姉といっしょにお酒を飲んでるか  
も」

それってまさか、あの人？

あのとくに聞いたヴァツファートの言葉がリフレインする。

偉大なる母の娘。その名はカーシャ。

唯一の心当たりとはカーシャのことだったのだ。

ビビがルーファスに尋ねる。

「お姉ちゃんのケータイ番号知らないの？」

「リファリス姉さんもそういうの持ち歩かない人なんだ（てゆか、ウチの家族だれも持ってないんだよね。リファリス姉さんは縛られるのがイヤな人だし、ローザ姉さんと母さんは機械音痴だし、父さんは連絡は秘書を通してで不便してないみたいだし）」

ちなみにルーファスがケータイを持っていないのは、よくな

くすから。

とにかくカーシャを探し出さなくてはいけない。

「酒の飲める場所を当たろう！」

クラウスは言うが、すぐにマイナス点を見つけてしまうルーファス。

「酒場だけでも大変なのに、今日はお祭りでもどこでもお酒が飲めるよ。家で飲んでるって可能も捨てきれないし」

もしかしたらもう飲んでない可能性もある。

ヴァツファートはレプリカで誤魔化しても良いと言ったが、やはりクラウスは最後まであきらめたくなかった。

「仕方がない人手を割こう。僕の私用ということにするので、あまり人数を使うことはできないけれど、僕らで探すよりは断然良いだろう」

三人はすぐに街に繰り出した。

前夜祭の盛り上がりは夜が更けるほどに高まり、人混みで溢れかえっている。この中にカーシャがいたら、探し出すなんて奇跡に近いかも知れない。

二人と別れたルーファスは辺りの屋台を見回した。

ソースの匂いや、肉の焼ける匂いなど、食欲をそそる強い香りが漂ってくる。

ぐうぐうとルーファスの腹の虫が鳴いた。そう言えばまだ夕食を食べていない。

「おなかすいたなあ」

腹が減っては軍はできぬ。とはどっかのだれかが残した言

葉だ。

とりあえずルーファスはお腹を満たすことにした。

タコ焼きは先日のエロダコ事件があったのブルーして、ルーファスはバーガー屋の列に並んだ。

アンダル広場や中央広場に設置された屋台は仮設店舗が多く、なかなか本格的な料理メニューを取り揃えている。

ぼーっと列に並びながらメニューを決め終わると、ルーファスはピアガーデンに目を向けた。

酒飲みたちは建国記念祭よりも、前夜祭の方が盛り上がる。理由は簡単で、建国記念祭の翌日は平日だからだ。明日も祭りのこの日は、夜遅くまで思う存分、酒を飲んで盛り上がることができる。

「ああっ！！」

突然ルーファスが叫んだ。

大の大人が宙に飛ばされたのを見たのだ。しかも、ルーファスの目と鼻の先まで落ち来た。こんな出来事つい昨日もあったような気がする。

「オラオラ！ クソ野郎どもかって来な、いくらでも相手になつてやるよ！」

あゝあ、間違いない。

リファリスはビールジョッキ片手に、数人に男どもと殴り合いのケンカをしていた。殴り合いと言っても、リファリスは一発も食らっていないようで、男どもが一方的に殴られているようだ。

さらにルーファスは目を丸くした。

リファリスとタツグを組んでいる相方がいたのだ。

「カーシャ！！」

ついに発見！

ついについていうか、あっさり発見。

「妻の胸を触ったのはどいつだ！ 触りたいなら正々堂々正面から……ヒック……来い」

カーシャは完全に足下が覚束ない。普段は青い血管が見えるほど白い肌も、すっかり紅くなってしまうている。しかも、片乳が今にも服から溢れそうになっている。

唾を飲み込んだルーファスはその場で動けなくなった。

「（リファリス姉さんは普段からあんな感じだけど、カーシャは完全に酔ってるよ。あの人酔うとホント手がつけられないんだよね）」

普段から学院の廊下で高等魔法をぶっ放す不良教師が、もしも酔って手が付けられなくなってしまうたら、どんなことが起きるのか想像しただけでも恐ろしい。

ふらつきながらカーシャが呪文の詠唱をはじめた。

「ライラライラ……ヒック……うつぶ……げつぶ……びゅーんつと……びゅーんつと」

高等魔法ライラを唱えようとしているが、詩がまったく詠めていない。こんな滅茶苦茶な詠唱では、魔法なんて出るわけがないのだが。

カーシャの手が輝きはじめ、大量のマナフレアが辺りを照ら

す。

そして、ついにカーシャが魔法を放った。

「どーん！」

なんじゃその呪文！

あきらかにギャグとしか思えない呪文だったが、まさかの発動。

カーシャの手から輝きが放たれた。

それはまるで煌めく星の川のように、キラキラと宙に放出された。

周りに集まって人々から歓声があがった。普通にキレイだったのだ。

見事な宴会芸を披露したカーシャ。

一息カーシャがついているとき、ルーファスはここがチャンスと急いで駆け寄った。

「カーシャ！」

「……ん、へっぽこか？」

「探してたんだよカーシャのこと」

「おまえも妾のおっぱいが触りたいのか？」

「そんなこと一言もお願ひしてないし」

こんな感じでカーシャのペースに飲まれている時間はない。

だが、ルーファスの前に立ちはだかる新たな刺客！

「かわいい弟よー！ おまえも飲め飲め」

上機嫌のリファリスが並々に注がれた大ジョッキを両手に持って駆け寄ってきた。

冷えたビールジョッキがルーファスの頬にグイグイ押しつけられる。しかも両サイドから。

まるでタコみたいな口をしたルーファスが、  
「リファリス姉さん、やめてよぉ〜（なんだよ、なにがしたいんだよこの人）」

べつになにがしたいってわけじゃなくて、とくに理由はない  
と思われる。

「わつちの酒が飲めないってのかい？ オラオラ、た〜んのお  
飲み！」

いつにリファリスは強硬手段に出た。

必殺ビールかけ！

どぼどぼ〜とビールがルーファスの頭からかけられた。本  
当にありえない。

ルーファスの長い髪は見事なまでの吸水力。ビール臭いっ  
らありやしないし、目は開けられないくらい染みる。

「痛いっ！ 痛いっ、目が開かない！」

手探りでルーファスは辺りのようすを探った。

ふにゆ。

ルーファスの手がなにか柔らかいものに触れた。

いったいこれはなんだろう？

確かめるために、ふにゆふにゆっともっ一度触ってみた。

流動性があつて柔らかく、そうかと思えばほどよい弾力性も  
あつて、人肌のようにほんのり温かい。

「ルーファス！」

ルーファスのすぐ近くでカーシャの怒号がした。

ようやく視界が開けたルーファスの目の前にしたのはカーシャ。そしてもちろん触っていたのはスイカップ。

「あががっ、ごめんなさいい！」

ルーファスは謝ったが、もう遅いだろう。

「妾の胸を揉みしだくとは何事だーッ！」

あんたさつき触りたいなら正々堂々と来いって言ってたじゃないか。

目と胸の先の距離でカーシャが魔法を放つ。

「びゅーん！」

なんじゃその呪文！

あきらかにギャグとしか思えない呪文だったが、まさかの再び発動。

カーシャの手から放たれたのは、ビールの噴射だった。

そこら中にあるビールを手元を集め、一気に放出したのだ。

まるで消防車の放水のようにところ構わずビールがまき散らされる。

最初の一撃をモロ喰らったルーファスは水圧で男たちが飲むテーブルに突っ込んでしまった。

テーブルを滅茶苦茶にされた男どもとルーファスの目が合う。

「(殺される)」

ルーファスは確信した。

ボコッ、ドゴッ、ぐへっ！

カエルが潰れたような呻き声があがった。



頭を抱えてしゃがみ込んでいたルーファスが恐る恐る顔をあげると、そこにはコテンパンにのめされた男どもの姿が。

「だいじよぶかい？」

ルーファスに声をかけて手を差し伸べたのはリファリスだった。どうやらリファリスに助けられたらしい。

が、リファリスの手をつかんで立ち上がるうとしたルーファスが、なんとそのままリファリスに腕を引かれて投げ飛ばされたのだ。

「行つて来ーい、ルーファス！」

「ぬーっ！！（なんでこーなるのーっ！）」

叫びながらルーファスは次のテーブルに突っ込んだ。

そして、男どもがルーファスを睨む。こうしてさつきと同じパターンが繰り返り広げられることになった。

一方カーシャはビール放水を続けていた。

「ふふふふふふ、ふふふふふふ、飲め飲めーっ、酒は飲んで呑まれるな！」

あんた一番呑まれてますか？

いつの間にかあたりはビールかけ&乱闘合戦になっていた。

騒ぎは大きくなる一方で、どっかのだれかがロケット花火を飛ばしたり、爆竹まで鳴らしはじめた。

完全に収拾がつかない状況だ。

ルーファスは高く積み上げられた人の山から、命からがら這って出てきた。

「死ぬ……圧迫死するところだった……」

顔からは血の気が引いてしまっている。

アンダル広場全体にサイレンの音が鳴り響いた。

聖リユーイ大聖堂を警備していた治安官たちが広場に押し寄せ、さらに広場の周りからも続々と治安官たちが集まってきた。

騒いでいた人の中には果敢にも治安官にケンカを売る者もいたが、ほとんどは捕まる前に一目散に逃げ出した。

まだ石床でへばっているルーファスの腕を何者かがグイッと引つ張り上げた。

「逃げるぞルーファス！」

カーシャだった。

我に返ったのかと思いきや、拳動が酔っている。

ルーファスの腕をつかんでいるカーシャは、そのまま上空に飛び上がろうとした。

「レビテーション！」

二人の空が浮き上がる。

魔導具などの補助を使わずに空を飛ぶ魔法は、熟練者かセンスのある者しか使いこなせない。魔法そのものの発動は容易なのだが、自分を取り巻くマナを安定させるのが至難の業で、さらには身体的なバランス感覚も優れていなければならない。人々を乗せて飛ばうなんて無謀で、酔って飛ぶなんて死を覚悟しているとしか思えない行為だったりする。

「うぎゃーっ！」

ルーファスの叫び声が夜空に木霊した。

ジェットコースターなんて目じゃない蛇行運転。

夕食を口にしたら絶対にリターンしていた。

「カーシャ下ろして！」

「ふふふふ、風が気持ちいいな。体がベタつく……シャワー浴びたい」

いきなりの急降下。

眼下に迫るシーマス運河。

ジャバーン！！

クジラの潮吹きみたいなの水しぶきをあげて二人は河に沈んだ。酔って水に入るなんて自殺行為だ。

さらに服が水を吸い込んで泳げるハズがない。

「ぶほつ……もげ！」

水面でアップアップしながらルーファスは死相を浮かべた。

たぶん下半身はすでにあの世に浸かってしまっている。

体力がもたない。

ついにルーファスは力尽き、手を最後に残して河に沈んだ。

「ルーファス！」

何者かの声が響いた。

ルーファスの手をつかんだ熱い手。

小型船舶の上にルーファスの体が引き上げられた。

「大丈夫かルーファス！」

「ううっ……クラ……ウス？」

目を開けたルーファスを覗き込んでいたのはクラウドだった。  
「よかった、生きていたか」

安堵のため息をクラウドは漏らした。

体を起こしたルーファスはあたりを見回した。

「カーシャは!？」

「それが……二人が共に河に落ちるところまでは見たのだが……」

重い表情を浮かべるクラウド。

だが、闇の中から女の声が出た。

「妾ならここにいますぞ」

いつの間にか甲板に立っていたカーシャだった。全身ずぶ濡れだが、肌の赤みを消えて

表情もいつもどおりだ。どうやら酔いが抜けたらしい。

ルーファスとクラウドはほっと胸をなで下ろした。

しかし、ほっとしているヒマなんてなかった。

クラウドが懐からモレチロンの角を取り出して見せた。

「カーシャ先生にお願いがあります。この角を角笛に加工してもらいたいのですが？」

「うむ、妾に頼んでくれると思っていましたので準備は整えてある」

あんた飲んだくれただけじゃないんだな!

ちよつとは見直したぞカーシャさん!

が、次の言葉は、

「いくら出す？」

金の話かい!

カーシャが慈善でやってくれるわけがない。

クラウドは考え込んでしまった。

「……（このような物は相場があつてないような物）いかほど払えば？」

「そうだな、さっきの騒ぎで出た被害額でどうだ？」

「……やはり貴女が起こした騒ぎだったのですね」

「出すのか出さないのか？」

「（仕方がない）出しましょう。今すぐお支払いはできませんが、直接こちらが被害額を立て替えると言つこととどうですか？」

「うむ、よからう。ではこれが完成した角笛だ」

おもむろにカーシャは胸の谷間から角笛を取り出した。

それを見た二人は目を丸くした。

「えっ」

なにが起きたのか理解できない。

採ってきた角はたしかにクラウドが持っている。

なのにカーシャは完成品を持っているのだ。

「こんなこともあるつかと、出来た物をすでに用意しておいたのだ」

三分クッキングかつ！

てゆか、ヴァッフアートの元へ行き、さらに苦労して角を採つたのが、すべて取り越し苦労に終わった瞬間だった。

啞然とするクラウドからカーシャが角を奪い取った。

「これは妾が預かつて置こう。そして、これを受け取るのだ」

そして、角笛を渡した。

ここでカーシャがボソツと。

「あと五分もないぞ」

それは日が開けるまでの時間だった。  
焦るクラウス。

そこへエルザが駆けつけた。

エルザの顔は見るからに怒っていた。

「クラウス様、どこをほつつき歩いていたのですか！　しかも大事な　誓いの角笛　まで持ち出して！」

壊れたことはバれていないらしい。

「その……すまんエルザ」

「神器をお持ちしました、すぐに装備して鐘楼までお急ぎください！」

初代国王ラウルがヴァツファートから贈られた三種の神器。

一つはすでに装着している　ウラグライトの指環。

エルザがクラウスに手渡したのは　豎琴の杖。

そして、空を飛べる　白輝のマント。

「これがあれば間に合う！」

歓喜にクラウスは打ち震えた。

誓いの角笛　と三種の神器を装備したクラウスが空に舞い

上がった。

「行つてくる！」

瞬く間にクラウスの姿が消えた。

残された三人は空を見守る。

三分を切った。

もうクラウスは鐘楼に辿り着いただろうか？

一分を切った。

本当に間に合ってくれただろうか？

ルーファスは懐中時計の秒針を見つめ、零時ちょうどに空を見上げた。

もし角笛が鳴らされても、ここまでは聞こえてこない。

まだわからない。

鐘の音が聖リユーイ大聖堂の方角から鳴り響いて来た。

やがて鐘の音は街のあちこちから響きはじめ、夜空には壮大な花火が華を開かせた。

そして、咆吼と共に空を舞う国の守護者ヴァツファート。

「やったー！」

ルーファスは叫びながら両手を高く挙げた。

無事に建国記念祭が幕を開けたのだ。

一方のそのころビビは。

「わっちの酒が飲めないってのか〜い！」

「ちよつと、もうキスとかしないでえ〜！！」

涙目を浮かべながらリファリスに絡まれ襲われていたのだった。

第一〇話 華の建国記念祭

《一》

埋め立て処分場のような部屋で、なぜか古風で余裕な表情でティータイムをしているルーファス。

……  
無言のままただ時間がゆっくりと流れる。

……  
カップを揺らし、底に少し溜まっているティーを回す。

……  
新たなティーを淹れて飲む。

……  
だんだんと水っ腹になってきた。

……  
時計を見たが、前に見てから三分と経っていない。

……  
カップAからカップBに小さなスプーンでティーを移し替える。

……  
途中で断念。



挙動不審になってくる。

部屋中を歩き回って、時折だれも見てないのにジャンプ。

それも飽きた。

もう限界だった。

「なんでみんなお祭りに誘ってくれないの……っ!!」  
だれにも誘われないルーファスであった。

今日は建国記念祭当日。街は賑やかに活気づき、笑顔や笑い声が絶えない。そんな日に独り自宅に引きこもっているルーファス。

もちろんルーファスはお祭りに行くたくないわけではない。  
むしろ行きたくてウズウズしている。

でも、当日まで誰にも誘われなかった!

しかし、自分から誘うのは気が引ける!

なぜなら、断られたらショックだから!

ぶっちゃけルーファスは基本的に友達が少ないのだ。

そりゃ学校じゃクラスメイトと話したりもするが、プライベートとなると引きこもりがちで、友達作りもうまくない。

ちなみに去年はどうやって乗り切ったかというと、クラスメイトが友達を誘ってる輪の中に『自分も自分も!』みたいな感じでうまく潜り込んだのだ。

こういうのはだいたい前日までに約束を取り付けておくべき

で、今年はそのタイミングが訪れなかった。

建国記念祭は都市を上げてのお祭りで、参加しない方が珍しい。それでも参加する気のない人はいいだろう。でも参加したのにはできないルーファスみたいな者からしたら、完全に仲間はずれにされているようなものだ。

だからと言って、独りでお祭りに行つてルーファスが楽しめるのか？

ルーファスの性格から言つて、独りで言つた方が疎外感で絶望するだろう。

決断を迫られるルーファス。

行くのか行かないのか、どっちなんだーっ!?

「よしっ、行こう。お祭りに行けば友達グループと合流できるかもしれないし」

規模の大きなお祭りなので、その可能性はかなり低いが。でもルーファスは腐れ縁というか、腐れ運みたいなものがあるので、案外知り合いにばったりなんてハプニングもあるかもしれない。

ハプニングね、ハプニング！

ここ重要なので三回も言いました。

いざ戦場へ赴くつもりでルーファスは旅だったのだった！

居住区からお祭りの雰囲気は漂ってくる。

道行き人々がそういうオーラを出している。

ファミリーやカップル、仮装なんかしているひとは確実にそ

うだろう。

建国記念祭には会場という会場がない。なぜなら王都全体でなにかしら行われているからだ。

一日で回るのは不可能で、参加したいイベントの時間帯が被るなんてことはよくある。

とりあえずルーファスは腹ごしらえをしようと、匂い立つ屋台街までやってきた。

「うーん、どれも美味しそうだなあ。あっちでは早食い大会の受け付けもしてるんだ」

あれも食べたい、これも食べたい、ここは迷うところだ。でもすぐお腹いっぱいになったりして、そんなに種類は食べられなかったり。

ひとが並んでいる屋台はなんだか並びたくなって買ってみたら、そんなに美味しくなかったり。

本業でやってる屋台より、自治会がやってる店のほうが安いとか、そんなこんながお祭りの屋台ではよくある話だ。

ルーファスは目移りしていると、前方から見知った空色ドレスがふわふわと通りかかってきた。

「ローゼンクロイツ！」

まさか本当に友達に会えるとは！

ローゼンクロイツは片手にフランクフルト、焼き鳥、ステーキ（串）、チョコバナナ、そしてわたあめの棒の部分の指の間にはさんで持ち、もう片手には焼きそば入りお好み焼きの上にタコ焼きを乗せたものを持っていた。

これらは運んでいるだけならまだしも、見事にある食いをしていた。ちなみにお好み焼きなどは、串ものの串をフォークのように使って食べていた。

ローゼンクロイツは口の周りに、青のりとケチャップを付けながら驚いた顔をした。

「あつ、ルーファス（ふに）」

「……一つ言ってもいいかな？」

「ところでルーファス（ふあふあ）」

「（僕の話はムシ!?）なに？」

「ちよつと手が離せないんだ（ふにふに）」

「だろうよ。明らかに持ちすぎだ。」

ローゼンクロイツは言葉が続ける。

「ボクのポケットから七味唐辛子を出してくれないかな?（ふあふあ）」

「いいよ」

「……」

ちまたではローゼンクロイツが大の辛党で、いつも七味唐辛子を常備していることは有名だ。

「このポケット?」

尋ねながらルーファスはポケットを探った。

するとローゼンクロイツは無表情のまま口を開いた。

「いやん（ふにゃ）」

「え!？」

「……言ってみただけ（ふつ）」

口元だけでローゼンクロイツがあざ笑った。

すぐに七味唐辛子は見つかった。

さらにローゼンクロイツはこんなお願いをしてきた。

「それかけてくれる？（ふにふに）　もちろんボクにじゃないよ（ふあわあ）」

「わかってるよ。どれにかければいいの？」

「全部（ふに）」

あえてルーファスはつつこまない。

ローゼンクロイツが全部と言ったら全部なのだ。言われたとおりルーファスは、わたあめにもチョコバナナにもたつぷり七味唐辛子をかけた。

「やればできるじゃないかルーファス（ふにふに）」

「なにそれ誉め言葉？」

「なにが？（ふにや）」

「なんでもないよ」

ローゼンクロイツとは会話が成立するときと、そうでないときがある。会話が成立しないレベルはいくつがあるが、まとめてちまたでは“コスモタイム”と呼ばれている。つまり小宇宙と一体化してチャネリングでもしているんだらうと、簡単にいうと“イっちゃってる”ということだ。

友達作りが苦手なルーファスだが、ときおり意思疎通が困難なローゼンクロイツと友人なのだから、実は友達作りのプロなのかもしれない。逆にローゼンクロイツみたいなのと友達になれるから、ふつうの友達ができないとも考えられるが……。

ローゼンクロイツは自分の用事が済んだので、ルーファスに

なにも言わずふわふわと立ち去ろうとした。

ここでローゼンクロイツを逃がしたらルーファスはまたひとりだ！

「ちよつと待ったローゼンクロイツ！」

「なに？（にや）」

足を止めて振り返ってくれた。

「ローゼンクロイツもひとりだろ？　いつしよに回ろうよ」

「目が回るよ（にやふにやふ）」

すぐにルーファスは言い直す。

「お祭りをいつしよに楽しもうよ？」

「キミはいつもヒマかもれないけれど、他人がそうとは限らな

いよ（ふにふに）」

「ガーン！」

ルーファスシヨック！

頼みの綱のローゼンクロイツに断られた。しかもヒマとか言われてしまった。

人混みの中に消えていくローゼンクロイツ。

その場に残されたルーファスはまた独りぼっちになったしまつた。

「帰ろうかなあ」

心が折れそうだった。

でも。

「（なんか食べてから帰ろう）」

この少しでも、少しでもいいからお祭りを体験しようという

衰しくなる気持ち。

ルーファスファイト

そんなわけでルーファスは並ばなそうな出店を見つけて、長方形のカップ入りカルポナーラを購入した。

そして買ってから気づくのだ。

「……いつものデリバリーと変わらない」

どこか落ち着いて食べるところを探して歩き出す。

そしてまたも気づくのだ。

「(飲み物いっしょに買うの忘れた)」

飲み物を探していると、こんな声が聞こえてきた。

「ちよつとそのマヌケそうな顔のお兄たん…….と思ったらル

ーたん

今日は屋台のお姉さんをやっていた魔導シヨップ鴉帽子のマリアだった。

お店の雰囲気はいつもと変わらない。なんだか毒々しい。

「なんのお店？」

ルーファスが尋ねるとマリアは、

「お祭り特製ドリンクのマリア すぺしゃるを販売してるのお。ルーたん一本買って」

と満面の笑み。

ちよつど飲み物が欲しかったところだ。

「じゃあ一本もらおうかな」

「AからXまで種類があるけどどれにしますかあ？」

「(大過ぎじゃない?)ど、どれにしようか迷うなあ」

「ルーたんにおすすめわあ、滋養強壮によく効くAAAアドリンクですよ」

「（AからXまでじゃなかったの？）……じゃあ、それもうかな」

「二〇〇ラウルになりま〜す」

「高くない？」

「だいたい二〇ラウルくらいが缶ジュースの相場だ。」

「キャンセル料は二〇〇ラウルになりま〜す」

「っこりマリアちゃん。」

「分割払いの場合は一〇日で一割りの利息がつきますよあ」

「堂々とぼったくっている。」

ルーファスは二〇〇ラウルコインを出してしまった。なんだか押していけない印鑑を押すような光景だ。

「ルーたんありがとあ（うふふっ、ちよろいわ）」

「心の声恐るべし。」

ルーファスほどこいいカモもそんなにいないだろう。いつもルーファスは押しに弱いのだ。

ちよつと落ち着いた場所で食べようと歩き出したルーファス。飲食系以外の屋台にもクジや金魚すくいやカメすくいなどなど、アクション系の屋台も並んでいる。

射的の屋台で見慣れた魔女を見つけた。

「あ、カーシャ」

「おう、へっぼこではないか」

カーシャは目の前でポルトアクション（装填作業）をしたら



イフルをルーファスに向けた。

「ああ、あっ、危ないじゃないか!」

「安心しろ、射的銃の弾丸は非対人魔弾なっておる（撃たれれば多少は痛い、ふふっ）」

ちよつと撃つてみようと思つているかもしれないカーシャであつた。

今からカーシャがやるうとして射的は、動くの得点に応じて賞品がもらえるものだ。

「どの賞品が欲しいの?」

ルーファスが尋ねた。

「特大ぬいぐるみに決まつておるだろう。もちろんそこにある三種類を全部コンプリートさせてもらうぞ」

宣言するカーシャを見つめニヤリとした店のオヤジ。

「（そうはさせるか射的荒らしのカーシャ。今年こそは一つも取らせんぞ!）」

じつはカーシャ、お祭りの射的が大の得意で大好きで、やる店やる店でことごとく狙つた賞品をゲットしていく有名人なのだ。ここの店のオヤジも毎年の建国記念祭で全敗中だ。

カーシャが的に狙いをつけて引き金を引く瞬間、店のオヤジが隠し持つていたボタンを押した。

的が一〇倍速で動き出した!

すでにカーシャが引き金を引いたあとだった。

バキューン!

スカッ

外れた。

無表情でボトルアクションをしたカーシャはライフルを店のオヤジに向けた。

「……汚いぞ」

「突然的の早さを変えちゃいけないなんてルールはねえよ」

たしかにこーゆー店は店主がルールだ。

カーシャが笑った。

「ふふふっ、いいだろう受けて立とうではないか（妾を起こらせるのとタダではおかんぞ）」

早さが変わったとはいえ、動きは規則的だ。同じ場所で照準を合わせ、的が向こうから来たタイミングで撃てばいい。

再び銃を構えるカーシャ。

店のオヤジは不敵な面構えでニヤリとしていた。

カーシャが引き金を引いたと同時に、またもオヤジがボタンを押した。

的が規則性を無視してトリッキーな動きをした！

バキューン！

スカッ

またも外れた。

「ふふふっ……」

カーシャの低い笑い声が響き渡った。

そして、ボトルアクションをしたカーシャはライフルをルーファスに向けた！

「気が散るわへっぼこー！！」

「えっ!? 僕のせい!？」

「貴様がいると妾の運気が下がるのだ。さっさと消えんと撃つぞ?」

目がマジだ。カーシャの脅しはいつもだいたいがマジだ。

怯えた表情でルーファスは後退りをした。

「撃つって……非対人なん……だよねえ?」

「接射すれば血ぐらい出るぞ」

「それって……かなり痛いんじゃない?」

「痛いぞ、ふふっ」

ここで店のオヤジが笑った。

「自分の腕を棚に上げてひとに当たるとはあ、情けねえなあ力

ーシャさんよお?」

「な、にい〜! 妾に射撃の腕がないだと!？」

完全に勝ち誇った顔をする店のオヤジ。毎年の敗北の恨みをついに果たせたのだ。

「決まった動きしかしねえ的にしか当たらねえようじゃ、実践じゃ役に立たねえぜ」

「これは実践じゃなくてゲームだろうが」

「これは俺とおまえさんのマジな勝負だ、お遊びなんかじゃねえよ!」

「言つたなオヤジ?」

「おう言つたぜ」

「サーベ大陸西部開拓時代、妾がなんと呼ばれておつたか教えてやろう」

「西部開拓時代だど!？」

ざっと五〇〇年以上前の話だ。

カーシャが囁く。

「災難・カーシャ」

店のオヤジが噴き出して笑い出した。

「ぎゃははは、たまたま同じ名前だからってウソに決まったらあ」

周りにいた客やギャラリーも笑っている。

カーシャは気にも留めなかった。

悪寒を感じたルーファスは言われたとおり消えることにした。  
猛ダツシユで。

「ギヤアアアアアアツ!!」

ルーファスの耳に届いてきた男たちの悲鳴。

今の時代もカーシャはカラミティだった。

《 一 》

災難に遭わずに済んだルーファスは、すっかり忘れていた食事をとることにした。

たまたま目の前で空いたベンチにルーファスは腰掛けた。

嗚呼、なんて青く澄み渡った空なんだろう。

ファミリーやカップルや友達同士がとつても楽しそうに行き交ってる。

「(あれ……なんだかみんなキラキラ光って見える……)」

ルーファスは熱くなった目頭を抑えながら、飲み物でも飲んで落ち着こうとした。

マリアから購入した妖しげなドリンク。

グビツと

「ブハーツ！！（まずっ!?!）」

ちよっと口に含んだ瞬間に、あまりの不味さに嘔き出してしまった。

例えるなら納豆の臭いがする赤身のドリツプを飲んでる感じだ。さらにバナラエツセンスの香りまで混ざっていて、非常に不快なハーモニーを奏でている。

ルーファスは残りのドリンクを花壇に流した。

「滋養強壮って言ってたし、きっと綺麗な花が咲くと思うよ、うんうん」

ドボドボドボ。なんか液体がサラツとしてない。口当たりも最悪。

口直しにルーファスはやけ食いをすることにした。

美味しそうなカルボナーラをフォークで食べ……食べようと

……食べようと？

「フォークもらうの忘れた!!」

食器はセルフサービスだったのだ。

が……ん……。

「（今からもらいに行くのもなあ）」

でもこのままじゃ食べられない。

だが、そこに果敢にも挑戦するルーファスだった。

フォークを使わずにカップを傾けて啜る。

果敢というか無精だった。

「(出て……)」、な、い)」

トントントントとカップの底を軽く叩いてみる。

グチャ！

勢いよくカルボナーラが顔に降ってきた。

「……………」

ソースでべっとり。

最悪だ。

しかも拭くものがない。

さらに最悪だ。

このまま顔をべったりしたままじゃいられない。

「(服で拭こうかな)」

ダジャレではなくて、やむを得ない手段だ。

そんなとき、女神がルーファスに手を差し伸べた。

「ハンカチ貸しましょうか？」

白いワンピースにつばの大きな丸い帽子。清らかな水のよう

な肌をした可憐な少女。プロンドの髪も輝き星のきらめきのよ

うだ。

思わずルーファスは言葉に詰まる。

「あ、ありがとうございます(綺麗なひとだなあ)」

レースハンカチを借りて顔を拭くと、ハンカチがべっとり、

顔もまだ不快感が残っている。

すっかり汚くなってしまったハンカチを返すに返せないルー

ファス。

「ごめん、すごい汚れちゃったので洗って返したいと思うんですけど？」

「それは愛の告白ですか？」

「は？」

「ごめんなさい、結婚とかまだ考えていません。まずはデートからはじめましょう」

「は？」

アレ……なんかこの少女、ちょっとアレな人？

少女はガシツとルーファスと腕を組んだ。

「さあ、デートを楽しみましょう」

「……いや、その、ハンカチを返そうと……」

「ハンカチなんて洗えば済むことです、お気になさらず」

「だから洗って返すって言っただけなんですけど」

「そんなにハンカチを洗いたいのなら、その水飲み場で洗いましょう。ハンカチを洗い終わったらデートをしてくださいますよね？」

……エロゲフラグだとしてもヒドイ。

詐欺か、結婚詐欺じゃないのかルーファス？

大丈夫か？ 騙されていないかルーファス？ お金を貸したり印鑑押したら最後だぞ？

しかしそこはルーファスクオリティ。

押されると弱い。

ハンカチを洗って、食べられなくなったカルボナーラを処分

して、すっかりデートの準備万端。

「では参りましょう」

少女はルーファスの腕に自分の腕をからめながらグイグイと。

「いやいやいやいや、そうじゃなくて。私たちまだ会ったばかりで名前も知らないわけだし」

「名乗ればデートをしてくださるなら名乗りましょう。ハナコとても呼んでください」

「珍しい名前だね」

「はい、適当に考えた偽名ですから」

「……………」

偽名って。明らかに怪しいだろ。

またグイグイっとハナコはルーファスの腕を引っ張った。

「では参りましょう」

「いやいやいや、まだ私が名乗ってないんですけど？」

「名乗るのはあなたの自由です。勝手に名乗ってもらって結構ですよ」

「(君のトークのほうが自由だよ) ルーファスです」

「まあ素敵な名前!」

「(勝手に名乗れって言ったたわりには反応が大きい)」

「では参りましょうか」

「いやいやいや」

またも腕を引っ張られるルーファス。

そんな二人の押し問答を木陰から見つめていた桃髪の少女。



「（ル、ルーちゃんが女のひとといるなんて……しかも美人!?）」

そんな視線を浴びているとはつゆ知らず、ルーファスはついに負けてしまった。

腕組みをして、まるでカッブルのように歩き出すふたり。

こんなスキヤンダルをクラスメートに見られたら、絶対に明日学校で茶化されるに違いない。というか、ビビも転入済みなので、クラスメートだったりする。

ハナコは楽しそうに屋台を眺めている。

「わたくし射的がしたいです。バンと音がなったり、火花が出るようなものが好きなもので」

「射的は今ちよつと危険だから行かない方が……（カーシャまだいるのかな?）」

「危険な香り……素敵ですよ。ぜひ行きましょう!」

「どうしても言うなら別の会場で見つけようよ?」

「どうしてもというほどでもないのにやめにします」

自由人だ。

とつてもルーファスは疲れていた。お祭りを楽しんでいるわけでもないに、なんか別の疲労が色濃く顔に出ている。

「……はあ」

溜め息をついたルーファスにハナコが、

「もしかしてわたくしといっしょではつまらないですか?」

「えっ、そ、そんなことないよ!」

「べつにあなたが楽しくないのは自由です。わたくしは勝手に

楽しんでいきますから」

フリーダムだ。

ぐうぐうとルーファスの腹の虫が鳴いた。

「そうだ、ごはん食べ損ねたんだった」

「あらあらお腹がお空きでいらっしやるなら早く言ってくださればいいのに。ぜひあれに参加すればよろしいと思いますよ」

ハナコが指差した先にある垂れ幕には、『マツ八大食い選手権』と書かれていた。

「そこまでお腹空いてるわけじゃないんだけどお」

なんてルーファスが言ってもムダだった。

ハナコにグイグイっと引つ張られて、受け付けで名前を強引に書かされて、いざ出場へ！

華麗に鮮やかにテンポよく事が進んでしまった。

もはやルーファスは流されるプロだ！

予選会場に集まっている参加者たち。参加費は無料ということもあり、ただ飯食らいも多い。そこで歴代予選突破者以外や推薦枠の参加者以外は、クジ引きというルールが設けられている。

こういうときだけ、逆方向の運が良いルーファスはもちろん予選参加権を獲得。

Cグループの予選に出場することになり、ルーファスはその会場へハナコと足を運んだ。

予選会場にはいかにもな人から、そうでもない人、ルーファスの知り合いまでいた。

なぜかいつも学校で突っかかってくるオル&ロス兄弟。いつも二人でいるのに、今日はどっちかわからないけど一人しかいなかった。

「おうルーファスじゃねえか。まさかおまえも参加するの  
か？」

「成り行きで……。ところで髪の毛どうしたの？」

オル&ロスといえば、レッドとブルーがトレードマーク。その色でどっちがどっちだか区別できるのだが、今日は髪の毛が黒髪なのだ。

「なんだよ、黒くしちゃいけねえのかよ？」

「に、似合ってると思うよ！」

「似合ってるわけねーだろ！」

「(褒めたのに怒られた)ご、ごめん」

オル？ロス？はハナコに気づいたようだ。

「まさかおまえの彼女か？」

「ち、違うよ！」

ルーファスが慌てて否定した横でハナコはさらっと。

「はい、婚約者です」

衝撃の一言でオル？ロス？は凍り付いた。

その隙にルーファスは慌てながらハナコをその場から連れ去った。

オル？ロス？の姿が見えなくなったところで、どっちルーファスは溜め息を吐いた。

「はあ……寿命が縮まるかと思ったよ」

「そんなにわたくしと結婚できることがうれしいんですか？」  
疲れすぎてつつこむ気力もなかった。

ルーファスがぐったりしていると、その肩をだれかがポンと叩いた。

「よっ、ルーファス！」

その知りすぎてる女性を見てルーファスが凍り付く。

ある意味、今は一番見られたくない相手だった。

一族の証である赤系の髪色　カーマイン色の髪をなびかせているリファリス。

「その娘こルーファスの彼女かい？」

家族に見られた！！

「はい、婚約者です」

ぐおーっ、勝手に答えてるしハナコ！

ルーファスはふたりの間に慌てて割って入った。

「違うから、今日知り合ったばかりのひとだから！」

否定はちゃんとしたのに、リファリスは真剣な眼差しでルーファスを見つめ、

「愛に時間なんて関係ないよ、大切なのは本当の自分の気持ちさ。彼女さん、出来の悪い弟を頼んだよ」

ハナコに顔を向けて肩をガシツとつかんだ。

「はい、お姉様」

なんかふたりの間で成立している。

もう否定するのめんどうなのでルーファスは話題を変えることにした。

「ところでリファリス姉さんも出場するの？」

「タダ飯食えるって聞いたら参加しないわけにはいかないだろう？ それに優勝賞品の中にビール一年分があるんだよ、一年分だよ、一年分？」

酒と聞けばなんでも飛びつくリファリスであった。

そんなこんなをしていると、スタッフが参加者を呼びに来た。

「みなさんCグループ予選が間もなくはじまります。会場に急いでください！」

いつに予選がはじまってしまおう。

強引に参加させられてしまったが、ここまで来たらルーファスもやるしかない。

「……おなか痛くなってきた」

緊張するとお腹が痛くなるルーファス。はじめからルーファスが勝てるとはだれも思っていないだろうが、やる前からこれなんて情けない。

それでもルーファスは予選会場に立った。

応援席にはハナコの姿があった。

「ルーファスさんがんばって！」

と言われても、負ける気満々のルーファス。

立ち食い形式で、テーブルの上には山盛りのカステラ。口の水分が吸われる食べ物、代名詞と言っても過言ではない。大会運営者は確実に参加者の命を狙っているとしたか思えない。

山盛りのカステラを見てルーファスの顔がやつれた。

会場にはなにやらアナウンスが流れていた。

《なお、緊急の場合にはドクターが待機しておりますのご安心ください》

そのドクターというのが、ルーファスの知り合いだった。た。

黒衣の医師　リユーク国立病院の副院長ディーだった。

このディーという医師は、いつもルーファスのことをアレな目で見るとアレなひとだったりする。今月入院したときもいろいろ大変だった。

「ほう、ルーファス君も出場するのか。ぜひ彼には倒れてもらいたいものだ」

これは絶対に倒れられなくなった！

ディーを見つけたせいで俄然ヤル気を失ったルーファス。

ここで追加のアナウンスが流れる。

《なお、飲み物はコーラのみとさせていただきます》

炭酸水……しかもコーラって、マジで参加者を殺す気だ。

そして、ついに予選Cグループの戦いが幕を開けた！

早くも試合放棄のルーファスはマイペースでカステラを食べ、

コーラ飲み、ちよつと休憩！

次の瞬間、会場からルーファスに猛烈なブーイングが浴びせられた。

仕方がなくルーファスは大きく開けた口にカステラを折り込んだ。

「うっ！」

そして見事にのどに詰まらせた！

呼吸困難で青ざめていきながらルーファスは見た。  
こつちを見て妖しく微笑んでいるディーの姿を……。

ここで倒れるわけにはいかない！！

ルーファスはコーラを一気に流し込んだ。

「うえ……ゲホゲホッ……」

むせるむせるむせ返る。

どうにかカステラを流し込んで一命を取り留めた。

ルーファスが独り喜劇を演じているころ、ほかの参加者たちは激戦を繰り広げていた。

《おおつと、ゼツケン二番のクリスチャン・ローゼンクロイツ選手が現在一位！》

同じグループにローゼンクロイツも参加していたのだ。

そして、会場からはメガネっ子の追っかけが声援を贈っていた。

「ローゼンクロイツ様あゝっ！（ああ、カステラを目に留まらぬ早さで食べる姿も神々しいです）」

ローゼンクロイツのファンクラブも立ち上げているアインだった。

《二番手につけているのはゼツケン五番オル選手だ！ん、ここで審査員から物言いがつきました》

オル？がマツチヨなお兄さんたちに連れて行かれる。と思ったら、隠れていたもうひとりのオル？も連れて行かれた。

《なんとオル選手、双子で交互に食べていたことが発覚して失格だーっ！》

やっぱり二人でオル&ロスなのだ。

《オル選手が失格になったことで二位つけたのはゼッケン三番  
リファリス・アルハザード選手。なんと今回の大会には姉弟で  
出場、しかし弟のゼッケン一三番ルーファス・アルハザード選  
手は姉に大差を付けられてなんとビリだーっ！》

アクシデントに見舞われたルーファスがビリだった。

そして、実はこの予選にはアクシデントに見舞われてむせ返  
っているのもうひとり。

桃髪を揺らして死にそうになっているのはビビだった。コッ  
ソリ出場したのだがまったく目立たず。

カステラ地獄に苦しむルーファス。

「(もう一生食べたくない)」

そんなルーファスにハナコからエールが贈られる。

「ルーファスさん、負けたらわたくしが結婚して慰めてあげま  
す！」

応援というか求婚だった。

ここで負けたら結婚させられる！

ルーファスはカステラを口の中に詰めて詰めて詰める！

やわらかかったカステラが口の中で岩のように硬くなる！！

「うっ……ぐ……(苦しい……)」

ルーファスが白目を剥いた！

バタン！

ついにルーファスが倒れた。

さらに遠くの席では桃髪の少女も倒れていた。



妖しい副院長の眼がキラーンと輝く。

「ルーファス君、今私が診てあげよう!!」

救護テントからディーが飛び出した。

ビビスルー。

《三》

青空に浮かんだように見える丸い帽子。

ハナコがこちらを覗き込んでいる。

気絶からやっと目を覚ましたルーファス。

「ううつ……ここどこ?」

枕とは違う柔らかさを持っていて、とても心が安まるような

温かさ……。

「膝枕!」

ルーファスは顔を隠して慌てて飛び起きた。

「大丈夫ですかルーファスさん?」

「だ、大丈夫です!」

ベンチに座っているハナコの姿。ここで膝枕をされていたようだ。

で、ここってどこ?

賑わいを見せるお祭りが少し遠くに見える。木陰にあるベンチで休んでいたようだ。

「あれ……大食い大会は?」

「もう終わりましたよ。ローゼンクロイツという方が予選を突

「破して決勝戦でも大差を付けて優勝しました」

「私は気絶したんだよね？ 医者に変なこと……」

「黒衣のお医者さんに貞操を奪われそうになっていましたが、どうにかわたくしが連れて逃げました」

「(……貞操って)あ、ありがとう」

いったいデイーはルーファスになにをしようとしたんだ？

というか、ハナコはルーファスを連れてよく逃げられたものだ。

ルーファスはぐったりしながらハナコの横に腰掛けた。

「はあ……お祭りなんて来るんじゃないかった」

「わたくしはよかったですよ」

やさしい顔をしていたハナコを見て、ルーファスはふっと笑みを溢した。

「そうだね」

「では次の場所に参りましょう」

「は？(なんかもう十分満喫したというか、疲れたんだけど)」

断固としてベンチから立ちたくないルーファス。

ハナコはガシツとルーファスの腕をつかんでグイグイっと引っ張った。

「まだまだお祭りはこれからですよ」

「そ、それはそうなんだけど……」

二人がこんなやり取りをしていると、そこへある女性が現れた。

「まあ、ルーファス。そこにいるUFOハットのお嬢さんは彼女さんかしら？」

ルーファスの母親ディーナだった。

……また家族に見られた。

「はい、婚約者です」

またこのパターン！！

慌ててルーファスが割って入った。

「違うから、今日初めて会ったひとだから！」

否定はしてみたが、ちゃんとディーナに伝わっただろうか？

「今日初めて会ったのに結婚なんて、ルーファスも隅に置けないわね、うふっ」

伝わってなかった。

勘違いの修正がめんどくさいので、ルーファスは話題を変えることにした。

「ところで母さん、なにしてるの？」

「それがローザとはぐれてしまって困っていたところなの」

「（家族と会うなら、せめてローザにだけ会いたかった）そうなんだ、いつしよに探そうか？」

「そんな悪いわ、彼女とのデートを邪魔しちゃ。それじゃあまたねルーファス、ファイト」

両手にこぶしを握って応援された。

恥ずかしさのあまりルーファス大ダメージ。

もうルーファスは一刻も自宅に早く帰りたいかった。

王都を挙げてのお祭りで規模も大きいのに、なんで知り合い

に高確率で会うのだろうか？

ルーファスは変な方向に運が良いらしい。

「それでは参りましょう、次はお父様にご挨拶ですね」

突然なにを言い出すんだこのハナコは。

「どういうこと？」

「結婚をするのであれば、ご家族全員に会うのが筋かと」

「会わなくていいから、それよりお祭りはどうなの？」

「あつ、そうですね。今はお祭りのほうが大事でした。ではなにか楽しいことを探しに参りましょう」

「……………（しまった）」

父親との面会は避けたが、代わりにやっぱりお祭りからは逃げられなかった。

再びお祭り会場に戻ったハナコはさっそく楽しいことを見つけたようだ。

「ルーファスさんあれを見てください。のど自慢大会ですって」

「……………まさか」

「ぜひ出場してください。わたくし歌も大好きですから」

「自分が出ればいいんじゃない？」

「大変です、早くしないと受け付けが終了してしまいます！」

ぜんぜんルーファスの話を聞いてなかった。

そんなわけで強制的にエントリーさせられたルーファス。

「……………最悪だ、歌とか苦手なんだけど」

考えたただけでお腹が痛くなってきた。

「大丈夫ですよルーファスさん。歌は魂さえこもっていればみんなに伝わります」

「そういうものかなあ」

「そういうものです」

「ジャイアントゴードラっていう歌手は魂で歌ってるけど、ひどい音痴って話だよ。話に聞くと、その歌声は生きとし生けるものを震え上がらせて、発する音波はガラスをも砕き、戦場でその歌を聞いた敵の兵士たちは絶叫しながら死んでいったとか」

「あ、予選がはじまりましたよ」

ぜんぜんルーファスの話を聞いていなかった。

老若男女が出場するのだ自慢大会では、歌のバリエーションも豊富だ。

流行りの曲からムード歌謡まで、楽しそうだったり、真剣そうに歌っている。

そんな出場者たちのヤル気を見て、どんどんヤル気が失われていくルーファス。

「やだなあ、みんなの前で歌うなんて恥ずかしいよ」

お腹が不穏な音が立てている。

ここでルーファスはある重大なことに気づいた。

「そういえばなにを歌えばいいの？」

勝手にエントリーを進めたのはハナコで、その際に曲目も勝手に決められていた。

「それはイントロがかかってからのお楽しみです」

「いやいやいやいや、歌えない曲だったりすると困るし、少し

は練習しておきたいんだけど？」

「大丈夫ですよ、歌は魂ですから」

ぎゅるるるゝとルーファスのお腹は激しく不穏な音を鳴らした。

出たくもない歌自慢に出ることになり、曲目も本番までヒミツという嬉しくないサプライズ付き。ルーファスは今にも即倒しそうだった。

そんなルーファスの耳に聞き覚えのある歌声が届いた。

舞台裏からそっと会場を覗くと、そこには一族の証である赤系の髪色　ローズ色の髪をなびかせて歌っているローザの姿があった、

澄み渡る清らかな歌声。ローザが歌っているのは聖歌だった。老人たちがローザに向かって拝んでいるのは聖歌だった。

「ローザ姉さん、また歌がうまくなってるなあ」

感心するルーファスの顔をハナコが見た。

「あの方もルーファスさんのお姉さんなのですか？」

「私は三人姉弟なんだ。長女のリファリス姉さん、次女のロー

ザ姉さん、そして私が三番目」

「わたくしとしたことが、お姉様となる方をもうひとり知らなかったなんて、今すぐご挨拶して参ります」

舞台上に飛びだそうとしたハナコの腕をルーファスはつかんだ。

「今歌ってる最中だから、あとにしようよね、あとにさ？」

「ご挨拶はなにかと早めに済ませておいた方が印象もよくなりますし」

「予選の邪魔した方が印象悪くなると思うけど」

「ルーファスさんがそこまでおっしゃるなら、今回は特別に妥協して差し上げましょう」

なんか知らないけど上から目線。

それにしてもローザの歌声はすばらしく、心が洗われる気分だ。もしもこの場所に犯罪者がいたら、自首しそうなくらい心に染みいる歌だ。

「じつは俺、さっき爺さんからサイフをすったんだ。だれか捕まえてくれよ！」

「実はオレも、オレオレ詐欺のリーダーなんだ！」

「俺なんて今から人殺しをしようと思ってたところなんだ」

「なんだよみんなそんなことぐらいで、俺なんて前科一〇〇犯の大悪党だぜ。早く捕まえてくれよ！！」

なんかいつぱい釣れた。

「す、すごいよローザ姉さん」

ルーファスは姉の才能に感嘆した。

そして、姉弟の中でなんの才能もない自分を思っでネガティブになった。

「姉さんたちはあんなにすごいのに、僕なんか僕なんか……生まれてきてごめんさい」

ルーファスの両手をハナコの温かい手がぎゅつとつかんだ。

「凡人であるほうがよっぽど珍しいと思いますから、ルーファスさんも誇りを持って生きてください」

ぜんぜん励まされてないし、ルーファスは凡人というよりへ

っばこだ。ハプニング吸引体質で、平凡とはほど遠い。

今だって変な押し掛け女房に憑かれてるし！！

ローザが歌い終わると、感動のあまり会場は静まり返った。

ハツと我に返った審査員が一〇〇点満点の鐘を鳴らした。本戦出場が決定した。

次に参加者もルーファスの知り合いだった。

「あ、パラケルスス先生」

「お知り合いの方ですか？」

ハナコが尋ねた。

「うん、私が通っている魔導学院の先生なんだ」

「まあルーファスさん、魔導学院の生徒さんなのですか？」

「いちようクラウス魔導学院に通ってるんだけど」

「あ、綺麗なちようちよが飛んでますよ！」

スルーされた。

この都市には多くのクラウス魔導学院の生徒が住んでるとはいえ、名門である学院名前を出せばそれなりにみんな食いついてくる話題なのに……。さらに『まさかルーファスが!』『みたいな感じで、みんなけっこう驚いてくれる話題なのに……。』

「僕の話ってそんなにつまらないかな……」

すっかり落ち込んでしまった。

そんなルーファスをほっといて、予選は進んでいく。

パラケルススが渋い歌声で歌い出した。

歌詞の内容はおおよそ、酒に肴に義理人情、男女の色恋沙汰の舞台は港町。



こぶしを回す上級スキルを駆使して歌われているのは演歌だ！

演歌と言えば魂の歌。

また老人たちが拝みだした。

歌が単純に上手い下手という要素のほかに、魔力を持っている者はそれが歌に反映されることがある。今ある魔導の原型は詩による言霊であり、歌と魔導は古くから密接な関係にあるのだ。

会場から声があがる。

「おやじとおふくろを温泉に連れて行ってやろう」

「そういえば、このごろ両親にありがとうって言っていないな」

「昔別れた妻とやり直そう」

「やっぱりわたし、あのひとを追って旅に出るわ！」

なんかいっぱい釣れた。

そんな感じでパラケルススも予選を突破したのだった。

予選は進んでいき、そろそろルーファスの出番も近付いてきた。

ハナコが笑顔でルーファスにある物を手渡す。

「ルーファスさん、急いで衣装を用意しましたから来てくださ

い」

「え？（いつの間に）」

「きつと似合うと思います」

「あ、ありがとう……」

衣装を着て歌うなんて本格的だ。下手な歌を披露すると、赤

っ恥をかいてしまっ。

でもせっかく用意してもらったものを断れないルーファス。  
出番も近いので急いで着替えることにした。

舞台裏の影で人に見つかからないうちに着替えようとしている  
と、たまたま誰かが通りかかってきた。

「ルーたんこんなところ会うなんて偶然ですねえ」  
現れたのはマリアだった。

「あれマリアさんこんなところで？」

「一稼ぎも終わったからのど自慢を観に来たんです」

「そうなんだ」

「もしかしてルーたんも出場するんですかあ？」

「まあ成り行きで……緊張してお腹は痛くなるしのはカラカラだし」

「歌う前にのどがカラカラなんていけませんです。これでも  
飲んでください、特別定価五〇ラウルですよ」

あからさまにルーファスはイヤそうな顔をした。

ぼられるという感覚はなく、ただただあの不味さが蘇ってきたのだ。

「前に買ったドリンク……言いづらいですけど、ちょっと私の口には合わなくて」

「ごめんなさい、口に合わないドリンクなんか勧めちゃって、ぐすん」

まん丸な瞳で涙ぐむマリア。

慌てるルーファス。

「ごめんなさい、きつと僕の口に合わなかっただけで、本当は美味しかったんです」

「そんなフォローしてくれなくてもいいですう、ぐすん。不味かったからもう二度とマリアからドリンク買ってくれないんですね、ぐすんぐすん」

「買います買います!」

「六〇〇ラウルですう、ぐすん」

「……え?」

微妙な値上がり。

ルーファスが若干渋ったのを見てマリアはさらに泣きはじめた。

「ルーたんひどいですう、買ってくれるって言ったのに言ったのにい」

「買います買います買わせていただきます!」

「七〇〇ラウルですう」

「……買います。七〇〇ラウルでいいんだよね(また値上がりした)」

ルーファスはサイフから七〇〇ラウルを出して渡した。

今まで泣いていたのがウソのように、というかウソだけど、ニツコリ笑顔のマリアちゃん。

「毎度アリですう (ちよろいわルーファス)」

やっぱり心の声がダークだ。

さっそく買ったドリンクをグビグビと飲んでみた。

鼻を抜けるフルーティーな香。甘さもほどよく、さわやかな

くらいの酸味もほどよい。

ルーファスは一気に飲み干した。

ちょうどそこへのど自慢のスタツフがやって来た。

「ルーファス・アルハザードさ〜ん！ もつ出番なので急いで  
くださ〜い！」

「はいはい、ずぐっ……に（あれっ、のどの調子が……）」

なんだかのどのつまりを感じながらも、今はとりあえず急いで着替えて舞台に向かうことにした。

ついにルーファスの出番がやって来た。

舞台袖から出てきたルーファスを見て観客たちは……失笑。

腕にそうめんの滝みたいなのがついた純白の衣装。パンタロンの丈があつておらず、『殿中でござる！』みたいな場面にでてきそうな、裾を廊下にズルズル引きずる着物状態だ。

この姿を舞台裏からこっそり見ていたビビも幻滅せずにはいられなかった。

「ルーちゃん……ダサイ」

じつはビビものど自慢と聞いてコッソリ予選に参加しようとしていたのだ。

「（早食いでダメだったけど、歌ではイイとこ見せるんだから〜）」

意気込んでいるビビちゃんであった。

舞台上ではルーファスが緊張と恥ずかしさで泡を吐く寸前だった。

「（早く終わって……このままだと僕の人生が終わる）」

なかなか流れないイントロ。

変な衣装で壇上に立たされ、羞恥&放置プレイだ。

しかも、客席にはローザとディーナの姿が……。

そしてようやくイントロが流れはじめた。

ルーファスは眼を剥いた。

「(この曲って……)」

考えているうちにイントロが終わってしまふ！

「(こうなったらめいっばい歌ってやる!)」

大きく息を吸いこんだルーファスは、歌い出しと共に大声を響かせた。

「おーれはジャイアント、鬼軍曹」

ホゲ〜！

ルーファスの声とは似ても似つかない地の底に棲む悪魔の呻き声。

この世の終わりを知らせる悲鳴。

次々と倒れる観客たち。

揺れる地面、碎ける壁、天を漂う雲が割れた。

そして轟く雷鳴。

ルーファスの歌声、天変地異のごとし！

もともとルーファスはこんなに歌が下手なわけではない。マ

リアからもらったドリンクのせいだ。

救護隊によって運ばれていく人々。

未曾有の大惨事の中、もっと早く倒れていたのは ほかな

らぬルーファスだった。

自分で歌って自分で気絶したのだ。

《四》

青空に浮かんだように見える丸い帽子。

ハナコがこちらを覗き込んでいる。

気絶からやっと目を覚ましたルーファス。

「ううっ……ここどこ？」

枕とは違う柔らかさを持っていて、とても心が安まるような温かさ……。

「膝枕!？」

ルーファスは顔を隠して慌てて飛び起きた。

「大丈夫ですかルーファスさん？」

「だ、大丈夫です！（さつきと同じパターンだ）」

どうやらまたベンチで膝枕をされていたらしい。

とりあえず目を覚ます前の記憶は舞台上上がったあたりから途切れている。

気絶する前から緊張で記憶が飛んでいたのだ。

「のど自慢大会はどうなったの？」

ルーファスが尋ねると、

「セットが壊れ、運営者も病院に運ばれたことから一時中止になりました」

「ぼ、ぼくのせい？」

「はい、そのとおりです。怒った観客が暴動を起こしてルーフ

アスさんを襲おうとしましたが、どうにかわたくしがお連れて逃げて参りました」

「あ、ありがとうございます」

逃げ切ったのはいいが、今度のことが心配だ。

ぐったりしたルーファス。

「もう十分すぎるくらいお祭りを満喫したし……帰ろうかな？」

「さあ参りましょう」

華麗にスルー。

祭りが終わるまで解放されないかもしれない。

会場に戻り、今度はなにをやらされるのかとドツキドキのルーファス。ハナコがなにを見つけないのを祈るばかりだ。

「ルーファスさん、あれを見てください！」

見つけてしまったか……。

ハナコが指差す垂れ幕を見てルーファスはゾツとした。

「あれは無理だから、絶対に僕なんかじゃ無理だから勘弁してよぉ！」

「そんなことありません。やる気があればなんでもできます。

夢はきつと叶うんです」

「べつに夢じゃないし」

「それに噂によると魔導学院に通っていらつしやるとか」

「噂じゃなくて私自身が君に言ったんだけど」

「魔導学院の生徒さんならきつと良い成績を残せるでしょう！」

「だから無理だつてあんなの！」

ルーファスがピシッと指差した垂れ幕には、『天下一魔闘会  
くアステア王杯』の文字が。

魔導な盛んなアステア王国では、魔導の腕を競い合う大会が  
多く開かれている。その中でも天下一魔闘会とは、魔導だけ  
なく肉体も駆使した、魔導+武闘の格闘技大会なのだ。

「花火と喧嘩は王都の華と言われていきますから、きつと楽しめ  
ると思いますよ」

「そんな言葉あつたっけ？」

「今考えました」

「そ、そうなんだ……でもとにかく少年漫画みたいなバトルは  
私にはムリだよ」

たしかにバトルマンガにルーファスは向かないだろう。

そんなバトルマンガによくある展開がルーファスを待ち受け  
ているのだ。

もやしっ子のルーファスがそんな大会に出場したら……。

「殺されるよ。ルール上は殺人とかダメってなってるけど、魔  
法を食らった痛いし、殴られたら痛いし」

「それでも男ですか、軟弱者！」

バツシーン！

ハナコの平手打ちがルーファスの頬に炸裂。

ルーファス気絶。

軟弱すぎるルーファスだった。



「それでは予選、第三回戦　はじめ！」

レフリーの声でルーファスはパツと目が覚めた。

気づいたらリングの上。

目の前にはよく知ってる先輩の姿。

「すまないなルーファス。たが私はここで負けるわけにはいかない（今年こそはクラウス様の前で優勝してみせる！）」

クラウスの護衛任務などをしているエリート中のエリート魔剣士エルザだった。

今日はルール上、剣こそ装備していないが、普通にやってルーファスが勝てる相手ではなかった。

「えっ、えええっ!?（なんでエルザさんと戦うハメになってるの!?)」

しかもリング脇にはカーシャの姿まであった。

「負けたら承知せんぞルーファス！」

エルザとカーシャは仲が悪い。そんなことにまで巻き込まれてしまったルーファス。

さらにハナコからエールが飛ぶ。

「負けても勝っても結婚しましょうね！」

もう雁字搦めがんじがらで逃げられない感じだ。

ルール上は負けを認めるか、ダウンするか、リングから落ちると負けになる。

ここでもし負けを宣言したら、きつとカーシャに殺られる。言い訳をするためにも、善戦をしなくてはいけなかった。

かと言ってルーファスはひとに攻撃を仕掛けるようなマネはしたくなかった。

そこで取った行動は、やっぱり逃げる！

「エルザさん攻撃しないでくださあ〜い！」

「逃げるくらいなら負けを認めるルーファス！」

ルーファスはチラッとカーシャを見た。

「（ルーファス、負けたらヌッコロスぞ……ふふふっ）」

口に出さなくてもカーシャの声はちゃんとルーファスに伝わった。

エルザが魔法を繰り出そうとしていた。

「すまんルーファス、できる限り痛くはしないつもりだ」

「痛いイヤです」

「ピコ・エアボール！」

空気の塊がドッジボールのようにエルザから投げられた。

ルーファスは昔からドッジボールで逃げるのだけは得意だった。

「うわっ!？」

叫びながら紙一重でエアボールをかわした。

「まだまだゆくぞルーファス！ ピコ・エアボール三連発！」

バレーのレシーブのようにバシン、バシン、バシンとエアボールを飛ばした。

「痛いイヤです！」

ルーファスは必死に一発目をかわし、二発目もかわしたが、三発目は逃げたその場所に飛んできた。

「ぐわっ！」

腹を殴られたような衝撃。

ルーファスの身体がリングサイドギリギリまで吹っ飛んだ。かかところがリングからはみ出し落ちそうになる。

「おつとととと……落ち……ない！」

ルーファスはどうにか踏ん張った。

さっきのエルザの攻撃は最初の二発が誘導だったのだ。わざと相手に逃げ道をつくることにより、逃げ場を絞り込んだのだ。

エルザが構えた。

「食らえルーファス！」

リングサイドでもう一度エアボールを食らったら、確実にリングアウトだ！

「エルザさんのヒミツ言いますよ！！」

咄嗟にルーファスの口を突いて出た。

思わずエルザの動きが止まった。

「なにを言う気なのだルーファス？」

「エルザさんの初恋の相手も知ってますし、どうやってフラられたかも知ってますし、はじめてのチューの相手とその場所も

僕は知ってるんですよ！！」

「ひ、卑怯だぞルーファス！」

慌て出すエルザ。

そのようすを見ていたカーシャはルーファスに親指を立てて見せた。

「グツジョブだルーファス（ぜひ妾もエルザの弱みをつかみた

いものだ」

まさかの卑怯な戦法にエルザは葛藤した。

「(こんなところで負けるわけには……)」

しかし、エルザの目にチラツと入ったその姿。

「(クラウス様!?)」

クラウスが予選の視察に来ていたのだ。

エルザは戦意を失った。

「私の負けだ。ルーファスに勝ちを譲る。しかしルーファス、今後の試合で無様な戦いを見せたら承知せんぞ！」

「は、はい！」

なんか勝ってしまった。

しかもスゴイブレッシャーを掛けられた。

勝ったのにちつとも嬉しくない。

ルーファスが試合を終えて戻ってくると、別のリングではファウストとセイメイが激突していた。

魔導学院の教師対決だ！

黒魔術を得意とするファウストと東方魔導の使い手セイメイ。ファウストは問合いを取る。

「クククッ、まさか同じ学院の教師と第一予選から当たるとは」

「ファウストちゃんと手合わせするのははじめてねえん！」

「イースタンマジックとは初めて戦う。じつに興味深い」

セイメイの操る魔導は一地域でのみ発達した魔導。元を辿れば同じでも、派生や進化の過程が違えば、主流の魔導では対抗

手段を取るのがなかなか難しいのだ。

直接的な武器の使用は認められていないが、魔導具の使用は三つまで認められている。これが切り札となる。

魔導具マニアのファウストがなにを出してくるか見物だ。

ルーファスが食い入るように見ていると、その後ろからだれかが近付いてきた。

「やあルーファス」

「クラウスじゃないか、こんなとこ来て平気なの？」

「主催者ということになっていいるから、予選の見学くらい平気だろう。ところでエルザに勝ったそうじゃないか？」

「まあ、勝ったというかなんというか」

「ちょうど来たときには勝負はついていたみたいで、どんな負け方をしたか知らないけど、君に負けたせいで酷く落ち込んでね。修行の旅に出るとか言い出して留めるのに一苦労したよ」

「ごめん」

「ルーファスが謝ることじゃないさ。その調子で優勝目指して頑張ってくれよ、応援してるよ」

そう言つてクラウスは去つてしまった。

なんか変なプレッシャーをかけられてしまった。

ぎゅるる〜。

ルーファスのお腹が不穏な音を立てた。

休憩もままならないうちに、ルーファスの予選第二回戦がじまろうとしていた。

呼ばれてリングに上がったルーファス。

もうひとりリングに上がったのは黒い翼を持った女。

ルーファスはツバを飲んだ。

「……今度こそ死ぬかも」

大会のルール上、殺しは御法度なのでたぶん平気。事故死はあるかもしれないけど。

ルーファスの対戦相手はエセルドレーダという悪魔だった。

浅黒の肌に銀の長い髪、金色の瞳が獲物を捕らえ、漆黒の翼でどこまでも追い詰める。

ボンテージ姿はどこか女王の風格を魅せている。

しかし、この悪魔は女王ではなく、ある人物の仲魔である。

その人物こそが、世界で三本の指に入ると謳われる魔導士アレイスター・クロウリー。クラウド魔導学院の学院長その人だ。

エセルドレーダはクロウリーの秘書であり、その主の力を考えれば当然彼女の實力も計り知れない。

もうルーファスは心に決めていた。

レフリーが合図する。

「はじめ！」

その次の瞬間にはルーファスは口を開いていた。

「僕の負けを……ボギヤツ！」

ルーファスが言い終わる前に、エセルドレーダは目に留まらぬ早さで、ボディに一〇発、アッパーを一発、浮き上がった身体に空かさず回し蹴りで一発。

鼻血が噴き出た方向と左右対称にルーファスがぶっ飛んだ。

華麗なKO。

無様なリングアウト。

そして、大会最速の勝利記録と、同時に敗北記録を樹立したのだった。

夜は深く染まり、月と星がきらめきながら歌う。

王都アステアの横を流れるシーマス運河も静かな調べを奏でていた。

目を覚ましたルーファスはすぐに気づいた。

「またか……」

気を失って、またハナコに膝枕されていた。

今度はベンチではなく、運河のほとりの芝生だ。

今日はとてもルーファスにとって疲れた一日だった。それももうすぐ終わる。建国記念祭はじきに幕を閉じようとしていた。

ただ一部の人間たちは二次会三次会と称して朝まで飲むつもりだが。

膝枕からルーファスは逃げようとしなかった。

心地良くて溜まっていた疲れが取れていくような気がする。

微かに聞こえてくる祭りの音が、なぜだか寂しさを募らせる。何度も来るんじゃないやなかった、何度も帰ろうと思ったのに、今はそれをルーファスは懐かしく感じていた。

「お祭り楽しかったよ、君といっしょに回れて」

「わたくしも楽しかったです」

「でも終わっちゃうんだね」

「家に帰るまでがお祭りです」

「それを言うなら遠足じゃ？」

「お祭りも遠足も思い出を家まで持ち帰るのは同じですよ」

「そうだね、思い出はちゃんと忘れず持ち帰らなきゃね」

「なんだか雰囲気バリアをつくっちゃってるお二人さん。」

そんな二人の間に猛ダツシユで割って入ってきた仔悪魔がいた。

「ルーちゃんやっと思つたよーっ！」

ピンクのツインテールをジタバタさせながらビビが駆け寄ってきた。

ビビはお二人さんの前にビシツと立った。

「ルーちゃんこのひとだれ？」

じと〜とした眼でビビはルーファスを見つめた。

「答えたのはもちろん！」

「もちろん婚約者です」

「ハナコだった。」

「えええ〜〜っ!？」

「思わず叫び声をあげたビビ。」

「ビビちゃんシヨック！」

慌ててルーファスは否定する。

「今日初めて会ったばかりで結婚なんてとんでもないよ。もちろん付き合ってもないんだし」

「じゃそれなに？」

「ビビはお二人さんを指差して言葉を続ける。」

「どう見ても膝枕だよええ？ ホントのホントはどーゆー関係



なわけ？」

再びじとじととした視線。

慌ててルーファスは飛び起きた。

「誤解だつて！ 気を失つて気づいたらこうなつてただけで、不可抗力だよ！」

「ホントかなあ？ じゃなんで早く起きないわけ？」

またもじとじとした視線。

ハナコも立ち上がった。

「それでは参りましようか？」

「はっ！」

ルーファスとビビの声が重なった。

またお祭りで大変な目に遭わされるのだろうか？

いや違つた。

もつと衝撃的なことが起ころうとしていた。

ハナコの唇がルーファスの頬に触れた。

チュツ

「今日は本当に楽しかったです。これがわたくしからのお礼です」

キスがお礼なのか！？

ビビちゃん固まる。

しかし、本当のお礼はこれからだった。

な、なんと、突然ハナコがスカートをめくり上げたのだ。

しかもノーパン！！

いや、ルーファスが驚いたのはそんな些細なことではなかつ

た。

「ちんこー！？」

思いつきり口に出してしまった。

良かった、口に出したのがビビじゃなくて。

まさかのハプニング発生。

すっかり少女だと思いついていたら、雄しべがついていのだ。

「ルーファスさんがくれたお汁の力、その力で華を咲かせて見せましょう」

汁ってなに汁って？

ルーファス汁？

そして、さらに衝撃的なことが起ころうとしていた。

ハナコを雄しべを空に向けた。

「玉屋~~~~っ！」

それって股間についてる……ではなかった。

ハナコの股間から発射された二つの玉が夜空に大きな華を咲かせた。

煌めく花火。

それは魔力の煌めきだった。

大輪の華が散ったとき、ハナコの姿もどこかに消えてしまっていた。

呆然と立ち尽くすルーファス。

「……………」

眼に焼き付いた光景は一生忘れることはないだろう。

ハナコの花火。

しばらくしてビビが現実世界に復帰した。

「ル、ルーちゃん……今のつて？」

「私に聞かないでよ……それにしても、だれだったんだろう、あの子？」

「変態だったのは間違いないと思うけどお」

最後の最後にだいぶ変態だったことは間違いない。

気を取り直してビビは笑顔でルーファスの顔を覗き込んだ。

「ねえルーちゃん！」

「なに？」

「来年のお祭りは二人でいっぱい楽しもうね」

「え？」

「そんじゃまた明日学校でねえ。ばいばい」

ビビはスキップをしながら去ってしまった。

「僕も帰ろう」

家路につくルーファス。

ちようと建国記念祭も終わりを迎えた時刻だった。

また来年、きっと楽しい思い出がルーファスを待っていることだろう。